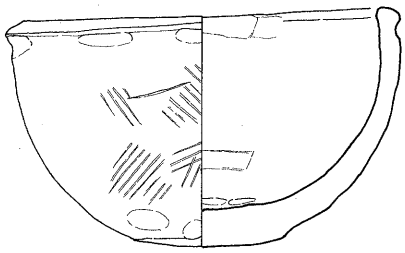
太宰府市の文化財　第66集

太宰府・佐野地区遺跡群　16

－佐野土地区画整理事業に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書－



雛2SD002茶色土出土

２００３

太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財　第66集

太宰府・佐野地区遺跡群　16

雛川遺跡　第２次調査
上川久保遺跡　第１・２次調査

２００３

太宰府市教育委員会

報告地周辺の環境（小郡市上空より北西を撮影：2002年10月）
【撮影：（株）写測エンジニアリング】

序

本書は、佐野土地区画整理事業に先立って、平成２年度ならびに平成６年度に実施いたしました埋蔵文化財発掘調査報告書です。佐野土地区画整理事業は、昭和61年度に事業計画決定がなされ、その翌年度から事業に先行する佐野地区遺跡群の発掘調査を実施してまいりました。

佐野地区遺跡群の調査からは、原始・古代における歴史、中でも日本の国家形成史を考える上で重要な位置にある太宰府にあって、古代の国家的事業と考えられる官道の確認をはじめ、わが国の歴史を考える上で貴重な多くの成果を収めています。

今回報告いたしております調査地からは、古墳時代の建物跡をはじめとする、当時の社会を考える上で重要な遺構・遺物が出土しております。

本書が文化財保護の一環として実施された記録としてはもとより、文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財保護行政に対してご理解いただきました皆様をはじめ、関係された諸機関の皆様方に心からお礼申し上げます。

太宰府市教育委員会
教育長　關　敏治

例言

1.本書は、太宰府市が進める佐野地区土地区画整理事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。掲載する調査は、上川久保遺跡第１・２次調査（平成２・６年度調査）、雛川遺跡第２次調査（平成２年度調査）の３調査である。
2.本書に掲載した調査の実施年度は、先述した年度において実施してきたものであり、調査組織についてはIII.調査組織に記載している。なお整理作業は、各調査終了時より随時行ってきたが、主として平成14年度に実施した。
3.遺構の実測は、中島恒次郎、山村信榮、塩地潤一（現大分市教育委員会）が行い、図の浄書は、中島恒次郎・阿部浩子が行った。なお上川久保遺跡第１次調査ならびに雛川遺跡第２次調査における遺構配置図は、（株）アジア航測が行い、本報告において記載した調査区の図面合成作業は、（株）写測エンジニアリングが行った。
4.遺物の実測は、中島恒次郎、渡邊仁、阿部浩子、酒井三保子、松隈里恵子、松本理栄子、森部順子、長直信（福岡大学大学院）が行い、図の浄書は、阿部浩子、酒井三保子、松隈里恵子、松本理栄子、森部順子が行った。
5.遺構の写真撮影は、中島恒次郎、山村信榮、塩地潤一（現大分市教育委員会）が行い、遺跡全景写真撮影は、（有）空中写真企画（代表　壇睦夫）が行った。遺物の写真撮影は、デジタルカメラ（325万画素）を用いてフォトハウス岡（代表　岡紀久夫）が行った。
6.遺構実測図および遺構配置図は全て国土調査法第II座標系を基準としている。したがって図中に記載される方位は特に注記のないかぎり座標北（G.N）を示す。
7.出土した金属製品の保存科学処理は、下川可容子が行った。
8.本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお、各調査報告文中では、各調査ごとの報告内容中に関して遺跡略称は省略している。

雛　2　SD　001

遺跡略称　調査次数　遺構種別　遺構番号

雛：雛川遺跡
上：上川久保遺跡

9.本書の執筆は、中島恒次郎、渡邊仁の両名が行い、項目末尾に記している。編集は中島恒次郎が行った。
10.出土遺物、図面、写真等の諸記録は、全て太宰府市教育委員会が保管している（平成14年度現在：太宰府市文化ふれあい館にて保管）。
11.本書に掲載した遺物の分類は、以下の記載された分類によっている。

土器

太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡　II』
太宰府市教育委員会（1992）『宮ノ本遺跡　II - 窯跡篇 - 』

輸入陶磁器

太宰府市教育委員会（2000）『大宰府条坊跡　XV』

また報告文中において記される時期、例えば大宰府X期などの記載については、下記の文献を御参照いただきたい。
太宰府市教育委員会（1996）『大宰府条坊跡　IX』Tab.1大宰府の土器型式と年代

目次

Ⅰ.はじめに……1
調査経緯……1
報告地域の環境……1
Ⅱ.調査組織……7
Ⅲ.調査報告……9
1.上川久保遺跡　第1次調査……9
1.基本土層……9
2.遺構……9
3.遺物……15
4.小結……21
2.上川久保遺跡　第2次調査……23
1.基本土層……23
2.遺構……23
3.遺物……24
4.小結……26
3.雛川遺跡　第2次調査……27
1.基本土層……27
2.遺構……27
3.遺物……31
4.小結……78
Ⅳ.調査のまとめ……80
成果と課題……80

付表

遺構一覧……82
出土遺物一覧……84

Ⅰ.はじめに

調査経緯

昭和57年6月に発案された佐野地区土地区画整理事業（以下「区画整理事業」と記載）は、昭和61年度に事業計画決定がなされ、本体工事着工も昭和63年7月と決定された。当時文化財取り扱い担当課であった社会教育課が事前協議を行い、昭和62年度から事業関連範囲内における埋蔵文化財の発掘調査を開始した。その後毎年度、区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査が実施されている。平成14年度現在で、89箇所の調査を実施し、その内調査報告書を刊行したものは、21箇所にすぎない。

本書掲載の3地点に関しては、事前の試掘調査によって文化財の確認された地域であり、特に奈良前期施工の直線道路を検出した前田遺跡の南部にあたることから、この直線道路の南延長部および、南部におけるフケ遺跡、雛川遺跡で検出された弥生後期から古墳前期の土器群を包含する河川の北側延伸部分の検出が想定されたこともあり、区画整理事業に先だって発掘調査を実施した。

報告地域の環境

太宰府市の西部に位置する佐野地区遺跡群は、脊振山系から北東にのびる丘陵ないしは裾部に所在する。本書掲載の3地点の北側には大佐野川が流れ、この大佐野川によって形成された河岸段丘上（低位段丘）に遺跡が展開している。特に雛川遺跡、フケ遺跡、尾崎遺跡で確認した河川は、旧大佐野川と呼称すべき状況で河川が検出されており、この旧河川を利用した過去の人々の生活痕跡を調査したことになる。地質環境としては、背後に早良型花崗岩を基盤とする丘陵があり、その端部に広がる沖積世堆積層上に本書掲載遺跡は展開している。調査地周辺に流れる大佐野川および遺構として確認できた旧大佐野川の上流には、先述した早良型花崗岩の他に、Aso-4火砕流堆積物、花崗斑岩も狭い範囲ではあるが分布している（唐木田・下山、2001）。

佐野地区遺跡群は、古代の大宰府において都市的空間を形成した大宰府条坊（ここでは鏡山推定条坊案の範囲を指す）の西部に位置しており、生活痕跡はこの大宰府条坊が施工されたと考えられる古代のみならず旧石器時代の包含層が検出されるなど、古くから人々の生活痕跡が確認されている。特に近年では、脇道遺跡で縄文早期の生活面を確認するなど、これまで調査を終了していた面の下位に縄文早期の生活面が展開していることが明らかになってきている。また遺跡も生産関連遺構、墓、集落形成遺構など様々な種類の遺構が確認されており、原始から古代さらに中世における太宰府の歴史を考える上で重要な地域になってきている。特に古墳時代末期施工の曲線道路の造営、その後この曲線道路廃絶とともに国家的事業と考えられている直線道路の施工が同一地点で確認されるなど、日本における国家形成の一端を考える上でも重要な地域になりつつある（中村、2002）。ただし、これら諸事象を歴史学理論に沿って論証するためには、調査報告、調査箇所など多くの課題を解決しなければならない。本書に掲載し

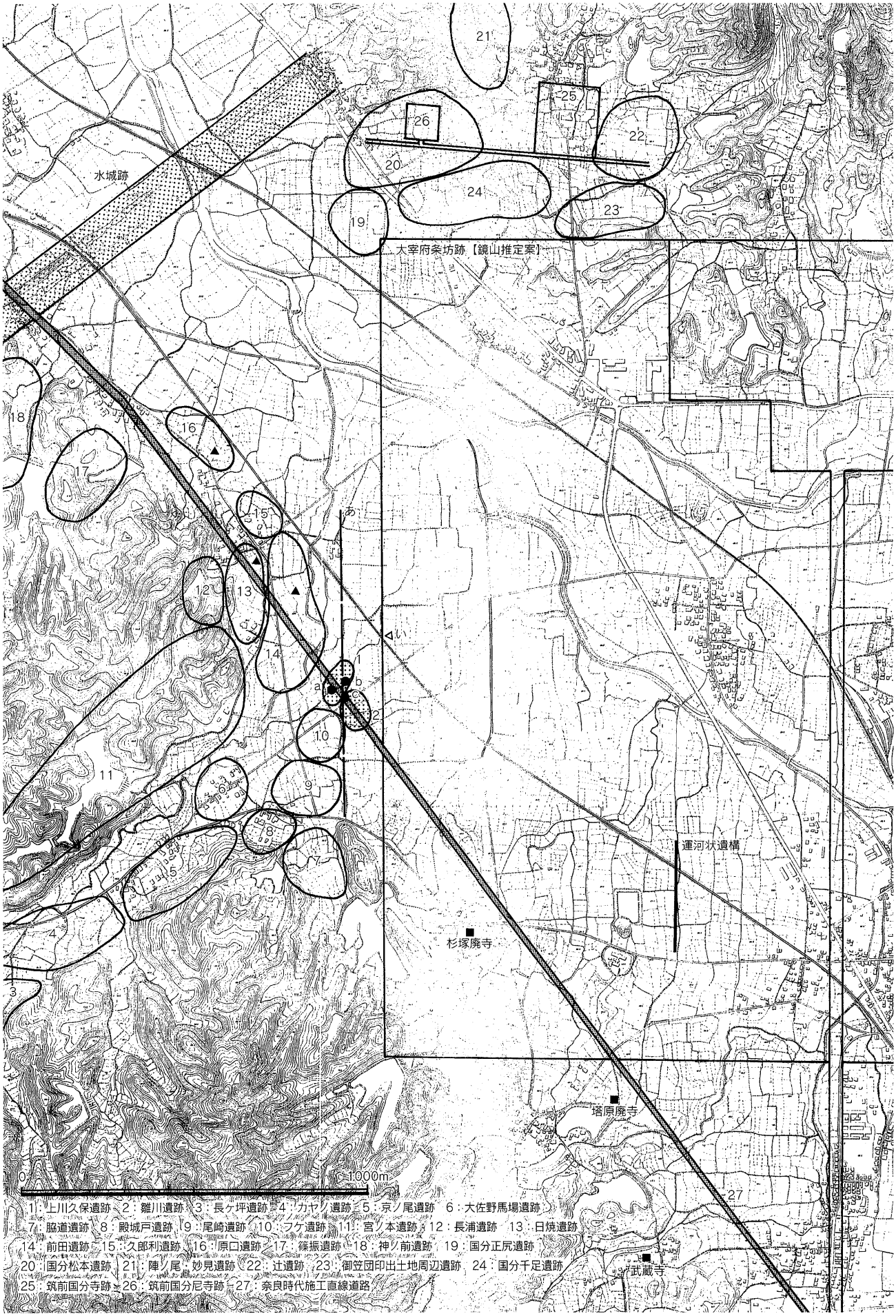


図１.報告地周辺の環境（S=1/15,000）

（a：上川久保遺跡１次調査地　b：上川久保遺跡２次調査地　c：雛川遺跡２次調査地
▲：７世紀代施工の曲線道路検出地
い：2002年度に確認調査実施、条坊西限遺構は、確認できていない。）

た遺跡のみで、歴史の発展段階を論証することは不可能である。また既調査の報告と合わせても、遺構の認定にはじまり、施工時期、廃絶時期、空間的広がり、各種遺構の展開など検討不十分な点も否めない。当面考えられる論証材料の提供としては、1）本書掲載の遺跡を含めた周辺に展開する住居空間利用状況の整理（建造物の種別と機能【掘立柱建物・竪穴住居等[1)]】、生活関連遺構【各種貯蔵施設・廃棄遺構等】）、2）各諸施設の関係性の把握（同時性、住空間領域の範囲の認定【空間遮断遺構の有無】、空間利用にともなう遺構配置理念）の有無、3）共同性‐隔絶性、象徴的装置の有無を視点とした墓構成要素の抽出と観察（造墓者階層、造墓背景等）などが考えられるが、本書に掲載した遺跡が、住空間に関わる遺構のみから構成されていることを考えると、前記1）および2）の検討に限定せざるを得ない。

なお歴史学理論の検証課題、全てを調査に専念する文化財担当者に、覆い被せるのは酷かもしれないが、破壊される遺跡に向かう時、膨大な学説史の積み重ねに対して微々たる自らの研鑽の結果を遺跡に投影するしか術がないのが現状である。

既報告の遺跡内容の概略については、下記のとおり。

雛川遺跡　（太宰府市教委、1996）

【検出遺構】

弥生後期から古墳初頭の遺物を包含する湿地堆積層

中世前期の遺物を包含する溝

【出土遺物】

湿地堆積層から多量の木製品（農具、漁具、建築部材）、石製品（農具、武器）が出土。

希少な遺物としては、銅釧が出土している。

湿地堆積層中から出土した土器群の組成は、本書報告の雛川遺跡第2次にて検出した雛2SD002出土土器群の組成に近似している。

フケ遺跡（太宰府市教委、1997）

【検出遺構】

弥生後期から古墳初頭の遺物を出土する掘立柱建物

弥生後期から古墳終末の遺物を包含する河川

古墳初頭の大形甕棺墓

【出土遺物】

土製匙が出土。

宮ノ本遺跡　（太宰府市教委、1980・1987・1992・1993・1995）

【検出遺構】

古墳前期の割竹形木棺を主体とする円墳、大形甕棺墓、石棺墓

古墳終末の須恵器窯

奈良期の蔵骨器、須恵器窯

平安前期の蔵骨器、木棺墓

平安中期の木棺墓

【出土遺物】

珠文鏡、獣帯鏡（流雲文縁一仙五獣帯鏡）、八稜鏡（四仙騎獣八稜鏡）、唐式鏡、鉛製買地券、篠窯系須恵器壺

方形素文鏡

原口遺跡（太宰府市教委、1989）
【検出遺構】
弥生中期の竪穴住居
古墳終末の曲線道路、竪穴住居
中世前期末の溝、掘立柱建物

前田遺跡（太宰府市教委、1998・1999・2000・2001・2002）
【検出遺構】
弥生前期の貯蔵穴、竪穴住居
弥生中期の竪穴住居
弥生後期から古墳初頭の竪穴住居
奈良期の土坑、掘立柱建物、井戸、直線道路
平安期の木棺墓
平安後期埋没の溝

尾崎遺跡（太宰府市教委、1993）
【検出遺構】
古墳前期の竪穴住居
古墳後期の河川、桝状遺構
【出土遺物】
河川より木製品（建築部材（扉材他））、工具、容器

カヤノ遺跡（太宰府市教委・玉川文化財研究所、2001）
【検出遺構】
縄文早期から晩期までの包含層
古代の焼土坑

殿城戸遺跡（太宰府市教委・玉川文化財研究所、2001。太宰府市教委、2002）
【検出遺構】
古墳前期の土坑、竪穴住居、方形区画溝、掘立柱建物
古墳後期の竪穴住居
平安前期の蔵骨器

未報告遺跡
日焼遺跡（H6・14年度調査）
【検出遺構】
縄文早期の堆積層
古墳末期施工～奈良期初頭埋没の曲線道路側溝
奈良期初頭施工～奈良期後半埋没の直線道路側溝
平安後期埋没の河川

脇道遺跡（H4・6・9・12～14）
【検出遺構】
旧石器期の包含層
縄文早期の落とし穴、河川
弥生中期の竪穴住居、土坑
弥生後期の甕棺墓
古墳前期の竪穴住居、土坑
古墳後期の古墳、竪穴住居、貯木施設、河川

奈良期の掘立柱建物、河川、竪穴住居
平安中期の木棺墓
室町期の土坑

【出土遺物】

木簡

カヤノ遺跡（H6・7・10～13）

【検出遺構】

縄文早期から晩期までの包含層
古墳前期の竪穴住居
古墳末期の竪穴住居
奈良期の掘立柱建物

京ノ尾遺跡（H11・13・14）

【検出遺構】

古墳後期の竪穴住居、河川
奈良期の掘立柱建物
室町期の土坑、溝

【出土遺物】

古墳後期の建築部材

宮ノ本遺跡（H2）

【検出遺構】

古墳時代前期の竪穴住居

【出土遺物】

小形仿製鏡

フケ遺跡（H13）

【検出遺構】

古墳時代前期埋没の河川

【出土遺物】

木製楯、小形仿製鏡

【引用文献】

中村太一（2002）「古代国家と計画道路」『歴史評論　No.626』pp.46～52
唐木田芳文・下山正一（2001）「第２章　地質」『太宰府市史　－環境資料編－』pp.33～104
関和彦（1991）「古代村落の再検討と村落首長」『歴史学研究　No.626』pp.27～35

【註】

1）社会像復原の手がかりとなる集落構成員の質・量ならびに集落構成物（この場合建物・耕作地など）を規定する前提作業として、遺構性格の認定条件について関和彦氏によって検討すべき課題として提示されている（関、1991）。しかし関氏の指摘を考慮した遺構性格を検討できるような情報を、調査成果としてあげ得ているのかという問いに対しては、疑問を呈さざるを得ない。今後の調査情報収集視点として持つべき重要な課題である。

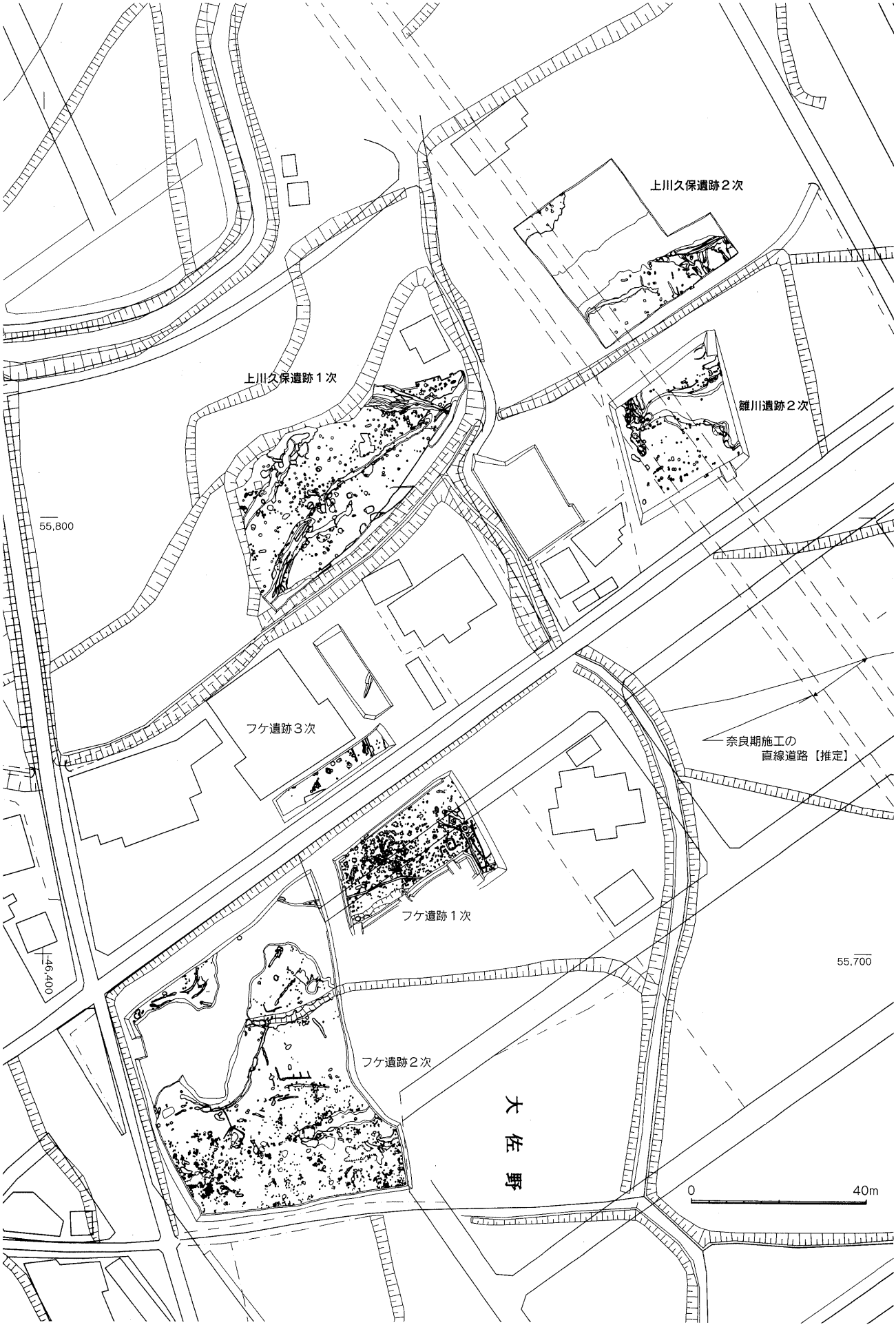


図２. 報告調査区全体図（S=1/1200、ゴチック体：報告遺跡、上が北）

Ⅱ.調査組織

本書に掲載した各調査は、複数年度にわたって実施しているため、以下に発掘調査を実施した年度ごとの調査組織について記述する。なお調査担当者はゴチック体で記載し、整理報告担当者は中島恒次郎・渡邊仁である。整理作業年度については、主として作業を実施した平成14年度の組織を記載しておく。

上川久保遺跡　第１次調査（平成２／1990年度）
雛川遺跡　第２次調査（平成２／1990年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	西山義則
	社会教育課長	関岡　勉
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主任主事	岡部大治
	主　　事	白水伸司
調査	主任技師	山本信夫
		狭川真一
		城戸康利（2年7月1日～）
	技　　師	城戸康利（～2年6月30日）
		緒方俊輔
		山村信榮
	技師（嘱託）	**中島恒次郎**
		狭川麻子

上川久保遺跡　第２次調査（平成６／1994年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白木三男
	文化課長	花田勝彦
	文化財保護係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
	主　　事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一
		城戸康利

		山村信榮
		中島恒次郎
		重松麻里子
	技　　師	井上信正
	技師（嘱託）	田中克子（～6年7月31日）
		下川可容子

整理報告年度（平成14／2002年度）

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	神原　稔
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮
		中島恒次郎
	主任技師	井上信正
		高橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子
		柳　智子
		渡邊　仁

なお現地調査ならびに調査報告作成にあたって、下記の方に御指導、御教示を賜った。記して心より深甚の謝意を表します。

溝口孝司（九州大学大学院助教授）

Ⅲ.調査報告

１.上川久保遺跡　第１次調査

１.調査概要・基本土層

調査地は、佐野地区遺跡群の中でも低所にあり、遺跡群のほぼ中央東部に位置している。調査地の地番は、大字向佐野字上川久保115-1外で、工事計画対象面積6,000㎡、調査面積1,462.45㎡を測り、調査期間は1990年7月5日～同年9月14日である。

調査地は、旧水田ということもあり、遺構検出面より上位には、水田耕作土および床土が確認でき、この水田耕作関連土を除去すると、遺物包含層である茶褐色土が堆積していた。旧水田面から遺構面までの深さは約0.5mを測る。

２.遺構

１）掘立柱建物

1SB010

調査区北西部に検出した掘立柱建物で、調査区外へ建物桁方向南西隅の柱が展開するものと考えられる。東側桁方向の柱がe柱穴の南延長部分には確認できていないことから、当初１間×２間の南北棟であると考えた。しかし報告作業途中において、梁方向の中間部分に小規模ながら柱穴と認定できる小穴を確認したことから、柱穴fとして考え、２間×２間の南北に桁方向を有する掘立柱建物と考えた。整理途上において認定した柱穴f以外は、直径0.8m前後を測るもので、屋根を支えるための主柱穴と考えられ、後で加えた柱穴fについては、直径0.5m弱と小規模なもので補助的な柱であると考えられる。各柱の残存深度は柱穴aが0.28mと浅いが、他の柱穴は平均で0.53mと深い。特に撹乱によって形成されている溝底からの残存深度であるが、他の柱穴と同一標高からの計測では、0.69mを測る。各柱間は、柱痕跡を調査時に確認できなかったこ

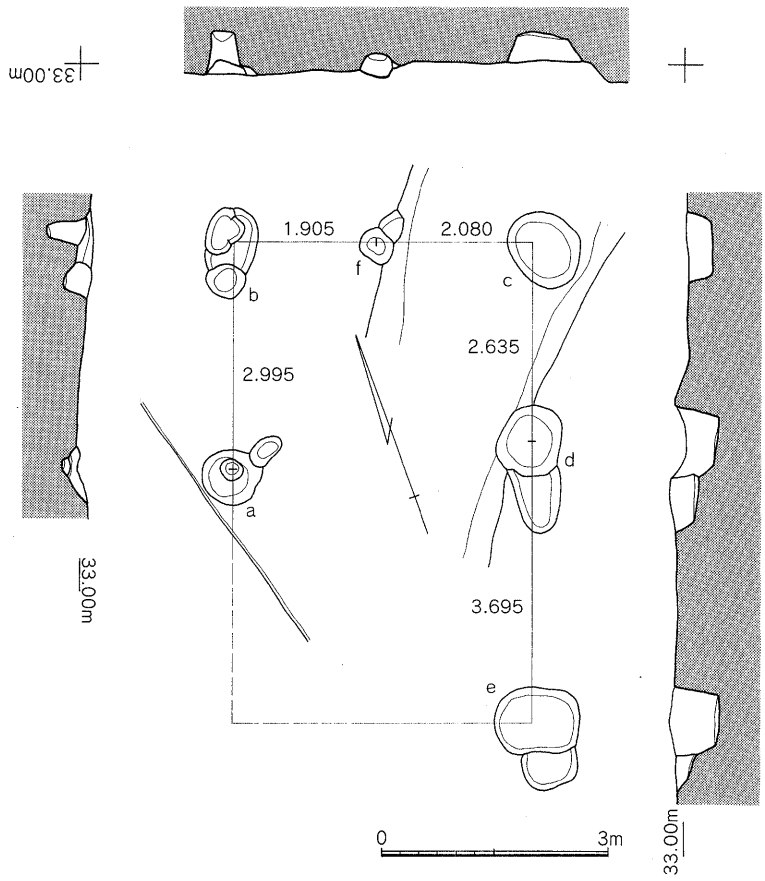


図３.上１SB010遺構実測図

図４.上川久保遺跡　第１次調査遺構配置図（S=1/320）

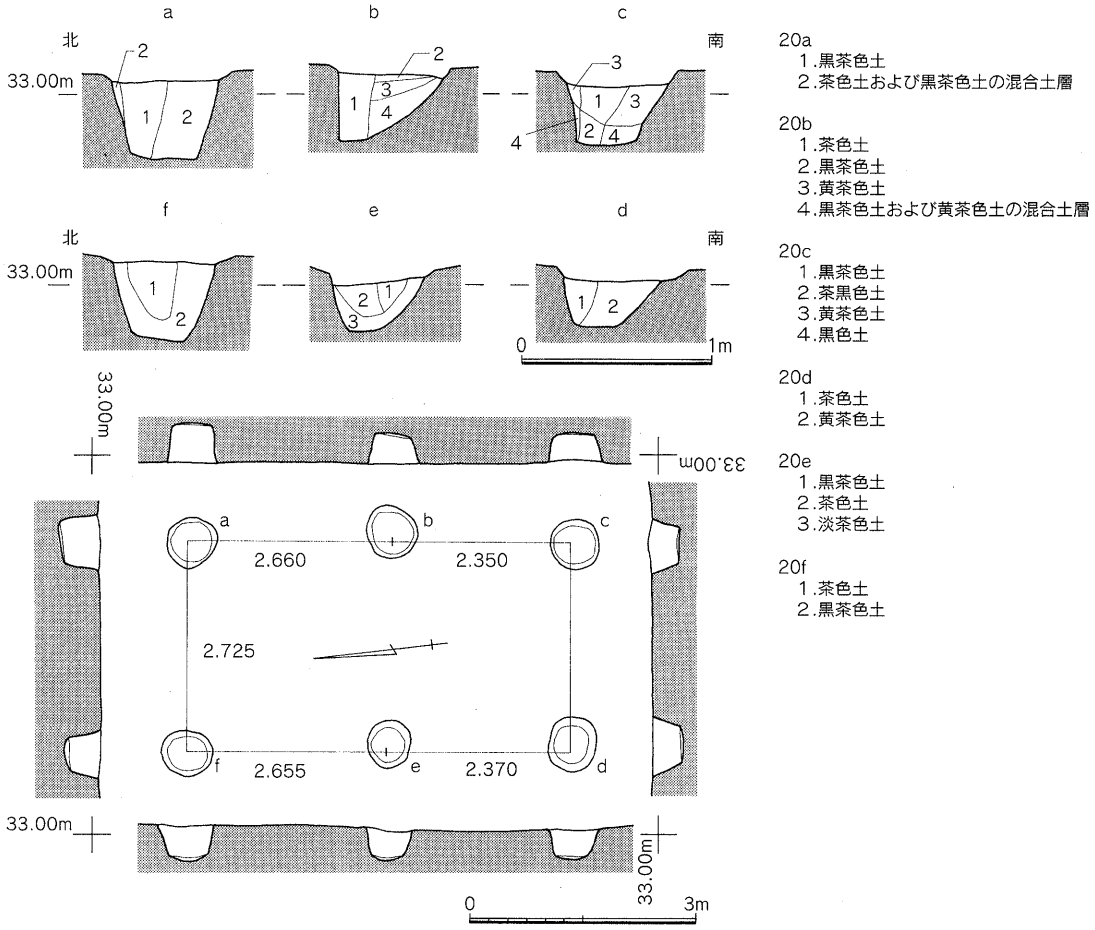


図5.上１SB020遺構・土層実測図

ともあり、柱穴中点を基点として計測した値を図3に記載している。梁行の柱間は、約2.0m前後と一定しているものの、桁行の柱間は、2.635m～3.695mと不均一であった。建物建造方向は、座標北を基準として、約19度（N19°54′35″）東へ振れている。

1SB020

調査区のほぼ中央にあって、やや北よりに位置している。１間×２間の掘立柱建物で、南北に桁方向を有している。調査中において、柱痕跡の確認を怠ったことから、明確な柱間の計測は行えなかった。したがって、推定として、柱穴任意中点を基点として柱間の計測を行っている。梁行の柱間は2.725m前後を測り、桁行方向の柱間は、北側の柱間（a-b間、e-f間）が2.6m前後を測り、南側の柱間（b-c間、d-e間）は2.3m前後を測る。やや北側の柱間が広い。柱穴の残存する深さは、0.4m～0.5mを測る。建物建造方向は、座標北を基準として、約7度（N7°42′13″E）東へ振れている。

2）土坑

1SK005

調査区西端部にて、1SB010aを切る形で検出した隅丸長方形の土坑で、長軸長1.55m、短軸長0.95m、残存する深さ0.39mを測る。土坑内には黒茶色土が堆積するとともに、土器が北西方向から投棄された状況で検出された（写19～21）。

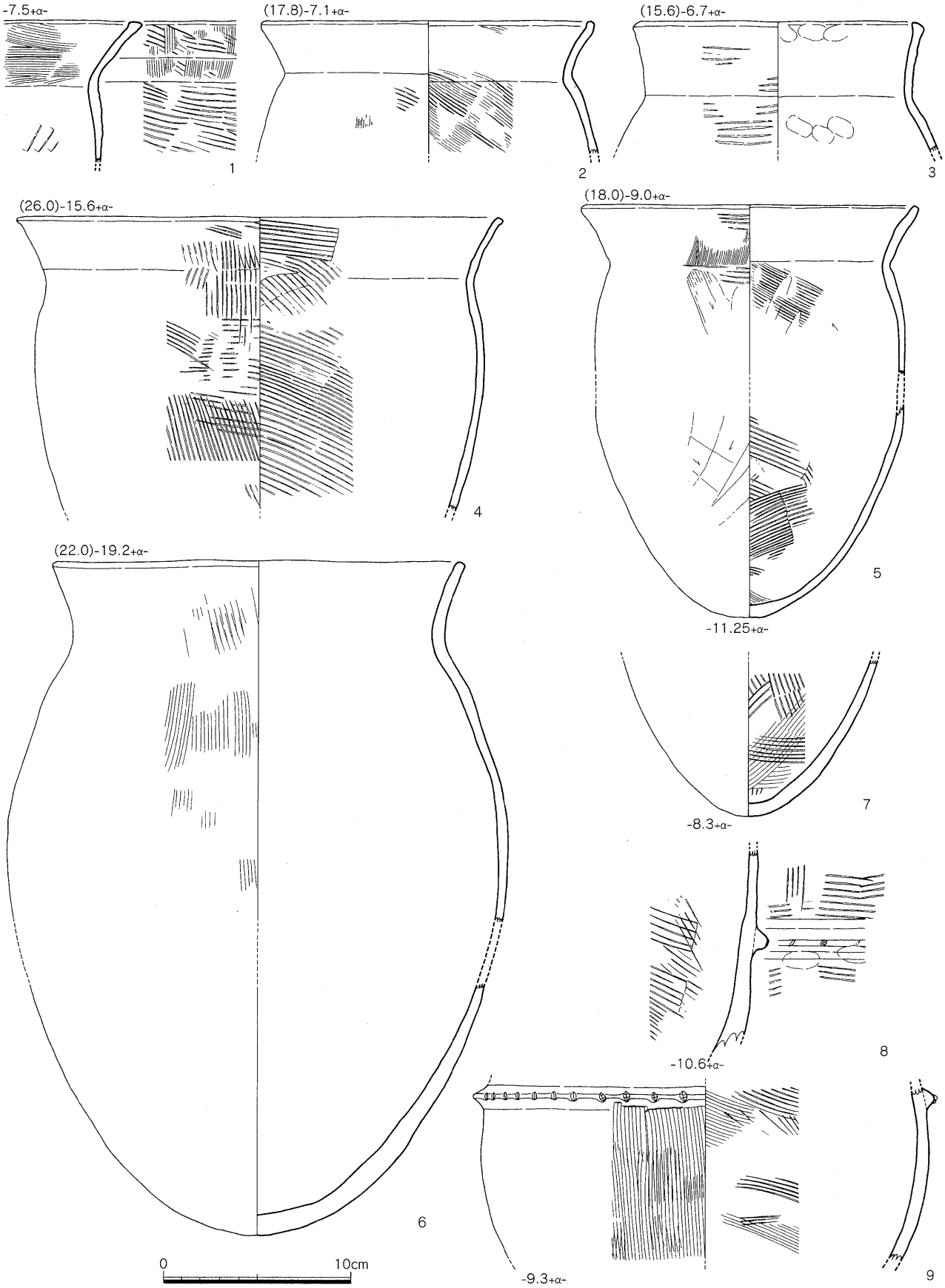


図６.上１SK005出土遺物実測図（１）

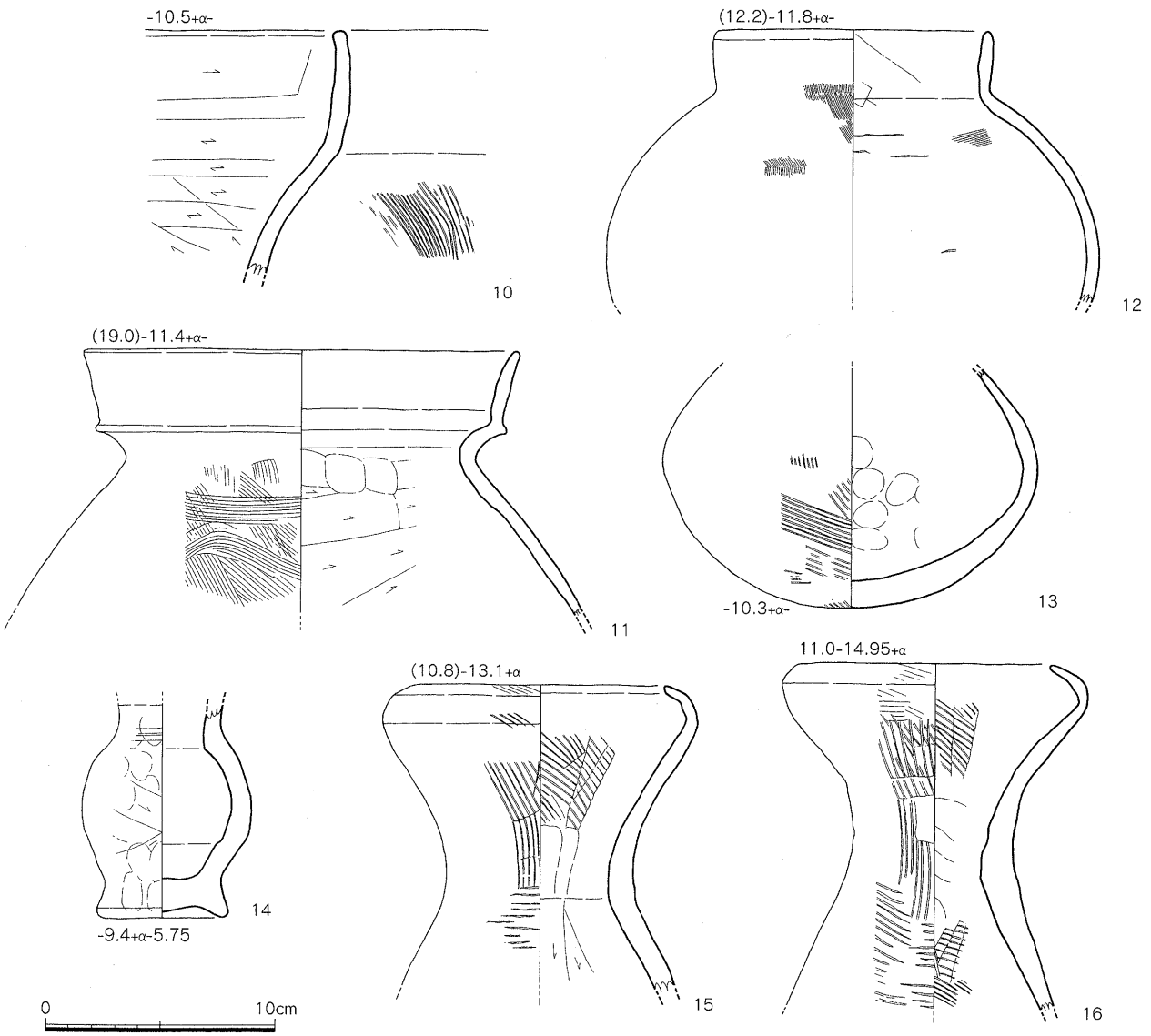


図７.上１SK005出土遺物実測図（２）

1SK015

調査区のほぼ中央部で検出した隅丸正方形の土坑で、一辺0.75m、残存する深さ0.4mを測る。土坑内の堆積土は下位より黒茶色土→茶灰色土が堆積しており、黒茶色土中には多量の土器が投棄された状態で出土している。投棄方向は、北西方向が想定できる（写22～25）。

３）自然流路

1SD003

調査区の南西部から北東部へかけて斜行する溝で、最大幅4.15mを測り、残存する深さ0.5mを測る。溝内の堆積土は、下位より灰色砂層→茶灰色砂層→黒茶色土→茶色土が堆積していた。溝内からは散在するように遺物が出土している。

1SD042

調査区北東部にて検出した溝で、1SD054を切る状況で確認した。先述した1SD003との関係は、上位に茶色土が覆っていたこともあり、判然としないが、この茶色土が両者のオーバーフロー時の堆積土とすると、溝として機能していた時期は同時であったとも解せる。溝内には下

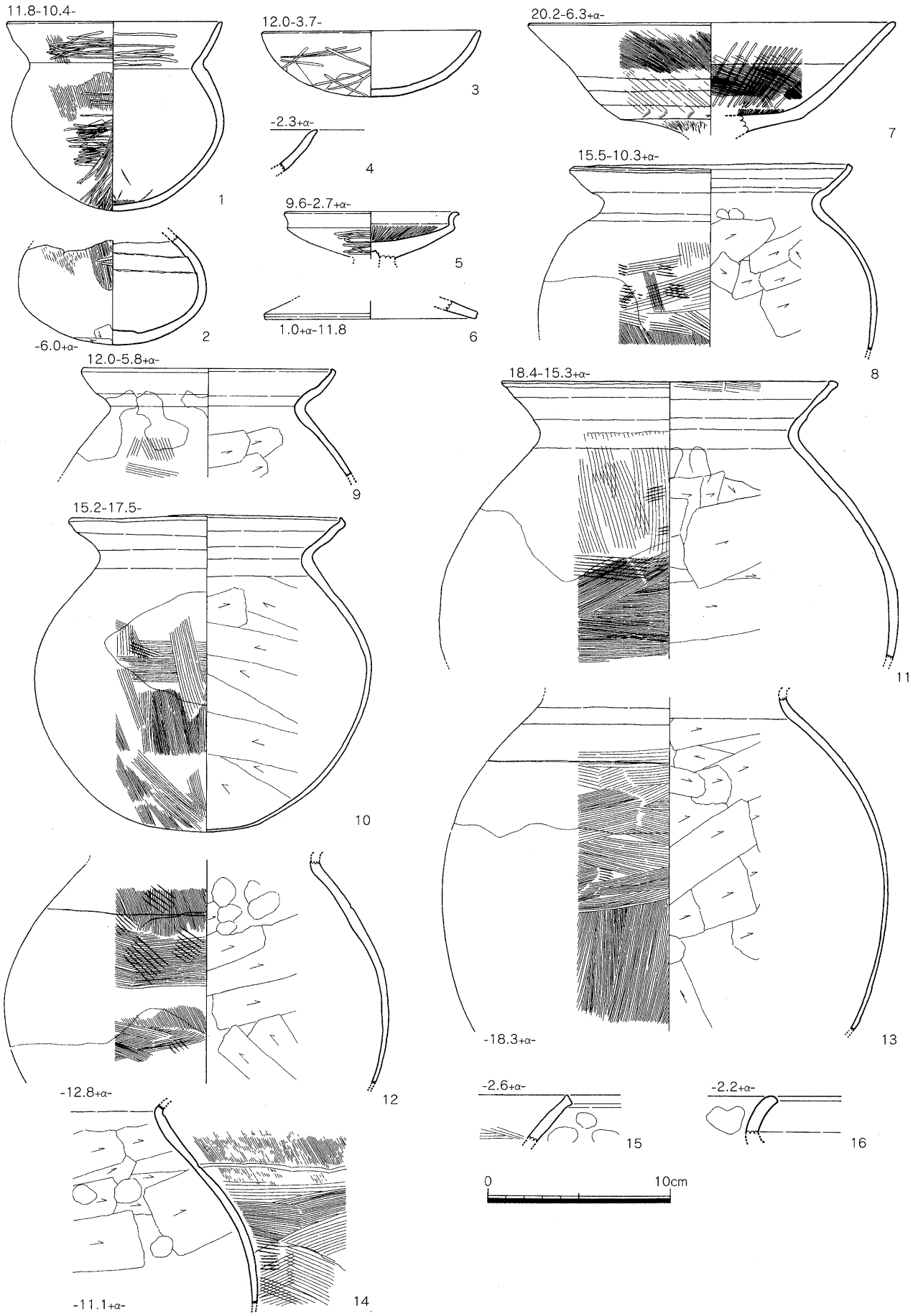


図８.上１SK015出土遺物実測図（１）

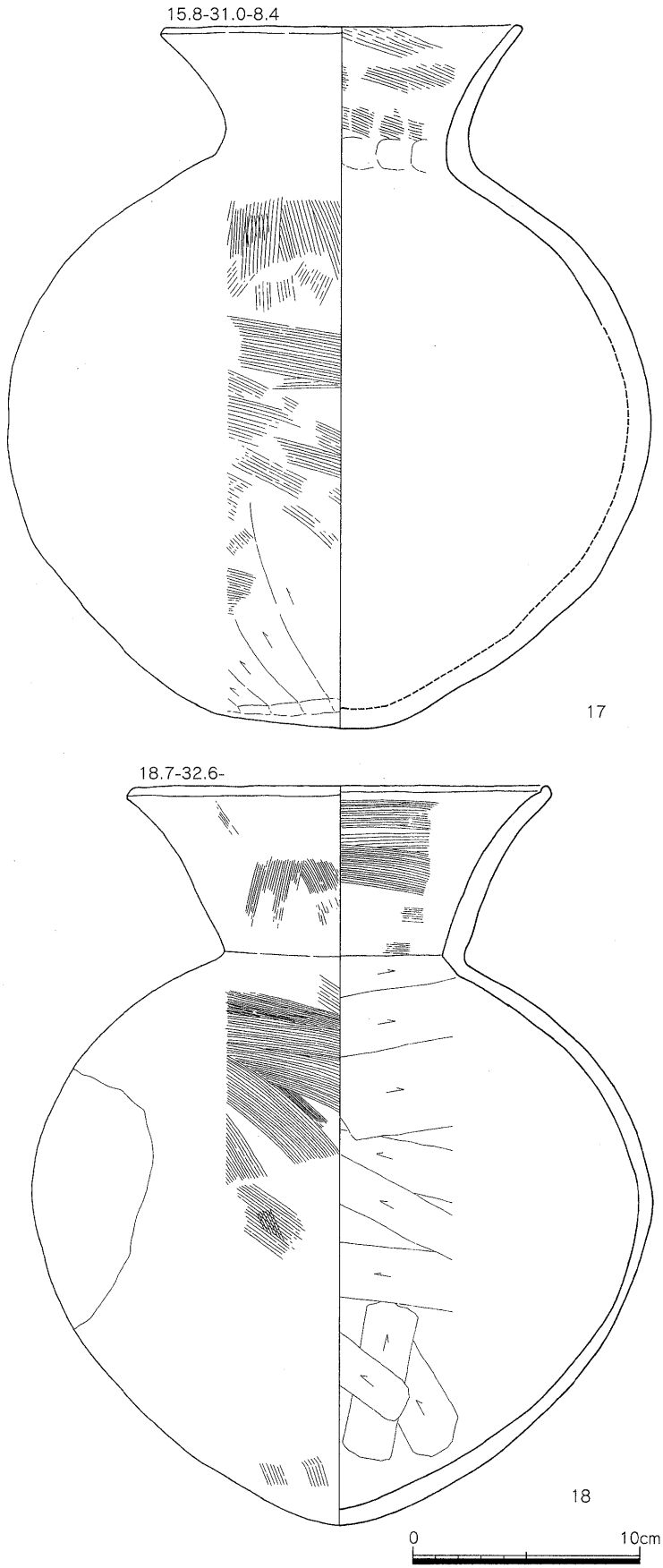


図９.上１SK015出土遺物実測図（２）

位より灰色砂→灰茶色土→茶黒色土が堆積していた。

３.遺物

１）土坑

1SK005出土遺物（図6・7）

古式土師器

甕（１～９）　１～９は、器表面に叩き痕跡をとどめるなど、粗雑な印象を受けるものである。底部のみの破片に関しても同様な傾向にあることから、甕と判断した。口縁部から体部上位にかけての破片は、全て頸部が「く」の字状に屈曲するものである。１～３・５は口縁端部を丁寧に横ナデによって処理することから、上方へ立ち上がったり、平坦面を形成するなどの特徴を有している。６に関しては、器表面の残存状況が悪いことから判然とし難いが、他の個体が叩き痕跡を残存するのに対して、ハケ痕跡のみ観察できる。８および９に関しては、突帯を貼付するもので、突帯端部にハケ状原体による刻み目が施文されている。いずれも図を正位置と仮定した場合、左から右方向への原体移動が観察できる。

壺（10～14）　先の甕と認定した個体に比べ、細かいハケによって器面調整するなど、丁寧さがうかがえる資料で、10・11は二重口縁壺、12は直口壺、14は手づくねによる小形の壺である。10は明瞭な口縁立ち上がりを有しているものではないが、やや大形の製品と考えられる。11は、外方に開く口縁部形態を有するもの

で、肩部にハケによる波状文が観察できる。体部内面はヘラ削りによって仕上げられている。12は直立する口縁部形態を有する直口壺で内外面の調整は器面磨耗のため、部分的に観察できるハケ痕跡が見られる。13は、体部から底部の破片資料で、上位形態の状況が判断つかない。14は顕著な横ナデによる調整ではなく、指圧痕を多くとどめており手づくねによる成形が考えられる小形の壺である。

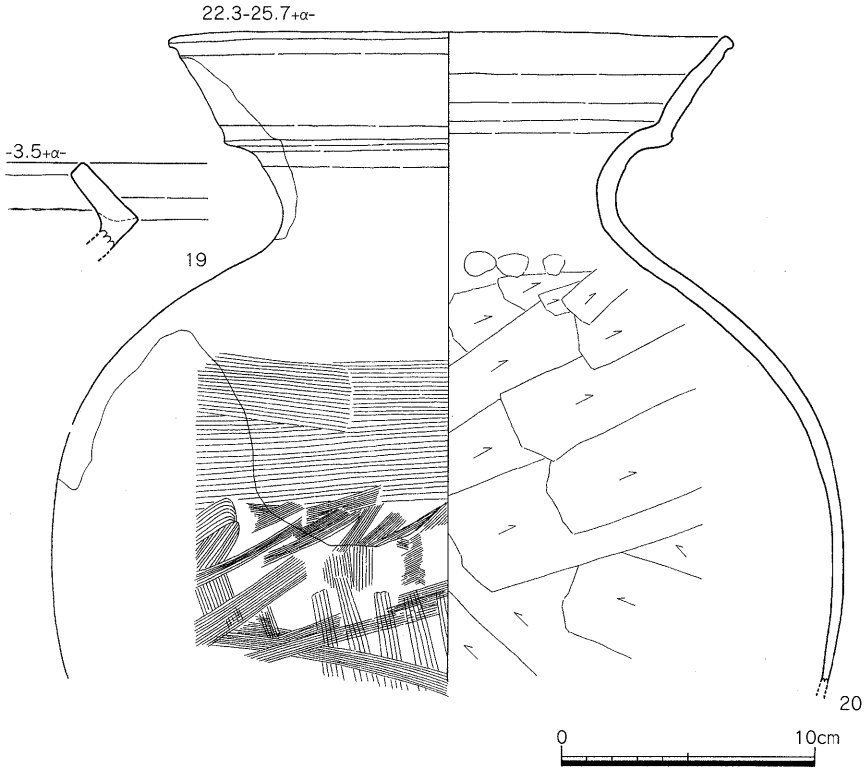


図10.上1SK015出土遺物実測図（3）

支脚（15・16）　両者ともに受部を内湾させる個体で、外面には横方向の叩き痕跡およびその後になされたハケ痕跡が観察できる。内面はハケおよび削りによって調整されている。（中島恒次郎）

1SK015出土遺物（図8～10）

古式土師器

小形丸底壺（1・2）　1・2は精製の小形丸底壺である。共に体部外面上半をハケ調整し、下半をヘラ削りののち全面に細かなヘラミガキを施す。胎土は共に精製され、緻密である。1は口縁部内面にも横方向のヘラミガキを、体部内面をハケ調整し、それを消すように横方向のナデによって仕上げている。色調は明橙色を成し、外面は焼成時の炎のあたり具合からか、黒褐色ないし、白黄褐色に変色している。内面は明橙色を呈している。2は体部内面に粘土の接合痕が見られ、やや焼成が不十分である。色調は外面白橙色ないし、淡橙色を呈し、内面淡橙色を呈している。

鉢（3）　精製の鉢である。底部外面を手持ちのヘラケズリで調整し、のち不定方向のヘラミガキを施す。内面はヨコナデをし、胎土はよく精製され、色調は外面濃赤橙色および、黄褐色を呈し、内面は赤橙色を呈す。

鉢×丸底坏（4）　鉢もしくは丸底坏の破片で平安期の遺物である可能性も残る。内外面ともヨコナデし、胎土はよく精製されている。内面の色調は淡橙褐色をなし、外面は黒色に変色している。

小形器台（5・6）　5は精製のもので皿部である。口縁部は接合したのち、口縁端部に丁寧なヨコナデを行ない、内面には放射状の暗文風ミガキを行なっている。体部外面は横方向の細か

いヘラミガキを施す。胎土はよく精製され、色調は内外面共に淡橙色を呈している。6は脚部片である。調整は内外面共に横方向のナデを施し、内面はやや雑である。胎土はよく精製されている。内外面とも橙褐色をなす。

高坏（7）　精製のもので、底部内面立ち上がりから口縁部直下付近までナナメ方向のハケ調整を行い、そののち、体部および底部の内面に放射状の暗文風ヘラミガキを施す。体部外面は屈曲部より上半はナナメ方向のハケののち、やや粗いナデにより仕上げる。体部外面の屈曲部下半は脚部接合のためのタテ方向のハケを施したのち、ハケ目を消すようにナデによって仕上げている。胎土はよく精製され、内外面とも黄褐色ないし、赤橙色を呈している。焼成は良好である。

甕（8～16）　すべて体部内面はヘラケズリによって仕上げられている。体部外面は8、10～14はタタキ調整したのち、ハケ調整を行なう。その際、複数の原体を用いてハケ調整を行なっているのが確認できる。8～10は口縁部を一度横方向のナデにより調整したのち、端部のみ内面にツマミあげている。11は口縁部を一度横方向のナデにより調整したのち、口縁端部を外側に張り出すように横方向のナデを行なっている。口縁部内面には体部外面上半に使用されているものと同一と思われる原体により横方向のハケが行なわれている。12～14には体部外面上半に工具による沈線が行なわれている。12・13はシャープな沈線で、ともに先の尖った工具により施されたものであると考えられる。14は12・13に比べ若干、先の丸い工具で回転台を使用し、施文したであろうと考えられる。色調は内外面とも様々で、8・9は黄褐色及び白褐色、10・11は黄白色、白褐色、12は白褐色もしくは黄褐色、灰褐色、13は黄褐色、暗灰色、橙褐色、14は白褐色を呈している。8～14はすべて外面にススが付着している。胎土は1mm内外の白色の砂粒を多く含むが、どれも器表面にはあまり見られず、内面ヘラケズリを行った面に顕著に見られる。15・16は甕ないし壺の口縁部と考えられる。小破片のため器種特定は困難であった。15は内面に横方向のハケが見られ、口縁部内面及び外面は横方向のナデを施す。口縁端部はツマミあげる。外面には指頭圧痕が見られる。胎土には1mm以下の白雲母を多く含む。色調は白褐色及び白橙色を呈している。16は内外面とも横方向のナデにより器表面を整え、口縁端部を丁寧にナデる。胎土には2 ほどの白色砂粒を多く含み、色調は淡黒褐色及び茶黒色をなす。内面には茶黒色の付着物が見られる。

壺（17・18）　17は底部外面をナデ、底部から胴部付近まで工具を使用したと考えられるナデを施す。胴部外面から頸部まで横もしくは縦方向のハケを施す。焼成不良のため前後関係がはっきりしない。口縁部を体部に接合した痕跡が見られるが、その割れ目には口縁部接合前に行なったハケ痕跡が観察できる。口縁部外面は横方向のナデにより調整し、口縁部内面を横方向のハケののちナデによって仕上げている。体部内面は横方向のハケののち下方向からのナデを施す。胎土は精製されており、白雲母を若干含む。色調は内外面ともに淡橙茶色をなす。底部から胴部外面には黒斑が見られる。18は体部外面を縦もしくは横方向のハケによって調整するが体部下半は摩滅が激しく調整を確認できず、縦・横方向の前後関係ははっきりしない。口縁部外面は縦方向のハケののち、粗い横方向のナデを施す。口縁部内面は横方向のハケを施す。

口縁端部はツマミナデにより、内面に隆起している。内面は体部下半は縦方向のヘラケズリを施し、体部上半は横方向のヘラケズリを施す。胎土には1mm内外の白色砂粒を多く含む。色調は外面が黄白色、黄褐色、赤褐色、灰褐色、内面が黄褐色、赤褐色と焼成時の焼きムラがあるようにみられる。なお、胴部外面には黒斑が見られる。

二重口縁壺（19・20）　19は内面に二重口縁部を貼り付ける際の粘土紐の痕跡が見られ、やや粗雑な印象を受ける。口縁端部を丁寧に横方向のナデにより調整し、口縁部は内傾している。胎土には1mm内外の白色砂粒を多く含み、白雲母を若干含んでいる。外面は濃白褐色を呈し、内面は白褐色を呈す。20は体部内面をヘラケズリによって器壁を薄くし、口縁部を一度、横方向にナデ、口縁端部を丁寧にツマミナデし、外側に張り出させる。口縁部は19とは異なり外傾させている。外面は体部上半に横方向のハケを施したのち、さらに体部下半は縦方向のハケを行ない、加えてやや雑な横方向のハケで仕上げている。なお、体部上半と体部下半に施されているハケのハケ状原体は原体の単位、条数などから、異なる原体を用いていると考えられる。胎土には2～3mm内外の赤褐色ないし白色の砂粒を多く含むが器表面にはあまり見られず、内面のヘラケズリを行なった面に顕著に確認できる。色調は外面は黄白色及び淡灰褐色を呈し、内面は黄白色ないし灰褐色を呈す。なお、体部外面にはススが付着し、口縁部から頸部外面には黒斑が見られる。

（渡邊　仁）

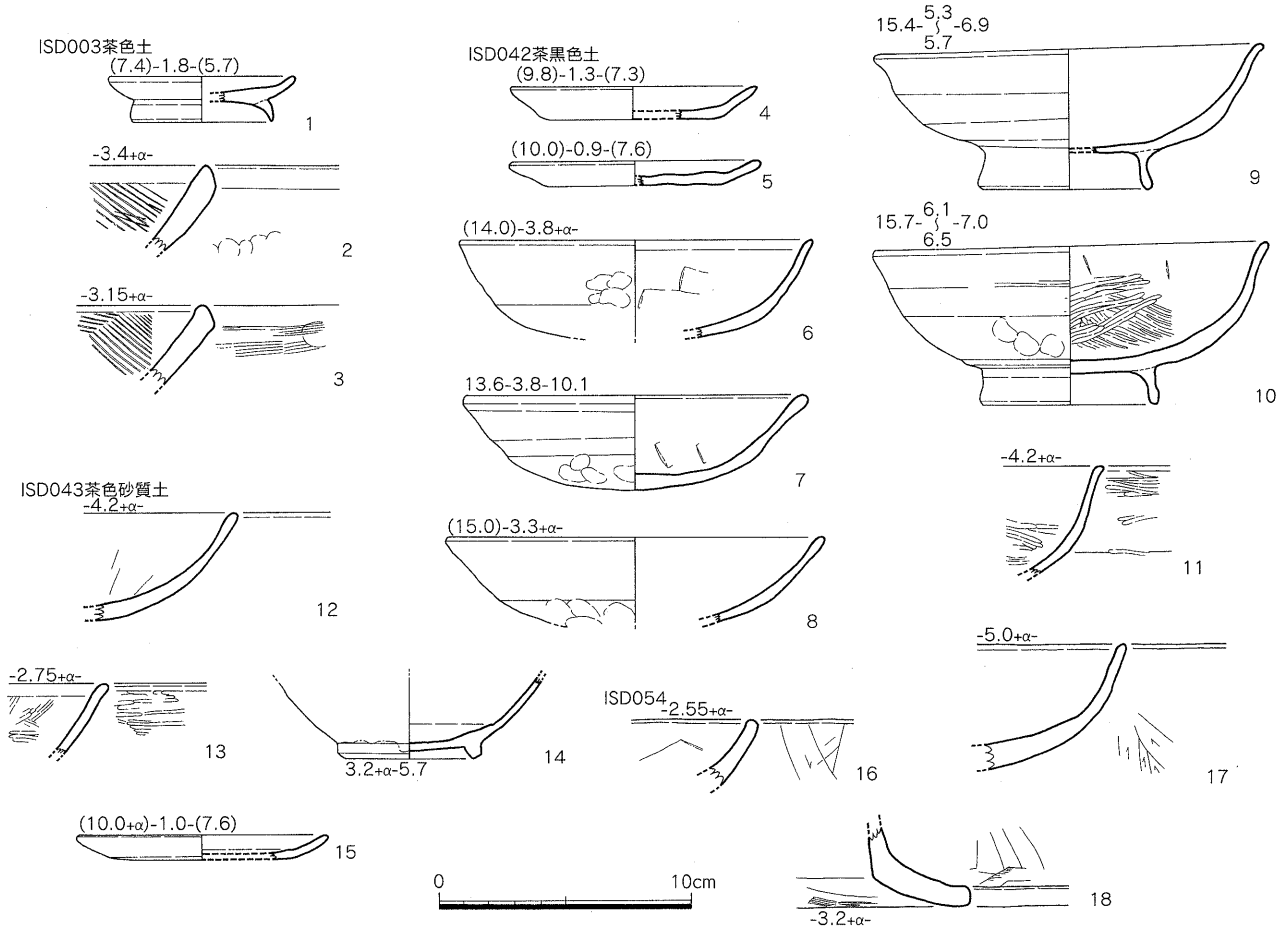


図11.溝出土遺物実測図

３）溝

1SD003茶色土出土遺物（図11）

土師器

小皿c（1）　口径7.4cmを測る小皿にやや高めの高台を貼付するもので、底部外面の切り離し処理は、丁寧なナデ痕跡によって消されていることから判断できなかった。

瓦質土器

こね鉢×擂鉢（2・3）　口縁端部の小破片のため、全形にわたる情報は得難い。内外面ともに粗いハケによって調整されており、口縁端部は上方へ立ち上がるように面取りされている。

1SD042茶黒色土出土遺物（図11）

土師器

小皿a_1（4・5）　口縁端部を丸く収めるもので、口径10.0cm前後を測り、底部外面の処理が観察できる５は、回転ヘラ切りによって処理されている。

丸底坏（6～8）　やや器高の高い丸底坏で、底部残存状況ならびに器面状況が悪い８以外は、高台を付さない丸底坏ａで体部内面にミガキｂおよび底部と体部の境界部分に指頭圧痕跡が明瞭に観察できる。全形が観察できる７の口径／器高の指数値は3.58を測る。

椀c_2（9）　高台を貼付するもので、口径／高台径の指数値は2.23を測る。やや底部中心によっている印象を受ける。器面調整については焼成がやや不良なため、判然としない。

黒色土器A類

椀c_2（10）　体部内面を黒色化したもので、体部内面はミガキｂによる器面調整の後、ミガキｃによって仕上げられている。口縁部形状はやや外方へ屈曲する形状をとる。なお体部内面のミガキｃは四分割磨きによって仕上げられている。口径／高台径の指数値は、2.24を測る。

黒色土器B類

椀（11）　体部下位から口縁部にかけての破片資料で、口径復原には至らなかった。体部外面下位は回転ヘラ削りによって仕上げられており、内外面全面はやや丁寧なミガキｃによって仕上げられている。

1SD043茶色砂質土出土遺物（図11）

土師器

丸底坏（12）　体部下位から口縁部にかけての破片資料で、口径を導き出すには至っていない。体部内面下位にミガキｂの痕跡が観察できる。また底部外面には、回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

黒色土器B類

椀（13）　口縁部の破片資料で、内外面にミガキｃの痕跡が観察できる。

白磁

椀（14）　口縁部が欠損するもので、素地特徴は灰白色を呈し緻密な印象を受ける。また釉は淡青白色を呈し、細かい気泡が多く含まれている。残存する部位の外面は全て回転ヘラ削りによって仕上げられており、削りの範囲のみを取り上げると椀IV-2a類に該当する可能性が高い。

ただし一般的に見られる椀IV類の素地特徴からすると精製されており、前記分類の精製品として考えておく。

1SD047出土遺物（図11）

土師器

小皿a₁（15）　口径10.0cmを復原するもので、口縁端部形状を丸く仕上げるものである。

1SD054出土遺物（図11）

古式土師器

鉢（16・17）　いずれも粗製の鉢で、体部外面をヘラ状工具による縦方向のナデにて仕上げている。

器台（18）　脚端部の破片で、脚端部は横ナデ、他の部位は内外面ともに横方向のハケおよび横ナデによって仕上げられている。全体的に粗雑な印象を受けたことから器台とした。

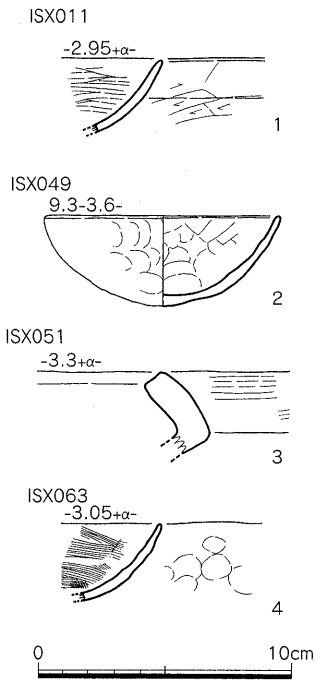


図12.その他の遺構出土遺物実測図

4）その他の遺構出土遺物

1SX011出土遺物（図12）

古式土師器

鉢（1）　精製の鉢で、体部から口縁部までの外面は丁寧な手持ち削りによって仕上げられており、内面は丁寧なミガキcによって仕上げられている。雲母細片を多く含んでいる。

1SX049出土遺物（図12）

古式土師器

鉢（2）　粗製の鉢で、内外面に指頭圧痕跡を多く残している。底部丸底で小形の鉢である。雲母細片を多く含んでいる。

1SX051出土遺物（図12）

古式土師器

二重口縁壺（3）　口縁端部のみの破片で、端部水平度合いから傾きを推定した。結果として内側へ内傾する口縁部形状を有するものと考えられる。口縁部外面はやや磨耗気味であるが横方向のハケによって仕上げられている。

1SX063出土遺物（図12）

古式土師器

鉢（4）　体部下位から口縁部までが残存する小形の鉢で、外面には指頭圧痕跡が、内面には横方向のハケ痕跡が観察できる。胎土特徴として白色粒子および雲母細片が多く含まれている。

5）土層出土遺物

茶褐色土出土遺物（図13）

須恵器

坏c（1）　図上完形になる個体で、高台が内端で接地し底部から体部への移行が丸みを有する形状である。器表面は内外面ともに丁寧に回転ナデおよび底部に関しては不定方向のナデによって仕上げられている。焼成は良好であるが、還元度合いはやや不良である。

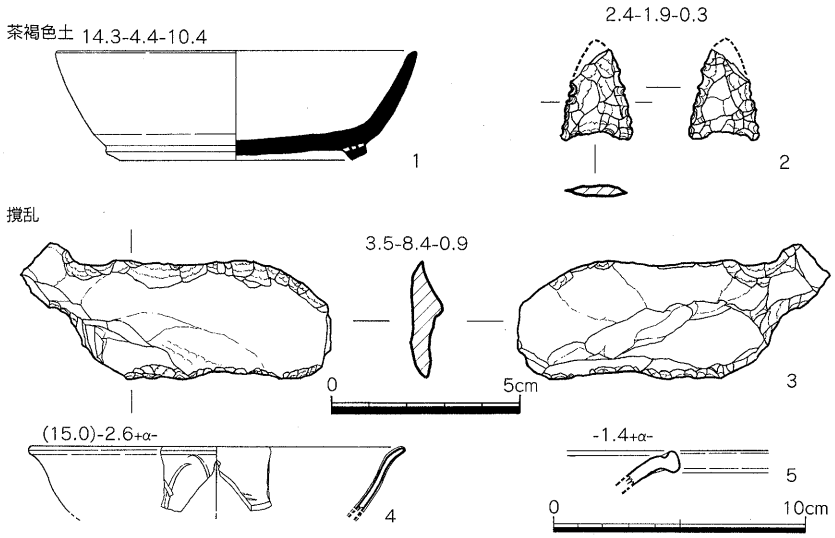


図13.土層出土遺物実測図（2・3は1/2）

石製品

石鏃（2）　先端部が欠損する個体で、残存長2.4cm、幅1.9cm、厚さ0.3cmをそれぞれ測る。石材はサヌカイトと考えられる。

撹乱（図13）

石製品

石匙（3）　基部を有することから石匙と考えた。打製によって成形されており、残存長3.5cm、幅8.4cm、厚さ0.9cmを測り、石材はサヌカイトと考えられる。

青磁

椀（4）　口縁部の破片で、素地特徴は灰白色で細かい気泡が極少量入る。釉調は灰緑色の光沢のあるガラス質釉でやや大きめの貫入が入っている。体部外面には鎬の無い蓮弁が観察でき、体部内面下位にも横方向の平行線がヘラによって描かれている。口縁部がやや外反する点ならびに釉調が鮮明な点から龍泉窯系青磁椀IV類の範疇に入るものと考えられる。

陶器

皿（5）　口縁端部内面を溝状に屈曲させる破片資料で、胎土は乳白色で精選されている。内外面全面に茶黄緑色の光沢を有する透明釉で内外面ともに細かい貫入が多く入る。諸特徴から瀬戸焼の可能性がある。

4.小結

検出した遺構の帰属時期は、下記のように想定できる。

【古墳時代前期】

1SB010・1SB020	掘立柱建物（建造時期）
1SK005・1SK015	土坑（廃棄時期）
1SD054	溝（埋没時期）

【平安期】

1SD042・1SD043・1SD047　　溝（埋没時期）

【鎌倉期から室町期】

1SD003　　溝（埋没時期）

当初、今次調査区の北西に位置する前田遺跡調査所見から、鴻臚館から大宰府への政治性を帯びた道路である官道が検出されることが予想されたが、報告にて記載してきたように、今次調査区内において検出されなかった。しかし、当該調査区から南では筑紫野市所在の大宰府条坊跡第99次調査地で、直線道路が検出され、その位置から前田遺跡で確認された直線道路の延長部分にあたることを考慮に入れると、当該調査区のみ欠失したものと理解した方が蓋然性は高いものと考えられる。

今次調査にて検出した遺構群の共時関係は明確に提示できない。ただし遺構間関係から建物（1SB010）廃絶後に土坑（1SK005）が形成されていることのみが指摘できる。

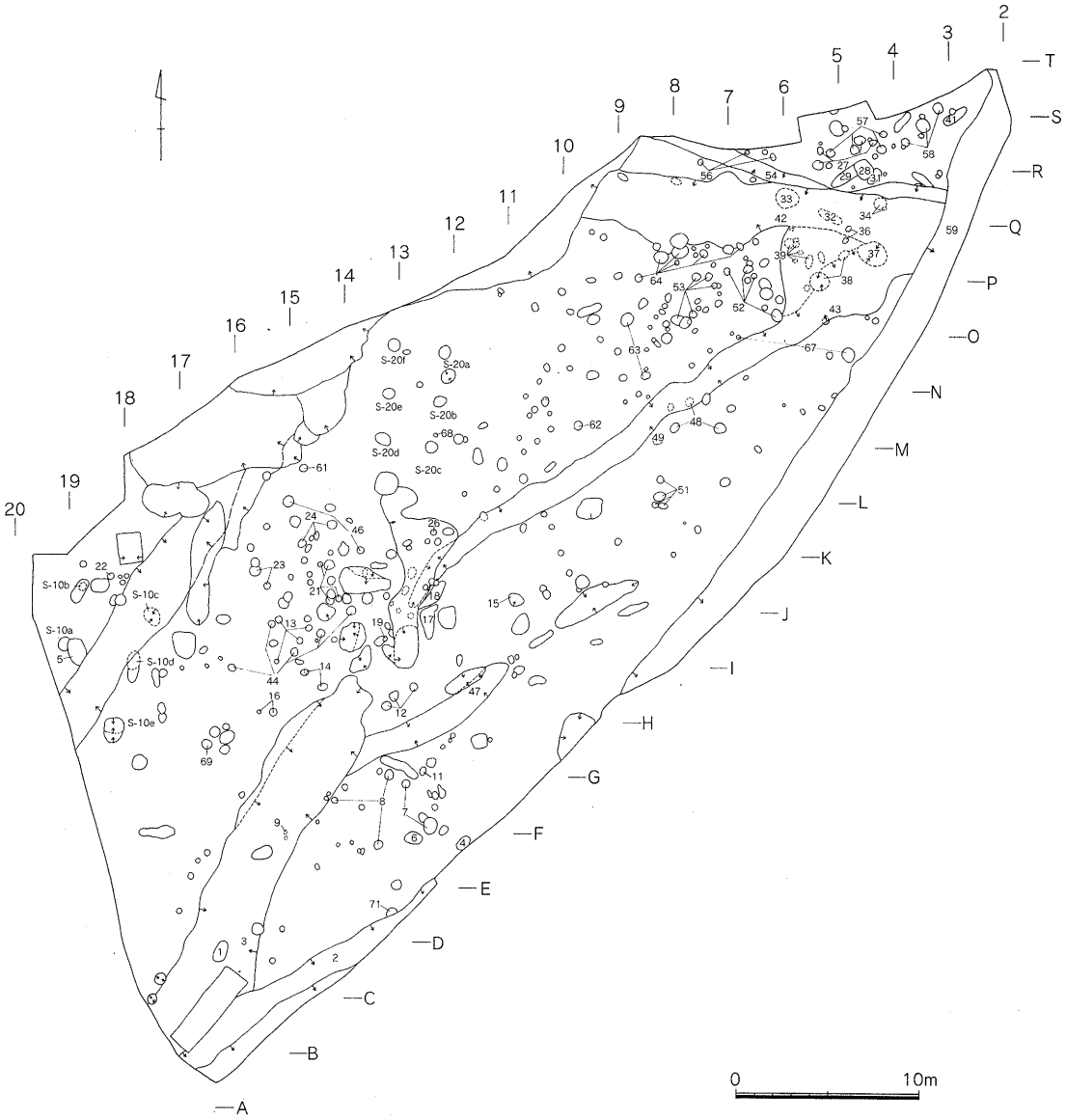


図14.上川久保遺跡　第１次調査遺構略測図

２.上川久保遺跡　第２次調査

１.調査概要・基本土層

調査地は、佐野地区遺跡群の中でも低所にあり、遺跡群のほぼ中央東部に位置し、１次調査地の東に所在する。調査地の地番は、大字向佐野字上川久保115-1外で、工事計画対象面積6,683㎡、調査面積1,500㎡を測り、調査期間は1994年11月2日～同年12月12日である。

旧水田が調査対象地であったため、現地表面から0.6mほどが耕作土および真砂土が覆っていた。これら表層の水田耕作土を除去すると、下位に約0.15mの茶灰色粘土が堆積しており、この土層が遺構検出面上位の遺物包含層にあたる。調査区は、区画整理課との調整不備により、既に工事着手がなされており、旧河川が埋め立てられるように調査区のほぼ中央を南西から北東に横断している。遺構の残存状況も不良で、多くは近年の撹乱による小穴群であった。検出できた遺構の多くは調査区南側に集中しており、掘立柱建物２棟と性格不明な小穴を検出した。

２.遺構

１）掘立柱建物

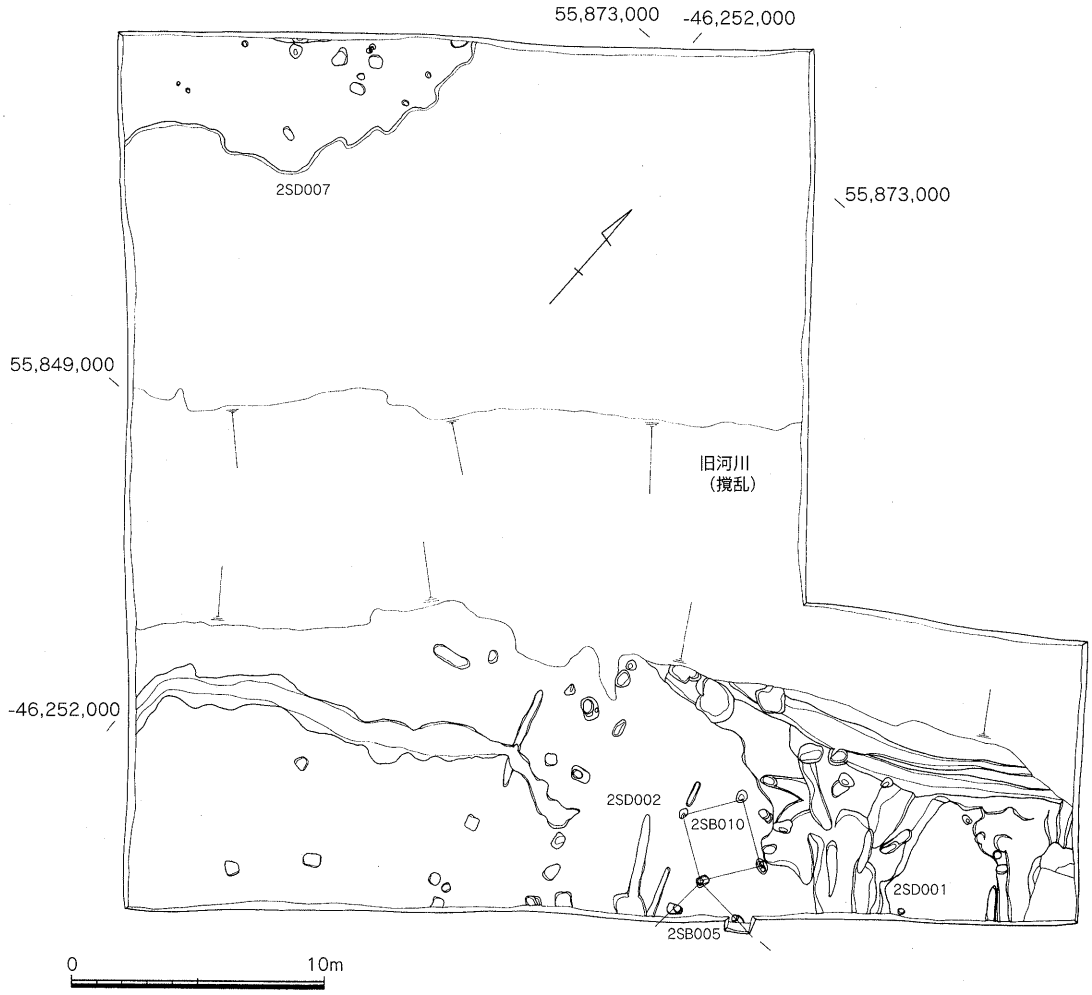


図15.上川久保遺跡　第２次調査遺構配置図（S=1/300）

一柱穴を共有する建物群で、2SB005は調査区外へ展開する可能性があったため、柱穴想定地点を拡張して確認を行った。結果として柱穴を確認したことから、先述したように一柱穴を共有する建物群と解した。ただし、建物構造から考えて同時併存の可能性は想定不可能であるが、前後関係に関しては不明である。

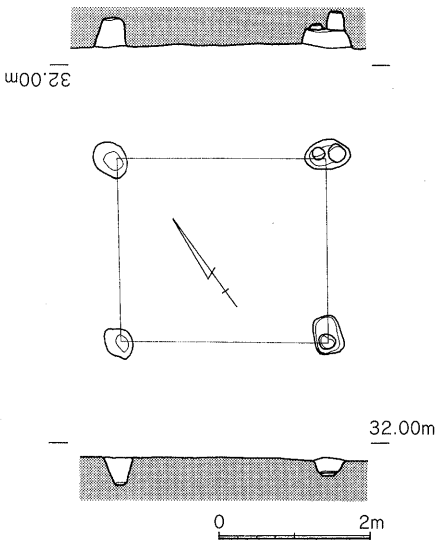


図16.上2SB010遺構実測図

2SB005

調査区南端部において検出した掘立柱建物で、建物規模については不明。ただし、後述する2SB010との関係が不明であり、建物として成立するかどうかは不明とせざるを得ない。

2SB010

調査区南端部において検出した掘立柱建物で、調査区内で完結するとした場合は、１間×１間の建物ということになるが、調査区外へ延伸する可能性もあるため、建物規模に関しては不明とせざるを得ない。柱間は南北方向は2.74m、東西方向は2.43mを測る。やや南北に長い南北棟ということになる。

２）自然流路

2SD001

調査区南東部において検出した溝で、調査区のほぼ中央を東西に流れる旧河川によって欠失していることから、2SD001の北側についての詳細は不明である。堆積土は淡茶灰色砂質土によって構成されており、堆積土中に散在的に遺物が出土した。溝底は凹凸が観察できるものの、全体的に堆積土の層厚は薄く、溝本流は検出した箇所よりは北側にあったものと考えられる。

2SD002

調査区南部のほぼ中央部分に検出した溝で、調査区内に入り込むにつれて欠失する。全体状況については不明。堆積土は茶黒色土によって構成されている。

2SD007

調査区を東西に横断する旧河川の北側に検出された堆積土で、黄茶色土および黒色土のブロックを多く混入する中粒砂によって構成される。

3.遺物（図18）

１）掘立柱建物

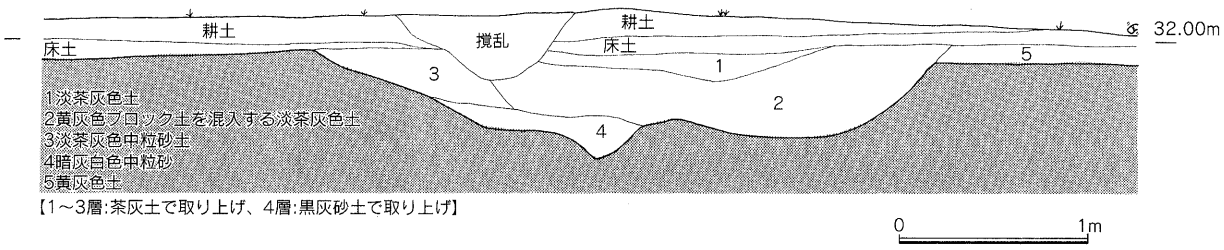


図17.上2SD001土層実測図

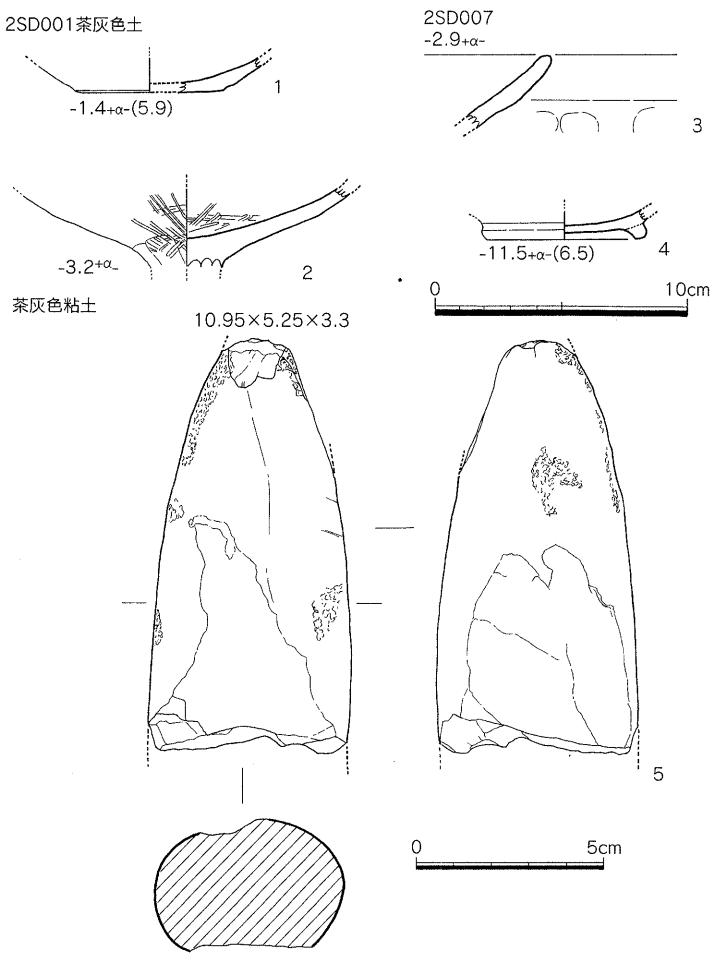


図18.上川久保遺跡第2次調査出土遺物実測図

出土遺物は各遺構ともに細片であり、図化はおろか時代性を考える上で提示できるものはない。

３）自然流路

2SD001茶灰色土出土遺物

土師器

坏a（1）底部のみの破片で、推定底径5.9cmを測る。底部外面は、回転糸切りによって処理されている。底径の割に体部が外方へ開く形状をとっており、消極的ながら搬入品の可能性がわずかにある。ただし胎土組成に関しては、花崗岩風化生成物によるものと大差なく、色調に関しても淡茶黄色を呈しているなど特異性は看取できない。

2SD002出土遺物

古式土師器

高坏（2）坏部と脚部の接合箇所の破片である。内外面ともにハケ調整ののち暗文様の放射状ミガキによって仕上げられている。胎土中に微細な白雲母片を多く含んでいる。

2SD007出土遺物

瓦器

椀（3）口縁部から体部中位までの破片で、丸底坏成形時に見られる坏体部と底部の境界部分の屈曲が顕著に観察できる。内外面ともに摩耗のため調整痕跡は観察し難いが、体部外面に指頭圧痕跡がわずかに観察できる。

土師器

椀c（4）高台部分の破片で、やや丸みをおびた輪状の丁寧な高台形状をとどめている。底部外面の処理は不明。

４）土層出土遺物

茶灰色粘土出土遺物

石製品

斧（5）刃部および基部が欠損したもので、表面処理である叩き痕跡が全面に観察できる。材質は、緑色片岩。

4.小結

旧河川の氾濫によって、遺構形成面が著しく削平されており、また出土遺物の残存状況も極めて悪いことから、遺構認定ならびに帰属時期の認定について苦慮した。結果として、古墳時代前期から鎌倉時代までの広い範囲で遺跡の帰属時期を認定できるにとどまっており、検出した掘立柱建物の建造時期を考える上で根拠を提示することはできなかった。また上2SB005とした掘立柱建物に関しては、柱穴を上SB010と共有する点ならびに調査区外に展開するなど、積極的に掘立柱建物とするには、やや躊躇せざるを得ない面も残った。周辺遺跡との総合化を図る上では、不安定材料が多い遺跡となった。しかしこのことを根拠として、今次調査の意義が低められることにはならない。

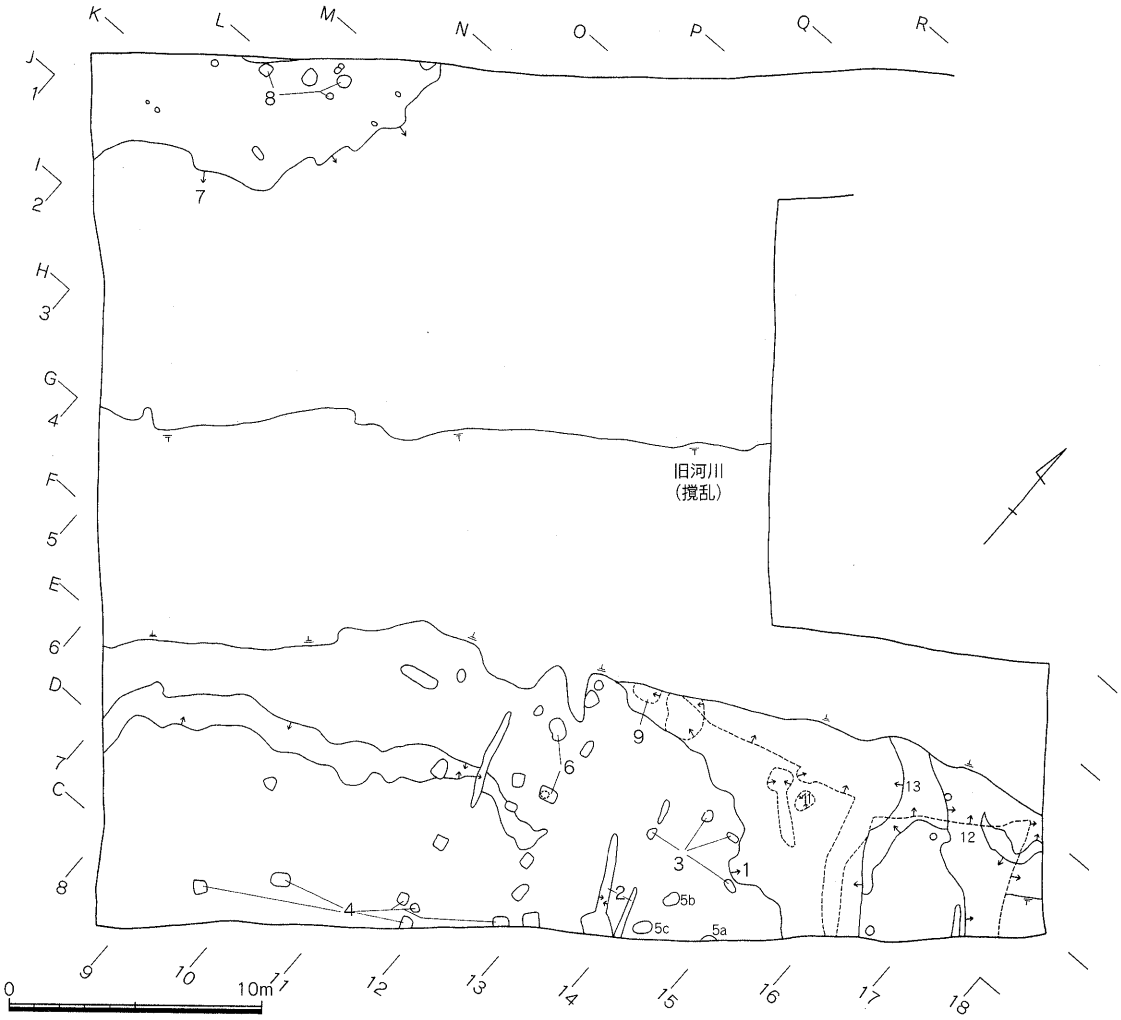


図19.上川久保遺跡　第2次調査遺構略測図

３.雛川遺跡　第２次調査

１.調査概要・基本土層

調査地は、佐野地区遺跡群の中でも低所にあり、遺跡群のほぼ中央東部に位置している。これまで報告してきた上川久保遺跡の南に隣接している。したがって、字界上区分されたかたちになっているが、考古事象上は同一のものとして理解可能な範囲である。調査地の地番は、大字向佐野字雛川19-1外で、工事計画対象面積2,100㎡、調査面積700㎡を測り、調査期間は1990年9月17日～同年10月24日である。

区画整理対象区域によって設定された調査区で、今次調査として設定した箇所は２箇所である。ほぼ東西に２箇所調査区を設定し、表土除去および遺構検出を実施したが、西側に設定した調査区では、遺構の検出は見られず、後世の削平によって欠失したものと考えられる。東側に設定した調査区では、弥生時代後期埋没の溝や古墳時代初頭の井戸をはじめ、平安時代埋没の溝を確認するなど、西側に設定した調査区とは対象的な状況であった。ただし、東側調査区においても調査区南西側すなわち西調査区へむかうにつれて遺構密度は極端に低くなる傾向があり、旧地形が南西へ高くなっていた可能性が看取できる。現況地表面から約1.8mないし2.0mほどが真砂土による盛り土がなされており、その下位に薄く旧耕作土が確認できた。この旧耕作土を除去すると、茶黒色土系の遺物包含層が観察でき、その下位に遺構が確認できた。

２.遺構

１）掘立柱建物

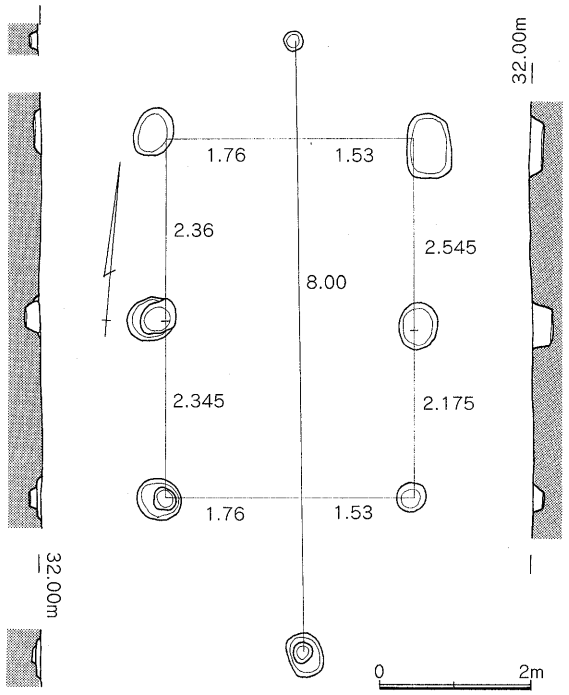


図20.雛2SB005遺構実測図

検出できた掘立柱建物は３棟で、全て調査区の南に集中している。建物規模は、３棟とも１間×２間で南北棟の小規模なものである。各々の建物の新旧関係は、切り合い関係が看取できないことから判然としない。

2SB005（図20）

調査区南西隅に検出した建物跡で、棟持柱と考えられる柱穴を南北に有すると考えられる１間×２間の南北棟である。柱痕跡等については、柱d以外のものは検出できておらず、厳密な柱間を計測することは困難であった。柱穴の残存深度は、平均して0.16m程度を測り、残存状況としては極めて悪い状況であった。検出した柱穴直径を基

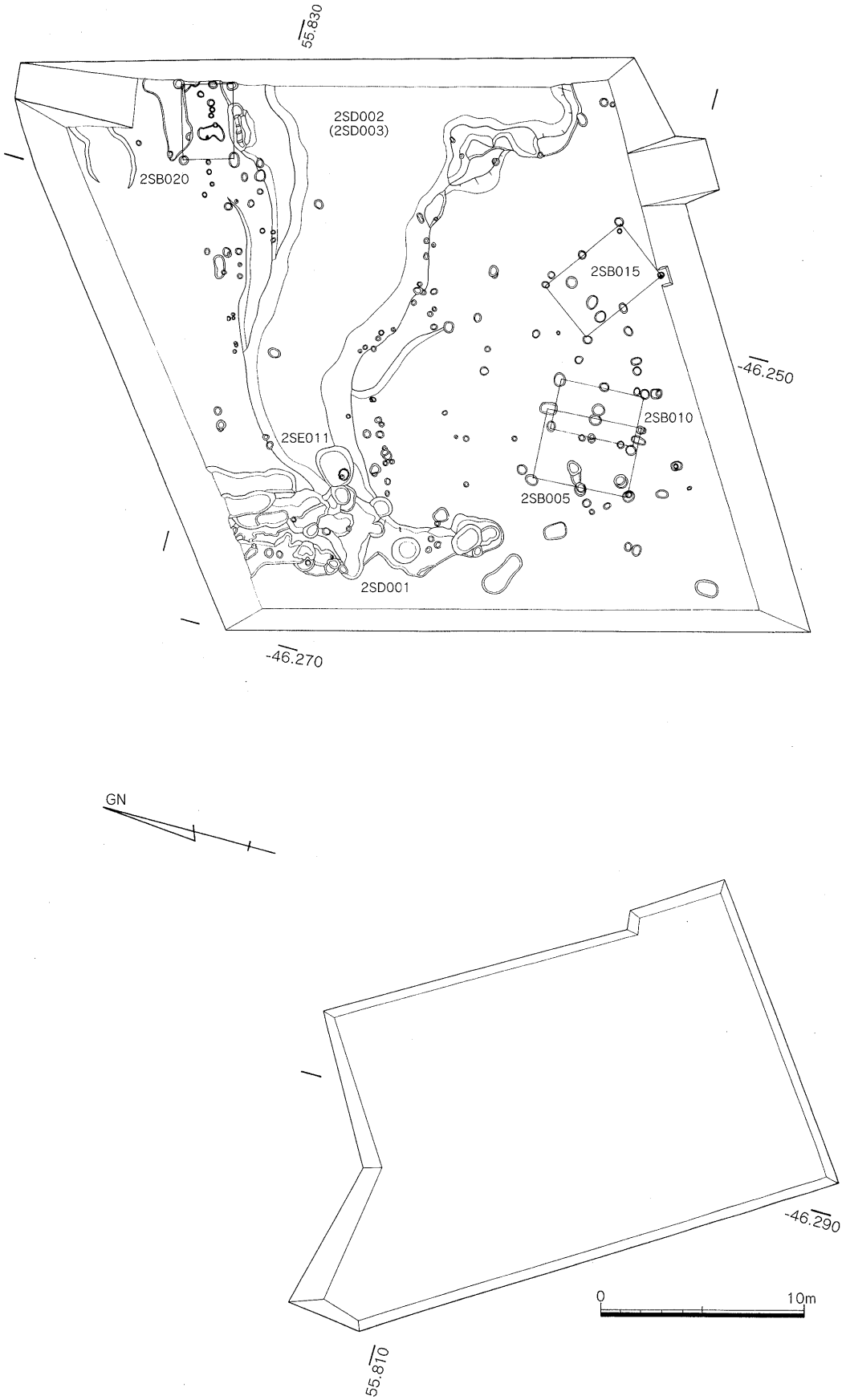


図21.雛川遺跡　第2次調査遺構配置図

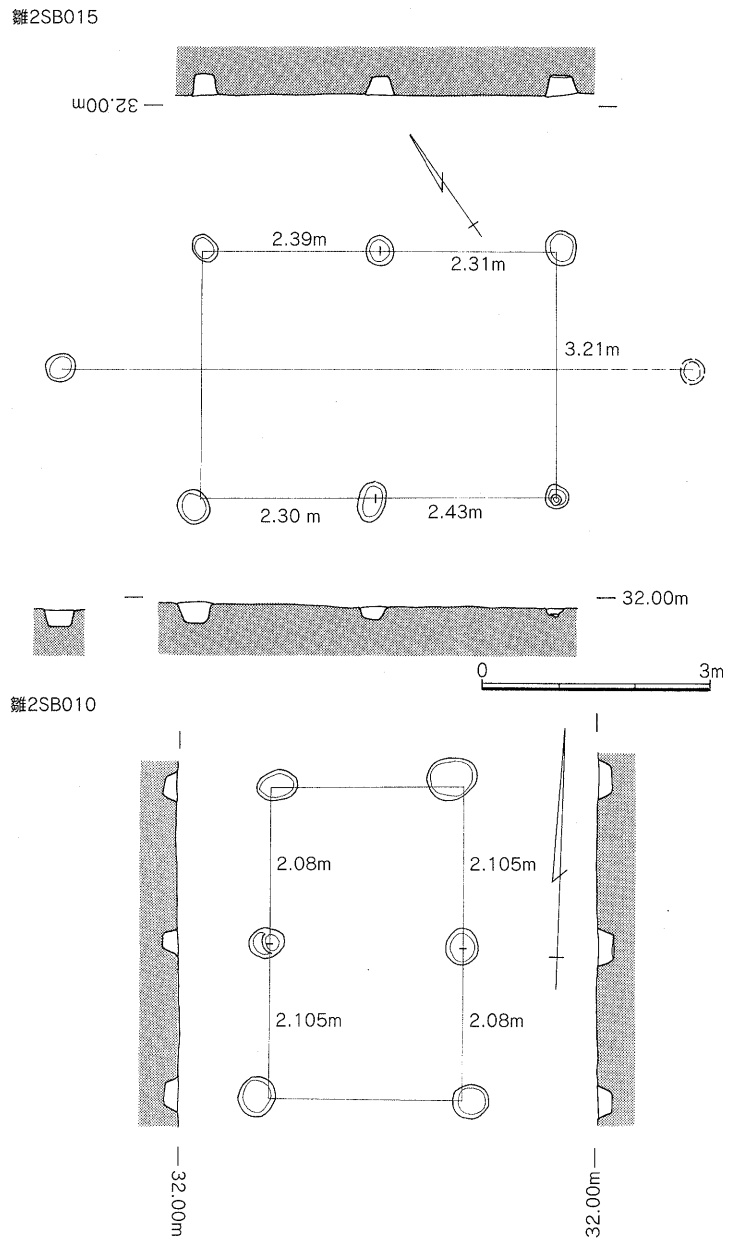


図22.雛2SB010・015遺構実測図

準としてその中間点を柱中心として仮定し、その中点間の距離を柱間として計測した値を図20に記載している。西側の桁方向の柱間（d－e、e－f間）は、ほぼ2.3m程度と均一であるが、東側の桁方向（a－b、b－c間）の柱間は北側（a－b間）が南側（b－c間）の柱間より0.37mほど広くなっている。梁方向の柱間は、3.29mを測る。建物の建造方向は、座標北を基準とし西に５度（N5°31′46″W）振れている。

2SB010（図22）

２SB005と重なるように検出した建物跡で、先述した2SB005との前後関係が考えられるが、柱穴の切り合いが確認できなかったことから、前後関係について考える根拠が提示できない。規模は１間×２間の南北棟で、柱痕跡は検出できなかった。柱穴の残存深度は0.21mと先の2SB005より残存度合いはよいが、良好とはいえない状況であった。柱間は、先の2SB005と同様の仮定のもと計測を行った。桁方向の柱間は全て2.00m前後と一定している。梁方向については、2.565mを測る。建造方向は、座標北を基準として、西にわずか１度（N1°21′50″W）振れている。

2SB015（図22）

さきの２棟のわずか東に検出した建物で、東側桁方向の南端柱穴が調査区外に想定できたことから、調査区拡張によって確認した建物である。整理途上において棟持柱が想定できたが、調査時に南側柱を検出できていなかったこともあり、断定できない。柱穴の残存深度は0.22m程を測り、先の２棟同様あまり良好ではないといえる。柱痕跡の確認ができていないことから、2SB005同様の方法を用いて柱間を計測すると、2.3m前後の値で一定している。梁方向の柱間は、3.21mを測る。建物建造方向は、座標北を基準とし、大きく西に55度（N55°29′52″W）振れている。先の２棟とは大きくずれている。

２）井戸

2SE011（図23）

調査区北西部に確認した井戸で、2SD002の堆積土を切るように形成されていた。長軸長2.30m、短軸長1.55m、残存する深さは0.60mをそれぞれ測る。掘り方形状は、瓢箪形を呈し、遺構掘り方南西部に隔たって井戸枠と想定できる木製品が残存していた。直径0.6m～0.55mを測るほぼ円形を呈し、一本の木の内部をくり抜いて成形したものと考えられる。この木製井戸枠には１ヶ所正方形を呈する穿孔が認められる。この井戸枠内には黒褐色粘土が堆積している。この井戸枠の外部に裏込め土として上位より黒色粘土←黒灰色粘土・黒色砂が用いられている。なお堆積状況観察から下位の黒灰色粘土と黒色砂の前後関係は不明である。なお黒色粘土と黒灰色粘土の層境界には、多量の植物繊維と種子が面を形成するように観察できる。井戸枠内部には、井戸埋没時に堆積したと考えられる土器が出土している。出土状況からみて、土器の出土自体が井戸使用時に近い可能性はあるものの、周辺に散乱していた土器が混入した可能性も否定できない。

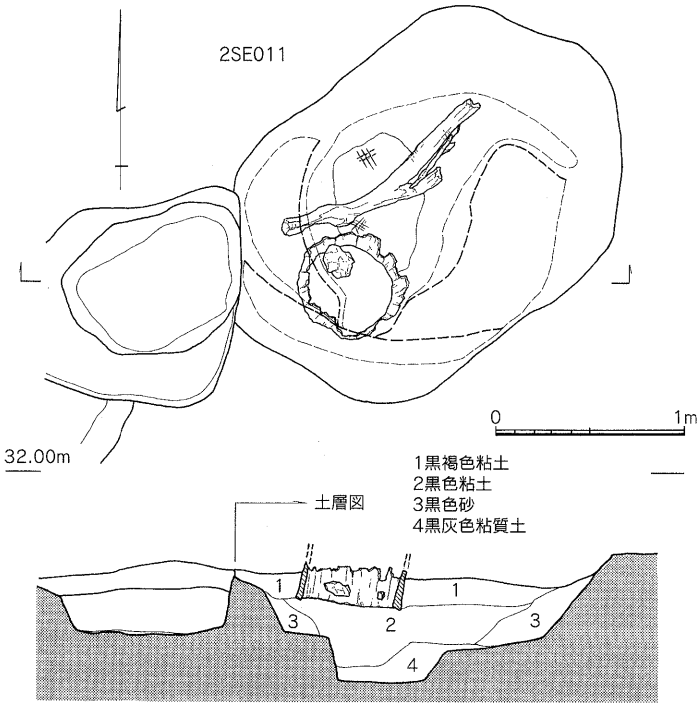


図23.雛2SE011遺構実測図（破線：完掘状況）

３）流路

2SD001

調査区北西部に流路主軸を南北に向ける溝を検出した。調査区のほぼ中央部で欠失するものであり、残存地形による欠失の可能性が高い。この溝は、2SD002を切って形成され、溝底には小穴が多数観察できた。最も幅が広い箇所で5.0m、残存長は13.5mをそれぞれ測る。溝内の堆積土は、上位より茶色土←黒色土←黄緑色土←灰色砂が観察できた。堆積土の層相から流れが想定できる堆積環境が次第に静穏な堆積環境へ変化したことが想定できる。溝の性格については、ほぼ南北にかつ直線的に形成されていることから、人工的な溝である可能性があるが、溝の構造上の観察を怠ったことから、この可能性を検討する材料がない。したがって今後周辺の調査ないしは、推定条坊外での類似遺構に関しては、検討材料収集も視野に入れて調査を進める必要がある。その際の視点として、護岸・広範囲に広がる規則性の有無など人工構築物であるとする属性の整理を行っておく必要がある。

この溝の走向について、調査区外の状況を見ると、特に溝の南延長箇所では、南北の水田畦畔が地形情報として観察できる（図1 - あ）。巨視的にみてという作業前提はあるものの、条坊

区域外（鏡山推定条坊外）における南北溝の有り様をどう理解するのか、条坊区域外という理解でいけば条里痕跡ということになるが、条坊痕跡とは異なった構造、つまり今次調査では一条の溝のみが検出されたことをもって、条里痕跡とし得るのかどうかを、推定条坊区域外遺構の事例から検討を加える必要がある。この事例を検証し逆に条坊施工区域を限定する根拠として昇華させることも可能であろうが、現状では単に見通しにすぎない。またこの地域には古代直線道路としての官道が施工されており、この官道との関わりを考慮に入れた検討を加えていく必要もある。

2SD002

調査区のほぼ全域を占めるように検出できた溝遺構で、溝底の検出標高の推定では、東から西へ流れる溝と考えられる。検出できた形状は、西から東へ広がる形状を呈している。溝内には上位より茶色土←黒灰色砂←白色砂←茶黒色土←黒色土と黒色砂の混合層が観察できた。特に顕著であったのは、茶黒色土の堆積であった。堆積層相から、堆積環境の微細な変化を追うことが可能であるが、各層相の層厚からみて、概して安定した静穏な環境下に置かれていたものと考えられる。溝の規模は、最大幅17.5m、残存する最短幅は、3.2mを測る。

2SD003

調査過程において便宜的に2SD002と分けて調査を行ったもので、遺構の観察状況からみると2SD002と同一遺構と考えられる。ただし調査所見において、2SD002の各土層との関係が把握できていなかったことから、遺物の報告においては調査時に取り上げた各土層ごとに報告を行う。

3.遺物

1）掘立柱建物

2SB005（図24）

古式土師器

甕×壺（１）　口縁端部のみの破片で、器種特定には至っていない。外面に横ナデ痕跡が確認できる。2SB005d出土。

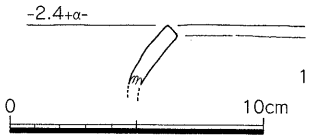


図24.雛2SB005d
出土遺物実測図

2）井戸

2SE011出土遺物（図25）

当該遺構からは、調査過程において各土層から遺物が出土している。図に示したように遺構検出時の遺物（2SE011）、枠内と考えられる木枠内出土遺物（2SE011枠内堆積土）、裏込め土と考えられる土層出土遺物（2SE011裏込め土・2SE011裏込め土（黒灰色粘土））の大きく３種に弁別できている。

2SE011（図25－1～9）

古式土師器

鉢（１）　口縁部の破片で、口縁部が内湾する甕の可能性もあるが、胎土が精選されていること、内外面の最終処理がハケにより丁寧になされていることなどから、ここでは鉢とした。内

面は横ならびに右下がりのハケ調整、口縁端部は横ナデによって仕上げており、外面は不定方向のナデによって仕上げている。

壺（２・３）　両者とも口縁部の破片資料で、２は二重口縁壺、３は口縁部が直立することから直口壺になるものと考えられる。２は口縁部屈曲部外面に右方向からの押圧による刻み目が

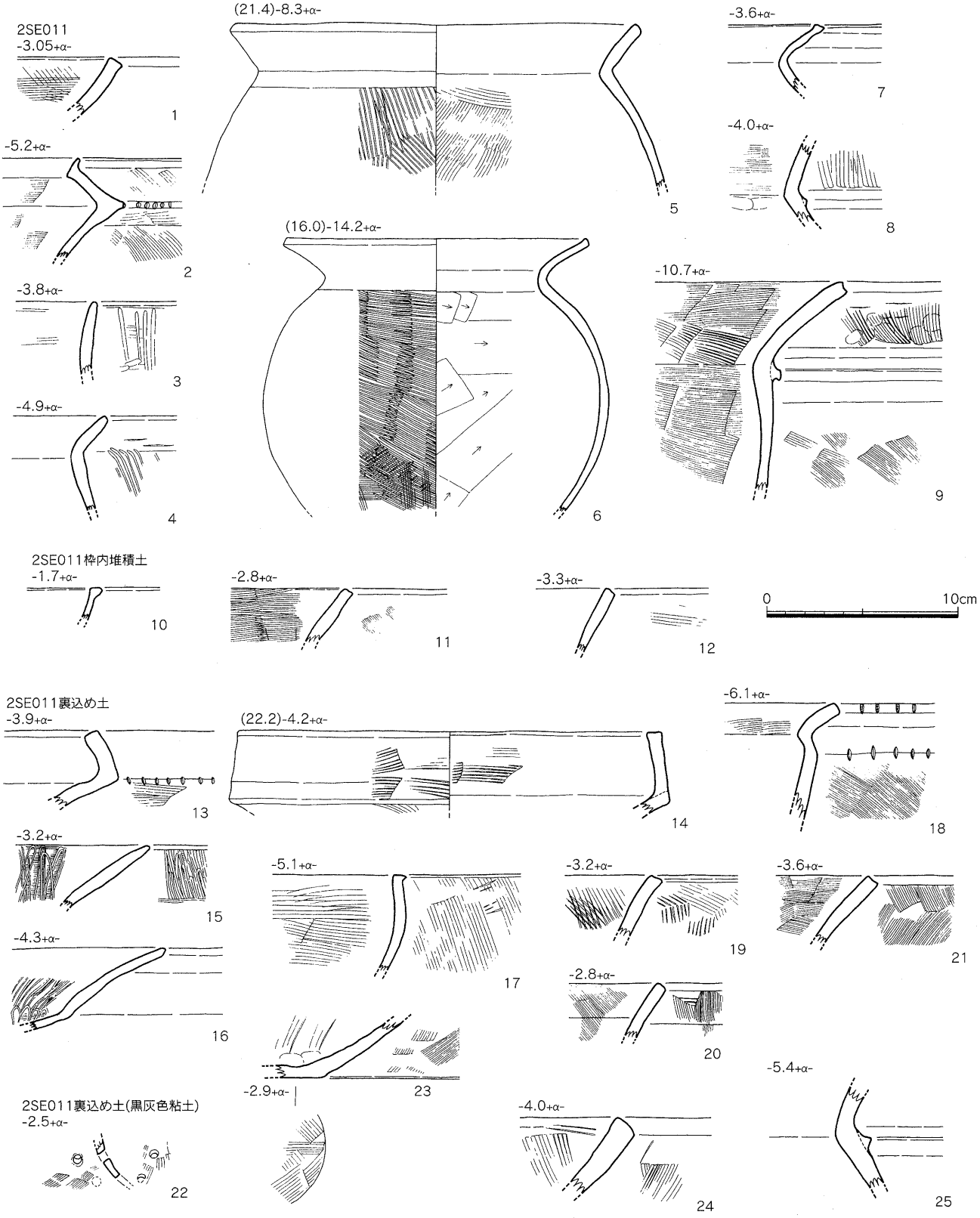


図25.雛2SE011出土遺物実測図

観察でき、口縁端部を面取りする。内外面ともに一次調整としてハケによる調整を行い、最終仕上げとして横ナデを行っている。3は口縁端部を丸く仕上げるもので、2と同様に内外面ともに一次調整にはハケを用い、最終調整として横ナデおよび装飾技法として外面を縦方向に磨いている。

甕（4～9）　複数形式が確認できるが、分類を提示できる数がないことから、個別に解説する。4・5は頸部屈曲が「く」の字形を呈するもので、口縁部長が比較的短いものである。4は内面処理が摩耗によって観察できないが、5は体部内外面ともにハケによって仕上げられている。口縁部は両者とも横ナデがなされている。6は、頸部形状は外面からは4および5と同様であるが、内面において頸部の独立化が観察でき、さらに口縁端部がつまみ横ナデによって断面三角形に立ち上がっている。体部外面は細筋の叩き具痕跡を留めており、体部外面下位には縦方向のハケが観察できる。内面は頸部下全面に削り痕跡が観察できる。7は頸部上位の破片資料で、6ほどの頸部の独立化は看取できない。口縁端部を二工程による平坦面形成によって仕上げており、口縁部内外面は横ナデが観察できる。6および7の胎土特徴は、白色粒子および雲母細片を少量含有するほかは、酸性岩風化生成物の特徴を留めており、在地産である可能性が高い。8・9は大形の甕で、頸部外面に突帯が貼付される。内外面ともに粗めのハケによって器面調整がなされ、8は断面三角形、9は断面台形の突帯が頸部外面に貼付されている。9は断面台形を形づくるため、貼付後形状整形のための横ナデがなされており、外圧による粘土移動が上方から下方へ観察できる。

2SE011枠内堆積土（図25－10～12）

古式土師器

器種不明（10）　口縁端部の破片であることから器種想定が困難なものである。口縁端部に平坦面を形成するもので、一見須恵器蓋3の断面形状に類似するものであるが、内外面、傾きなどから判断して蓋3ではないと考えた。しかしこれに代わる器種が判断できなかったこともあり、器種不明として報告する。焼成不良であり、調整痕跡は不明。胎土特徴として、白雲母が顕著に観察できる。

甕（11・12）　両者ともに、口縁端部の破片で全体形状に関しては不明。内外面はハケによって調整されている。なお11の胎土特徴として、白雲母が顕著に観察できる。

2SE011裏込め土（図25－13～21）

壺（13・14）　両者ともに二重口縁壺で、口縁部形状が内傾するもの（13）と、直立気味なものの二者がある（14）。13は、口縁屈曲部外面において、右方向からの押圧による刻み目が観察できる。両者ともに一次調整は、ハケによる調整がなされており、その後仕上げとして横ナデが施されている。

高坏（15・16）　両者ともに坏部の破片資料で、内外面ともに一次調整としてハケ調整がなされ、その後装飾技法としてのミガキが内外面に観察できる。ただし16の外面は器面摩耗のため詳細は不明。胎土特徴として16は、白雲母細片が多量に含まれている。

鉢（17）　口縁端部を平坦に仕上げるもので、丸みを有する体部形態を有し、内外面ともにハ

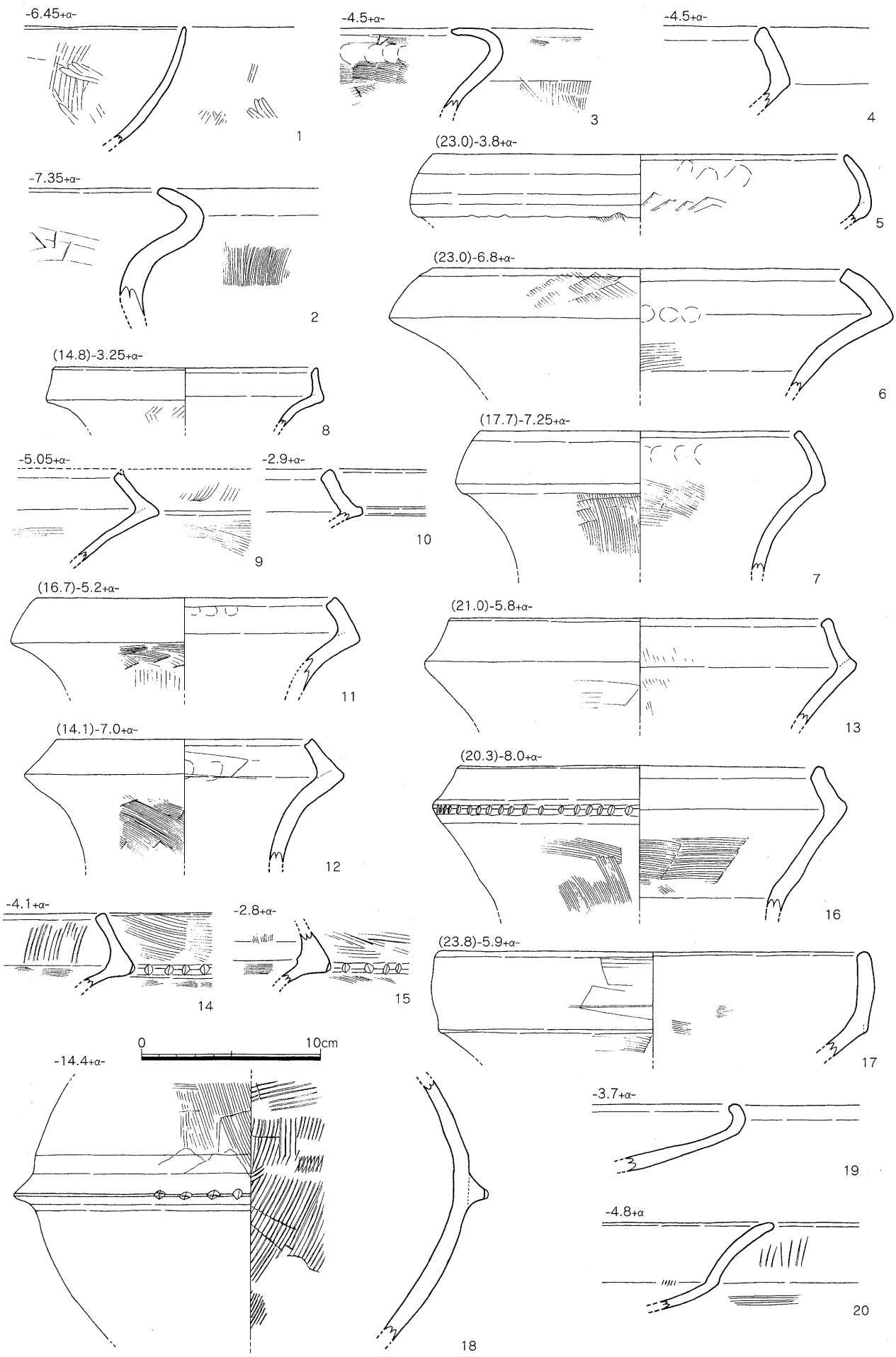


図26.雛2SD001茶色土出土遺物実測図（１）

ケによって仕上げられている。全体形状に関しては不明。

甕×鉢（18）　頸部が屈曲し外面の体部上位および口縁端部に、右方向から押圧された刻み目が観察できる。体部内面および口縁部外面は横ナデ、口縁部内面および体部外面はハケによって仕上げられている。

甕（19～21）　口縁部破片であり、全体形状は不明。いずれも内外面ともにハケによって仕上げられている。ただしハケの精粗に差があり、粗いハケを用いる19、と細かいハケを用いている20・21がある。

2SE011裏込め土（黒灰色粘土）（図25－22～25）

古式土師器

高坏（22）　脚部の小破片で、精製の小形器台である可能性も捨てきれない。穿孔が同一面に二箇所観察でき、内外面ともにハケ調整によって仕上げられている。

壺（23）　底部破片で体部への移行状況から壺底部と推定した。底部も含めた内外面ともにハケによって仕上げられており。内面において底部と体部への移行部分に指頭圧痕跡が観察できる。

甕（24・25）　いずれも大形の甕と考えられ、24は口縁部破片、25は頸部破片であり、全体形状は判然としない。25は断面三角形の突帯が貼付されている。

３）流路

2SD001

遺構報告に際して記載してきたように、上位より茶色土←黒色土←黄緑色土←灰色砂の各堆積層の層序関係が観察できたため、遺物報告にあたって、上位より報告を行う

2SD001茶色土（図26～29－１～59）

瓦器

椀（１）　口縁部から体部下位までの破片資料で、内面はミガキｂの後、やや丁寧なミガキｃによって仕上げられている。外面は明確ではないが、ヘラ削り後にやや丁寧なミガキｃによって仕上げられている。瓦質化は十分ではなく、白灰色～黒灰色までの不均質な色合いを呈している。口縁部内外面および体部下位外面は黒色系の色調を呈する。形状から深めの椀形態であり、太宰府周辺にて生産されたものであれば稀な製品といえる。

古式土師器

壺（４～18・21・22）　口縁部形状が判明する個体の多くは二重口縁壺で、22のみが外方に単純に開く形態を有するものである。二重口縁壺には、口縁部が内方へ傾斜するもの（４～16）、直立するものの二者が見られ（17）、内方へ傾斜するものにも二者あり、袋状に内湾するもの（５～７）、直線的に内湾するもの（８～15）がある。器面調整はいずれもハケによって調整されており、14～16は二重口縁の屈曲部外面に右方向からの押圧による刻み目が観察できる。21は体部上位から頸部上位までの資料で、二重口縁壺と想定できるものの、口縁部の傾斜方向については内傾するものと考えられるが確定できない。体部中位以下は平行叩き痕跡をとどめているものの、外面全体に叩き痕跡が後処理として行われたハケ痕跡下に観察できる。体部内

面はハケ痕跡をとどめており、口縁部は横ナデによって仕上げられている。18は体部のみの資料で、口縁部形態については明らかにし得ない。体部中位に突帯を貼付し、左方向からの押圧

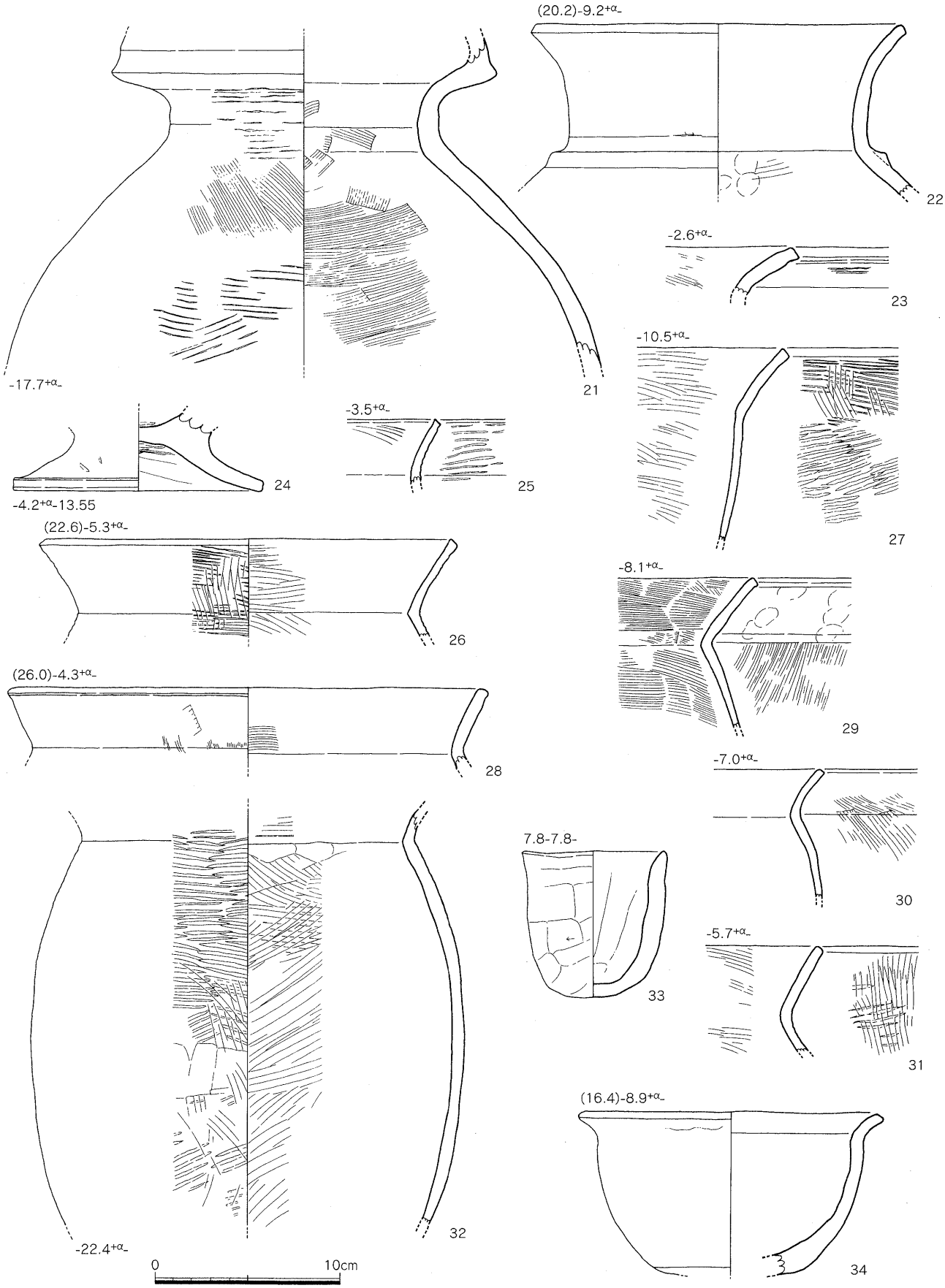


図27.雛2SD001茶色土出土遺物実測図（２）

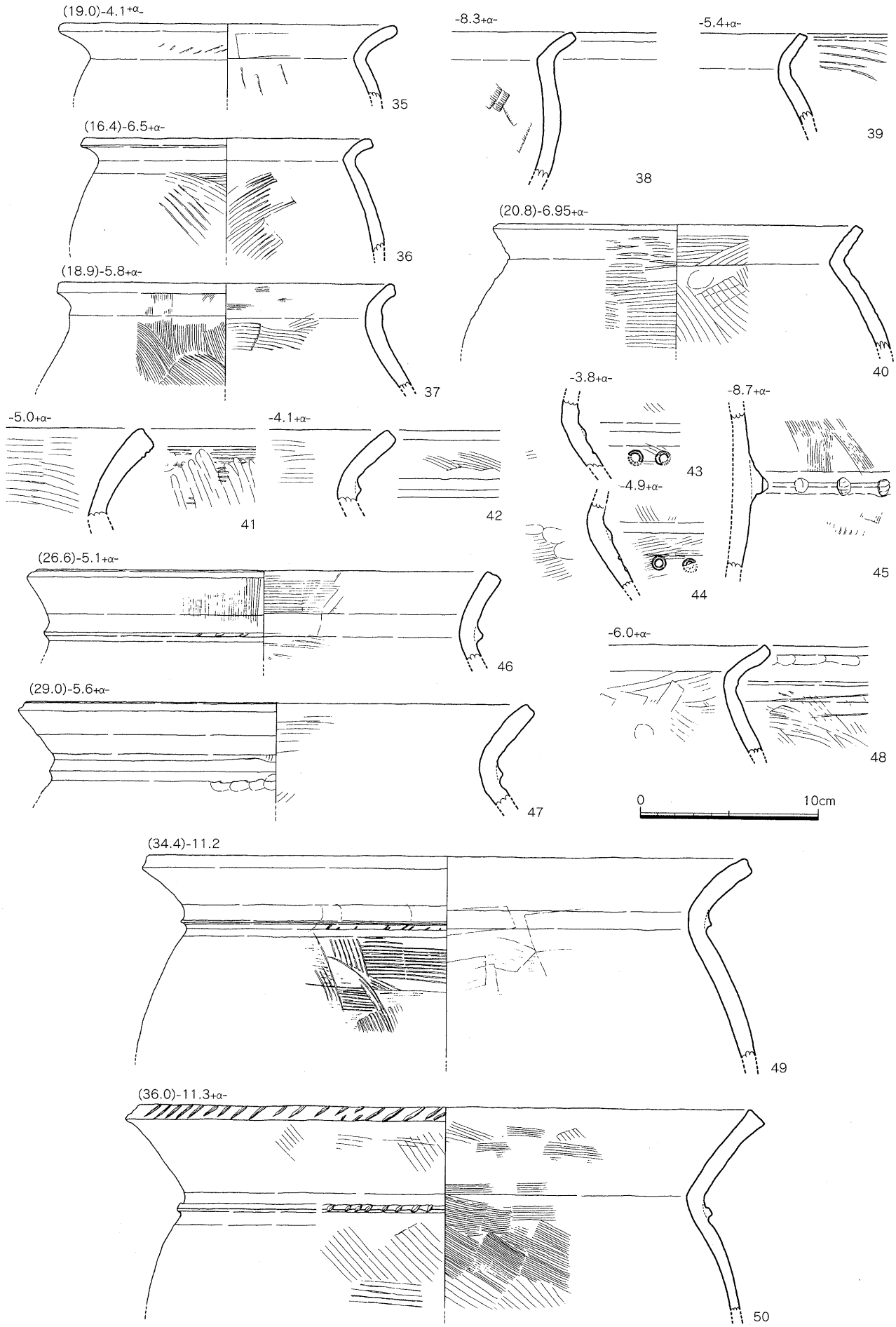


図28.雛2SD001茶色土出土遺物実測図（３）

による刻み目が施される。22は、頸部に断面三角形の突帯を巡らし、口縁部は外方へ開く形態

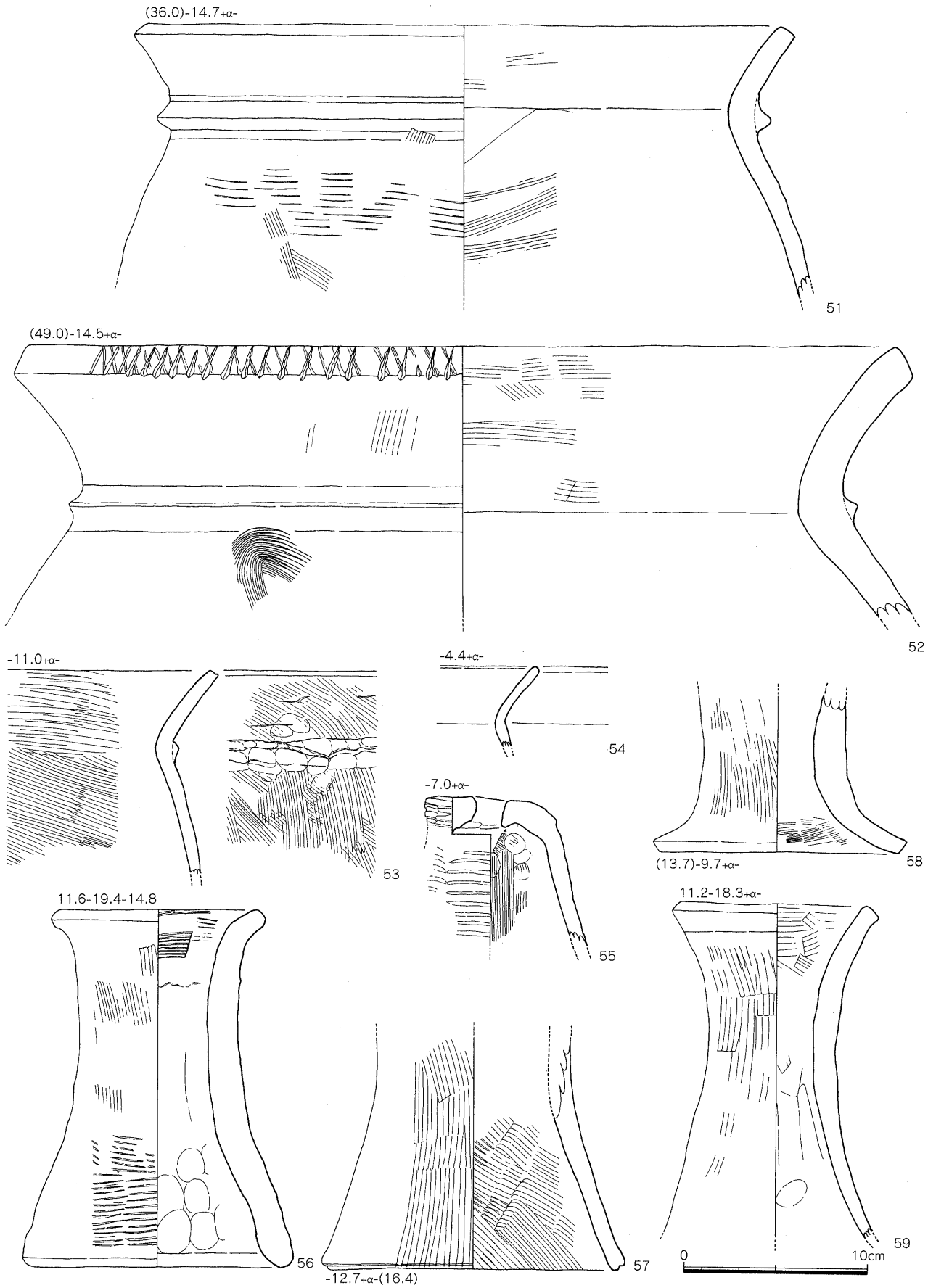


図29.雛2SD001茶色土出土遺物実測図（４）

のもので、胎土および色調が他のものとは異なり、砂粒を多く含みかつ赤橙色を呈している。

高坏（19・20・24）　19は口縁部を内方へ丸く仕上げるもので、器面摩耗のため調整痕跡等は不明。20は坏底部から大きく外方へ開くもので、一次調整として考えられるハケ痕跡がわずかに観察できる。いずれも破片資料であることから、直径は推定していない。24は脚部のみの破片で、器種特定には躊躇せざるを得ない。外へ大きく安定した脚部形状をとり、端部は丁寧に面取りを行う。

甕（25～54）　大別して三種の甕が出土している。1）口縁部の外反は大きくなく、直立気味に長く立ち上がる口縁部形態を有するもの（25～31）。2）口縁部の外反が1）に対して大きく、短めの外反する口縁部形態を有するもの（35～40）。3）大形の甕で、頸部に突帯を巡らせるもの（41～53）。その他としてまとまりを看取できないものとして23・33・34・54がある。

支脚・器台（55～59）　55は上面が閉じ、突起状の張り出しが観察でき、明確な二次焼成に伴うと考えられる赤色に変色した箇所は観察できない。他の4点は筒状の形状を示し、叩き後にハケによって丁寧に器面調整を行っている。

2SD001黒色土（図30～31－1～30）

須恵器

坏蓋（1）　天井部の破片資料で、型式認定のための法量および口縁部形態をうかがい知ることはできない。天井部外面は全面を回転ヘラ削りによって仕上げられている。また天井部外面には三筆によるヘラ記号が付されている。還元不良なため橙色系の色調を呈している。

土師器

坏a（2・3）　2は底部のみ、3は全形が把握でき、両者の底径を比較すると同様な傾向を示していることから、同一型式に属するものと考えられる。2の底部外面の切り離し処理は、回転糸切りであるが、3については器面摩耗のため判然としない。ただし先述したように同一型式と考えられることから、3も2と同様に回転糸切りによる切り離し処理を行っているものと考えられる。法量および形態から大宰府XVII期に属する型式であると考えられる。

古式土師器

鉢（4）　底部が欠損する個体で、全形は不明であるが底部より内湾気味に立ち上がる体部形態を有する。底部外面は手持ちによるヘラ削りによって仕上げられ、内面はハケによる器面調整の後、ナデによって仕上げられている。

高坏（5～7）　全形の把握できる個体はなく、坏底部から外方へ開く口縁部形態を有するもの（5）、大きく裾広がりな形態の脚端部（6）、あまり開かない脚部（7）の破片資料である。6は穿孔が1箇所観察できる。なお7は、脚の広がり方からみて器台の可能性もあるが、精製度合いが器台ほど粗雑ではなかったことから、ここでは高坏脚として報告した。

壺（8・9）　両者とも口縁端部の破片資料であり全形が不明であるが、内傾する口縁部形態を有する二重口縁壺である。8は器面摩耗のため調整痕跡が不明確であるが、9は頸部外面にハケ痕跡をとどめている。

甕（10～25）　直立気味に立ち上がり、長い口縁部形態を有するもの（10）、外方に開くが短

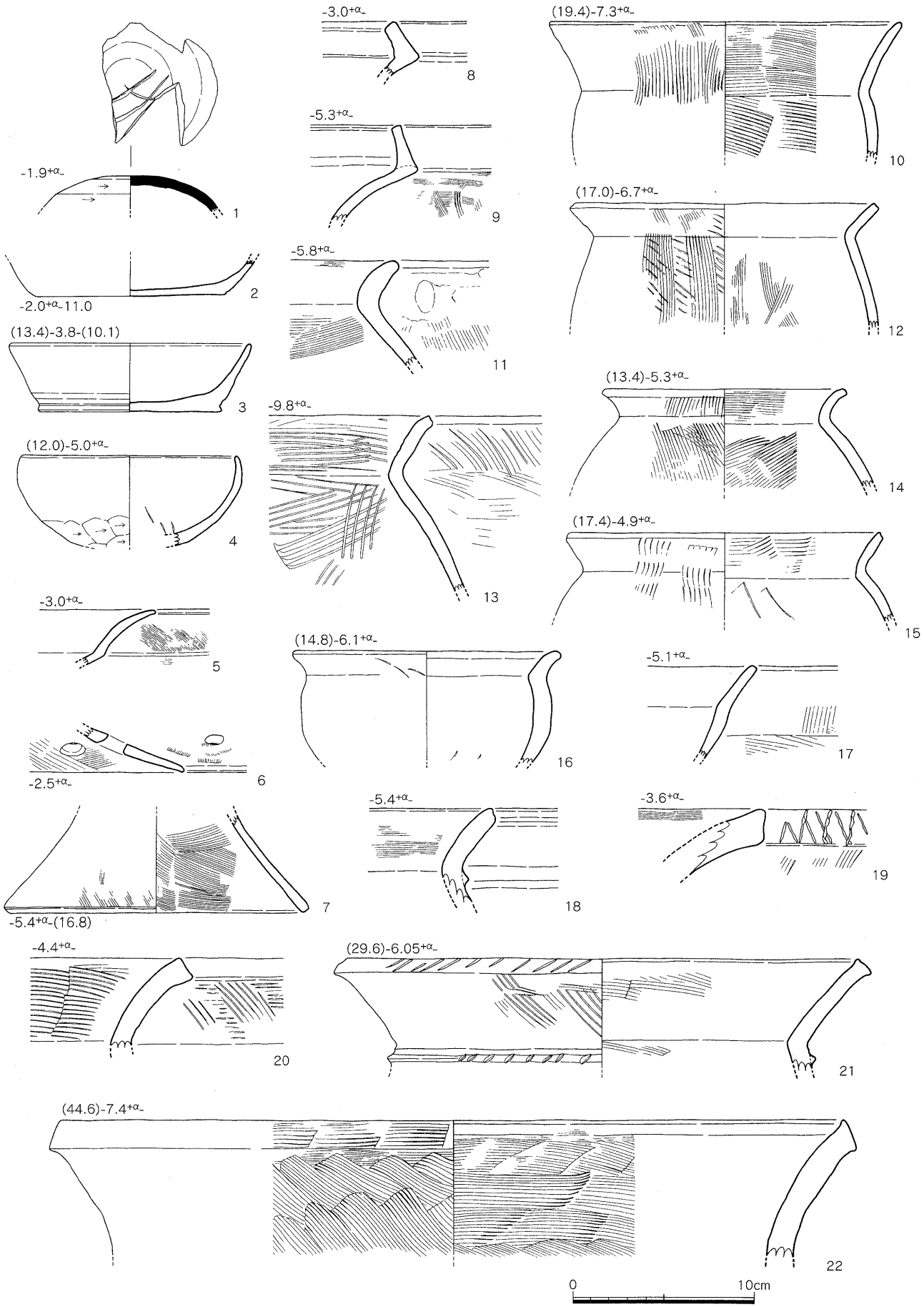


図30.雛2SD001黒色土出土遺物実測図（１）

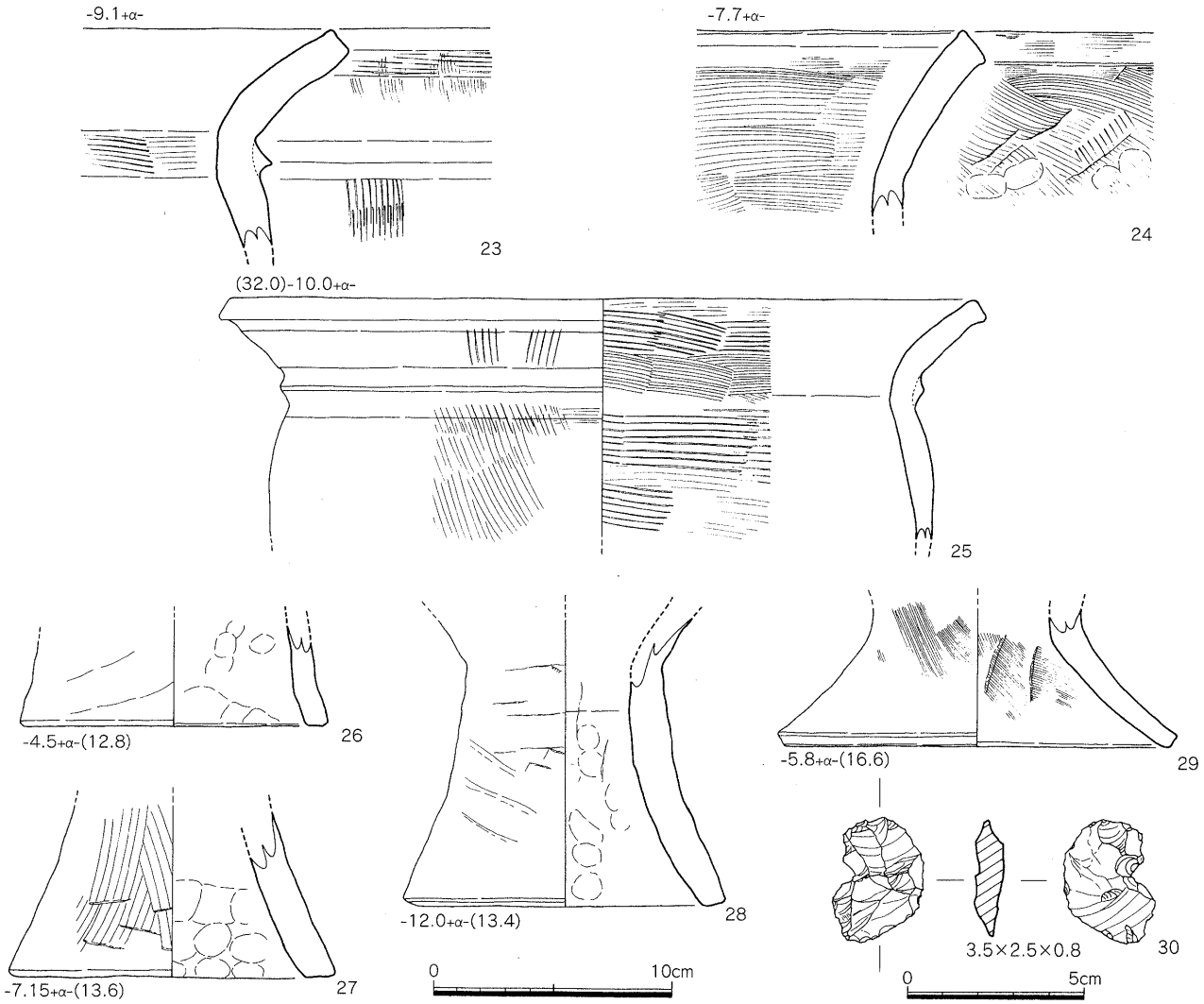


図31.雛2SD001黒色土出土遺物実測図（２）

い口縁部形態のもの（11～16）、大形の甕（18～25）の三者に大別でき、鉢形態に近いと考えられる17がある。前二者ともに外面は平行叩きの後ハケによる最終調整がなされている。内面はいずれもハケによって仕上げられている。大形の甕は、頸部に突帯を巡らすもの（18・21・23・25）があり、口縁端部に刻みによる文様を施すもの（19・21）がある。

器台（26～29）　いずれも円筒形を呈する器台と考えられ、外面に平行叩き痕跡、ハケならびに絞り痕跡が観察できる。なお29は他個体に比較して、丁寧な器面処理を行っている。

石製品

剥片（30）　形状から剥片と判断した、材質は黒曜石で、風化のためか灰黒色を呈している。

2SD001黄緑色土（図32－１・２）

古式土師器

壺（1）　二重口縁壺の口縁部破片資料で、やや内傾する口縁部形状を呈している。内外面ともに横ナデによって仕上げている。

甕（2）　口縁端部の破片資料で、大形の甕の可能性がある。内外面ともに横ナデによって仕

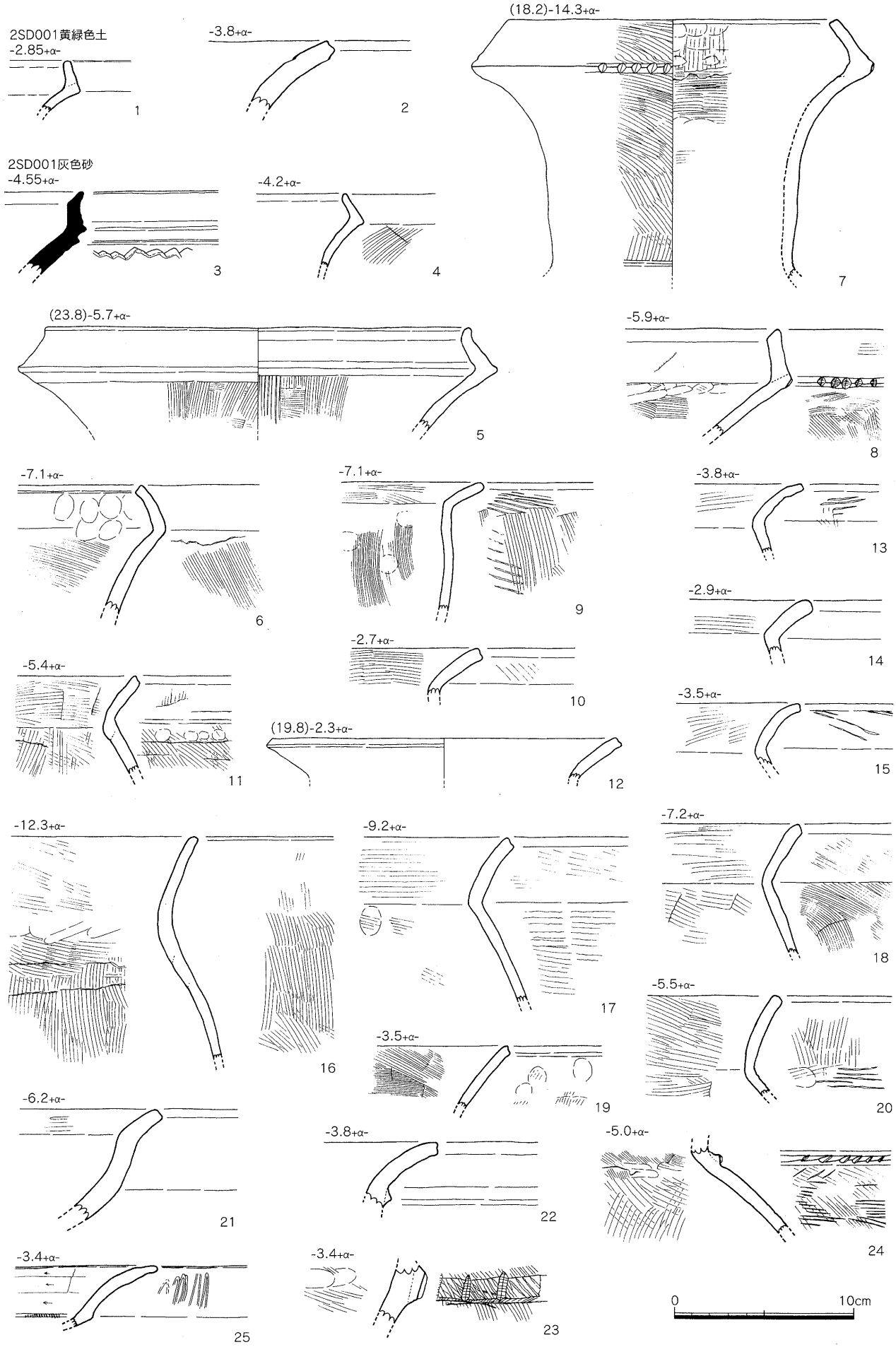


図32.雛2SD001黄緑色土・灰色砂出土遺物実測図

上げる。

2SD001灰色砂（図32・33－3～33）

須恵器

甕b（3）　口縁部の破片資料で、二重口縁を呈する。擬口縁外面にヘラによって、やや粗雑な波状文が施文されている。

古式土師器

壺（4～8）　いずれも二重口縁壺で、内傾する口縁部形態を有するものである。5・7は直線的に内傾する口縁部形態を有するもので、6は同様に内傾するものの、袋状にややふくらみつつ内傾する口縁部形態を有している。8はやや大形のものになる可能性があり、擬口縁屈曲部に右方向からの押圧による刻み目が施されている。

鉢（21）　やや浅めの器高を有するものと考えられ、器壁も厚めの印象を受ける。内外面ともに丁寧な横ナデによって器面調整され、内面は手持ちによるヘラミガキ痕跡が確認できる。

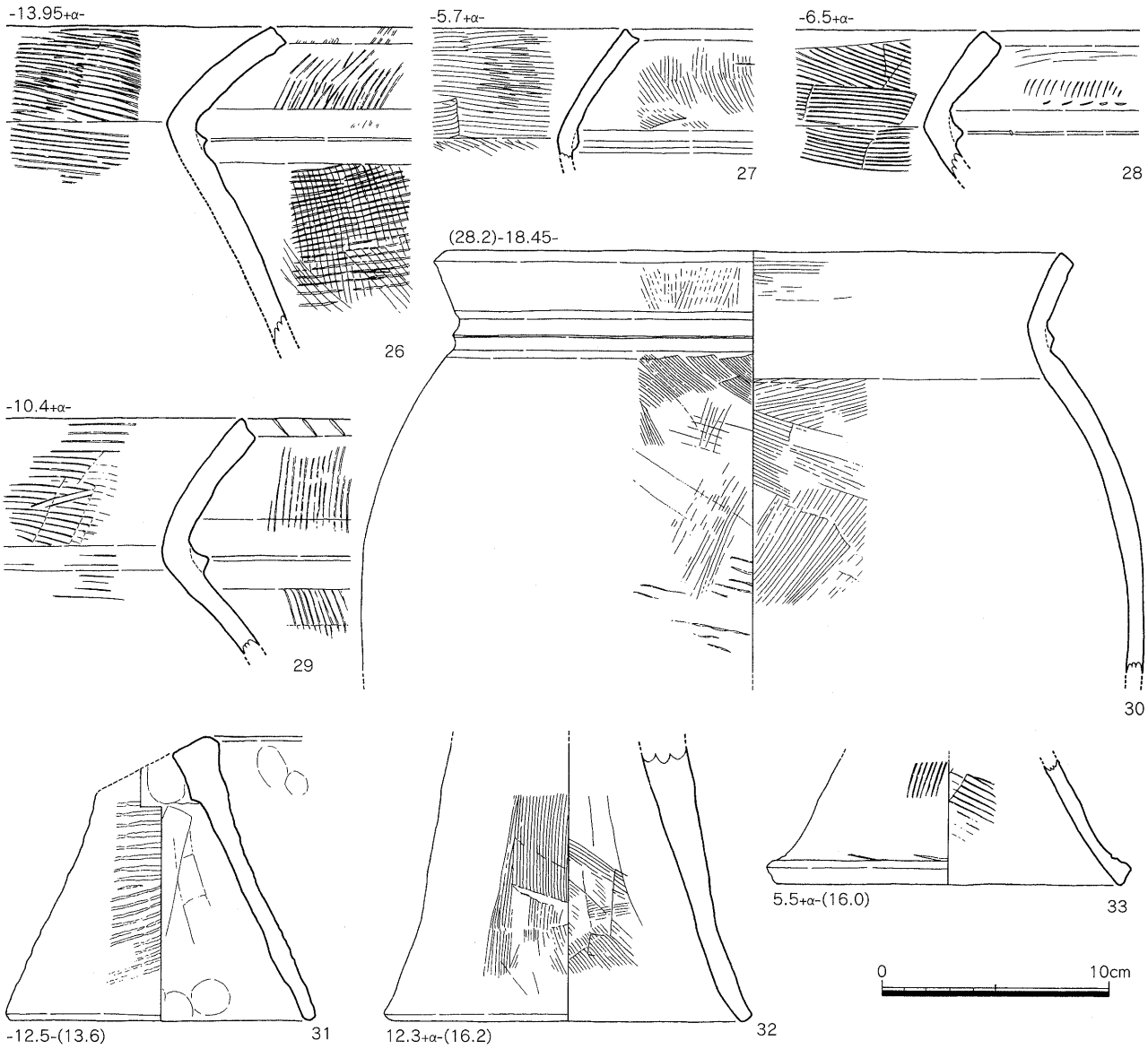


図33.雛2SD001灰色砂出土遺物実測図

高坏（25）　底部から外方へ大きく開く口縁部形状を有するもので、外面には暗文様のヘラミガキ痕跡が観察できる。全形については不明。

甕（9～20・22～24・26～30）　短く外方へ開く口縁部形態を有するもの（9～15）、あまり外方へ開かず直立気味に長く立ち上がる口縁部形態を有するもの（16～20）が主としてある。22～24および26～30については、頸部に突帯を有するもので、大形の甕になるものと考えられる。一般的に雛川遺跡で確認される突帯は断面三角形であるのに対し、23は断面台形を呈し、凸面にハケ状原体による刻み目が観察できる。24については断面三角形の突帯に左方向からの押圧による刻み目が観察できる。29は口縁端部に左方向からの押圧による刻み目が施されている。

支脚・器台（31～33）　31は、上面が閉鎖しており、突起が確認されることから支脚と考えられ、外面に平行叩き痕跡を明瞭に留める。32・33は全形が把握できないため器種特定は困難であるが、先の支脚に対して、筒状を呈するものと考えられることから器台と判断した。先述した支脚に対して、これらの個体はハケ痕跡が多用されており、やや丁寧な印象を受ける。

2SD002

報告に際して述べてきたように2SD002の堆積土は、上位より茶色土←黒灰色砂←白色砂←茶黒色土←黒色土と黒色砂の混合層が観察できたことにより、遺物も上位より報告する。

2SD002茶色土（図34～52－1～154）

古式土師器

鉢（1～15）　法量差および形態によって幾つかの群にまとめることができる。内湾気味の体部形態を有し、深めの器高を有するもの（1～5・10～12・14・15）。底部より大きく開き器高の浅いもの（6～9・13）。前者のものには、調整・装飾技法上、精粗の差があり、1は外面縦方向のヘラミガキ、内面はハケによって調整されている。粗製のものは底部外面を手持ちによるヘラ削りによって器面調整し、内面および体部外面上位はハケによって調整されている。ただし工程は底部のヘラ削りが最終調整である（2～5）。さらに粗製のものは、内外面に指頭圧痕をとどめているもの（11・12）、内外面に指頭圧痕および外面に平行叩き痕跡をとどめるもの（15）がある。器高の浅いものは内面はハケにより器面調整を行い、外面はヘラ削りないしは指頭圧痕を明瞭にとどめている。

台付鉢（16・17）　全形が分かるものは、17で内外面全面に指頭圧痕をとどめている。16は脚部および鉢底部の破片資料で、全形は判然としない。器面調整は、17に比して丁寧で、外面をハケ調整、内面は横ナデによって仕上げている。

高坏（18～32）　坏部形態によって大別でき、a）坏底部から大きく直線的に開く口縁部形態を有するもの（18～29）、b）内湾気味に椀形に立ち上がるもの（30・31）、c）底部と体部の境界に屈曲部を形成し、内椀気味に立ち上がる口縁部形態を有するもの（32）の三種がある。a）は、坏底部から屈曲部を有しつつ外方へ外反気味に開くもので、内外面を手持ちのヘラミガキによって仕上げるもの（18～20・22・24・25・29）と、ハケによって内外面を器面調整

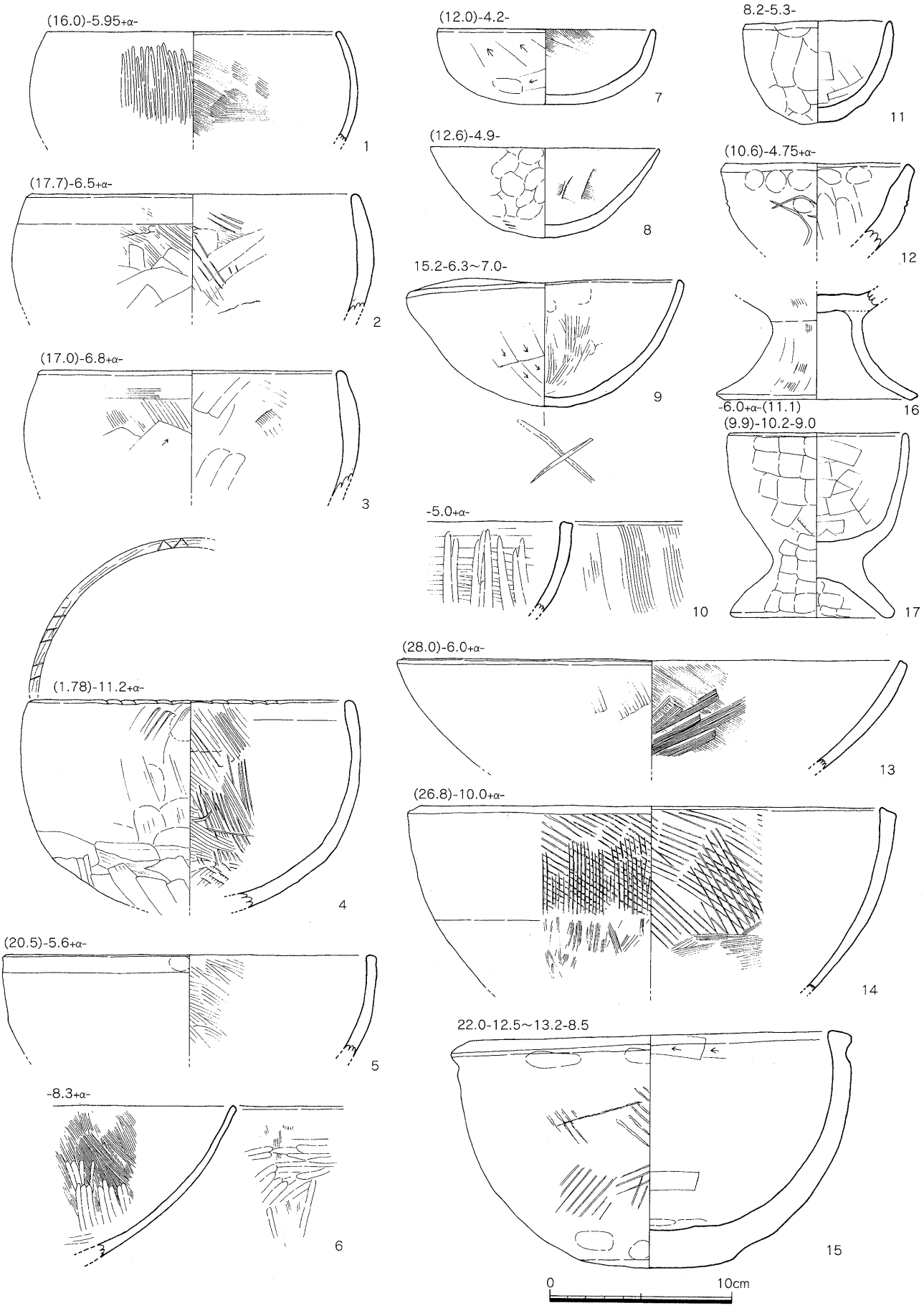


図34.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（１）

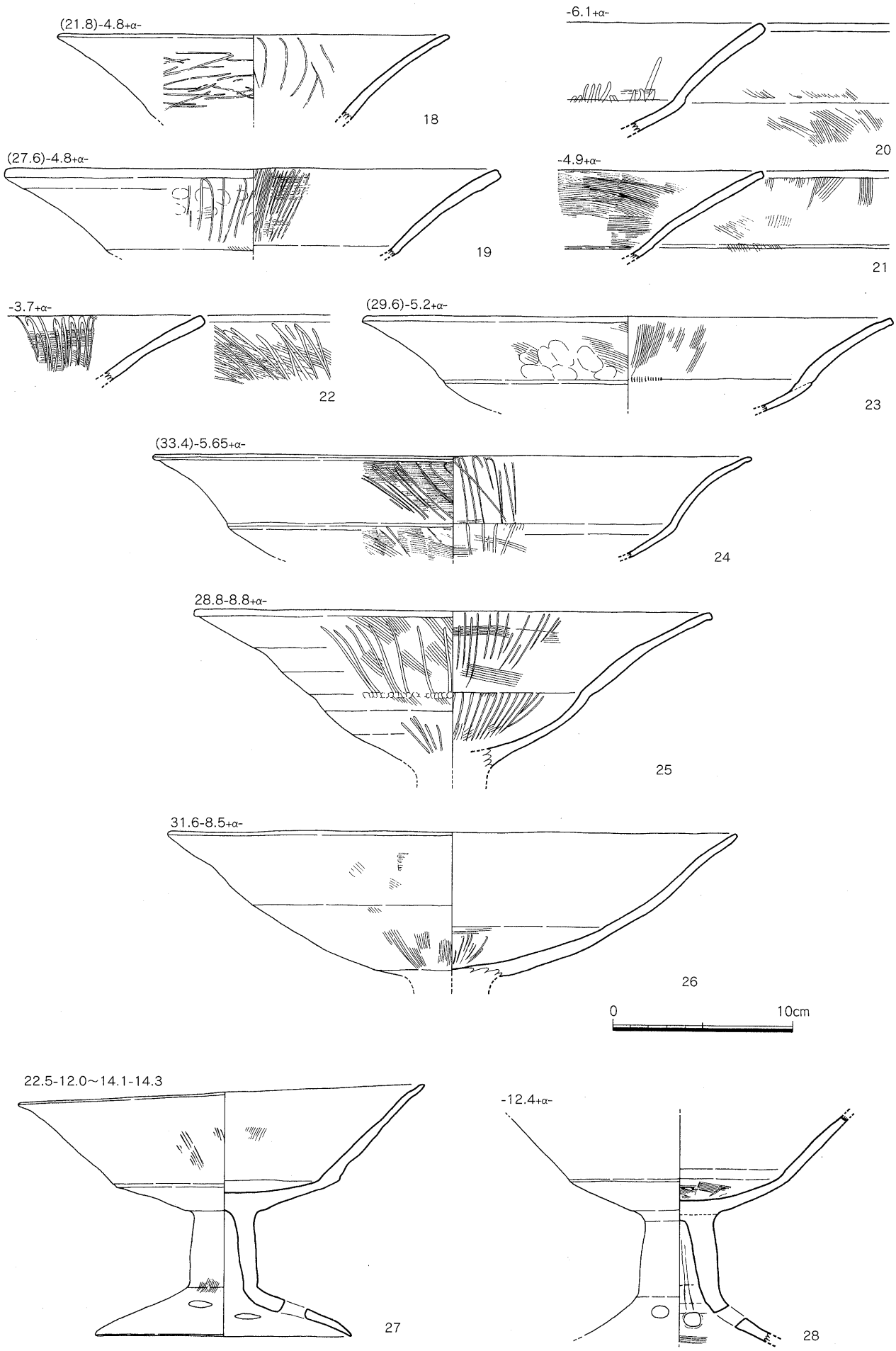


図35. 雛2SD002茶色土出土遺物実測図（２）

する粗製のもの（21・23・26～28）がある。学説史上、新旧型式がある。b）30は脚と坏の接合箇所の破片であり、全形が判然としないものの、坏部の立ち上がり形態から判断して、31と

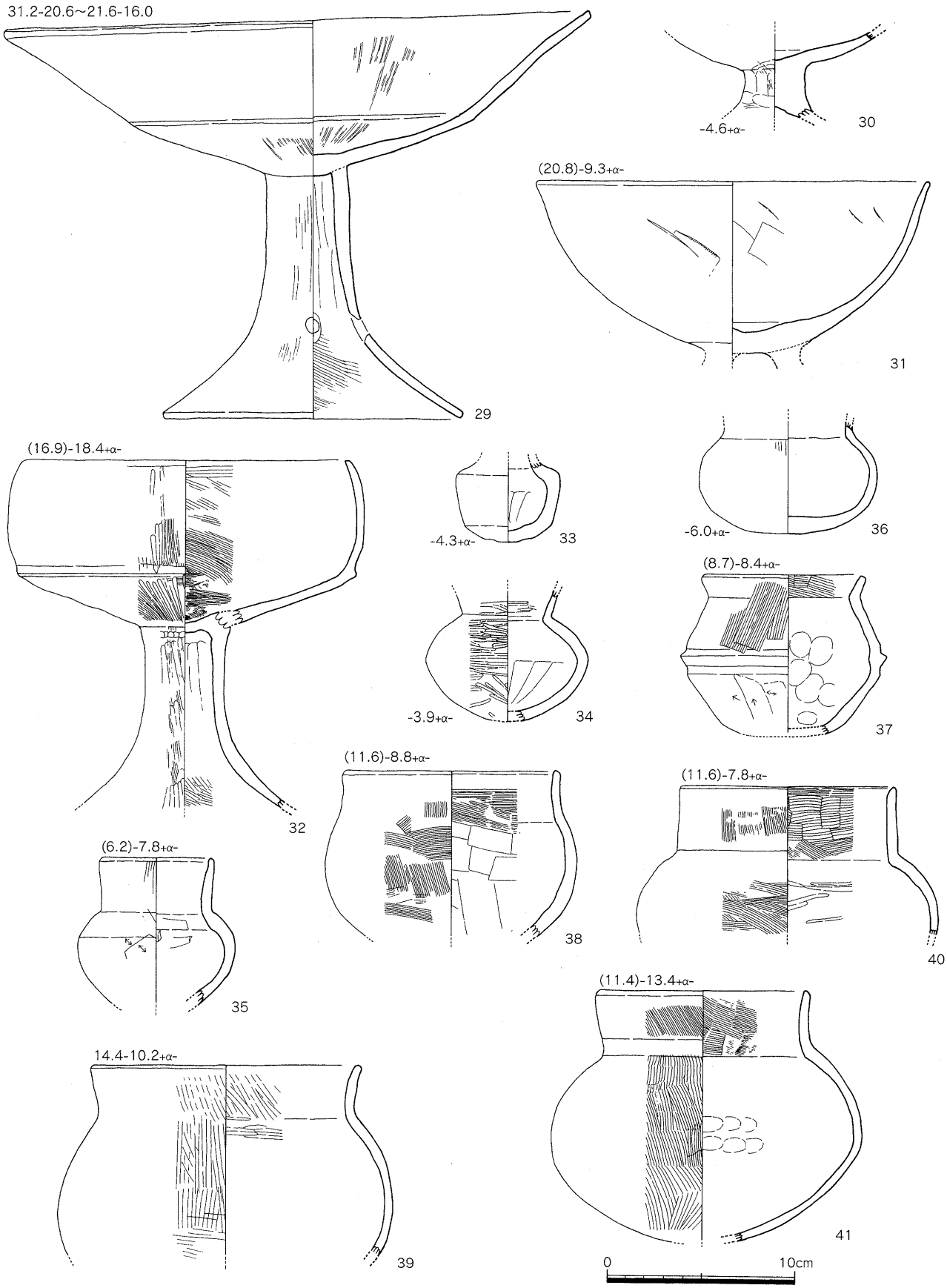


図36.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（３）

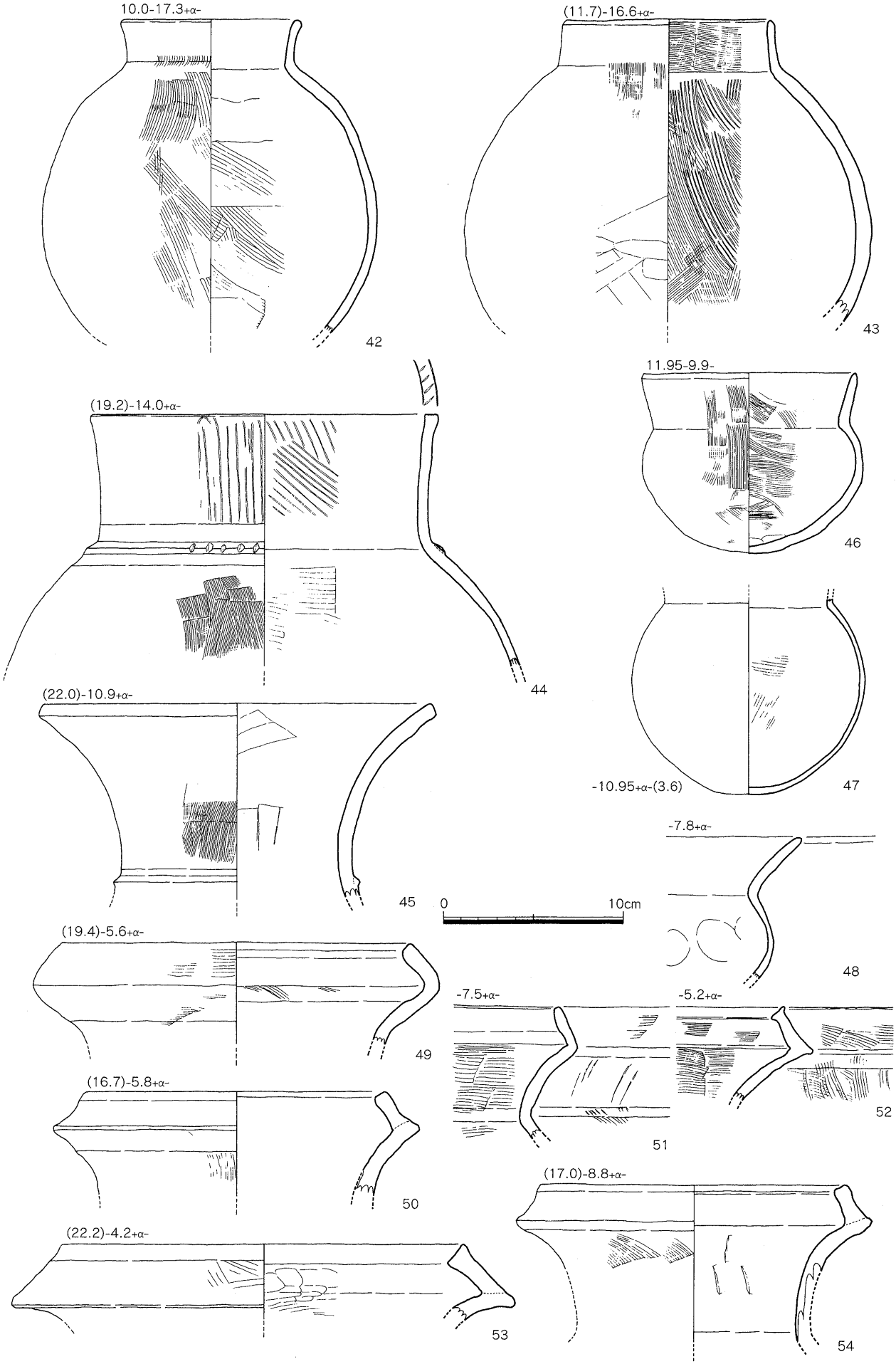


図37.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（４）

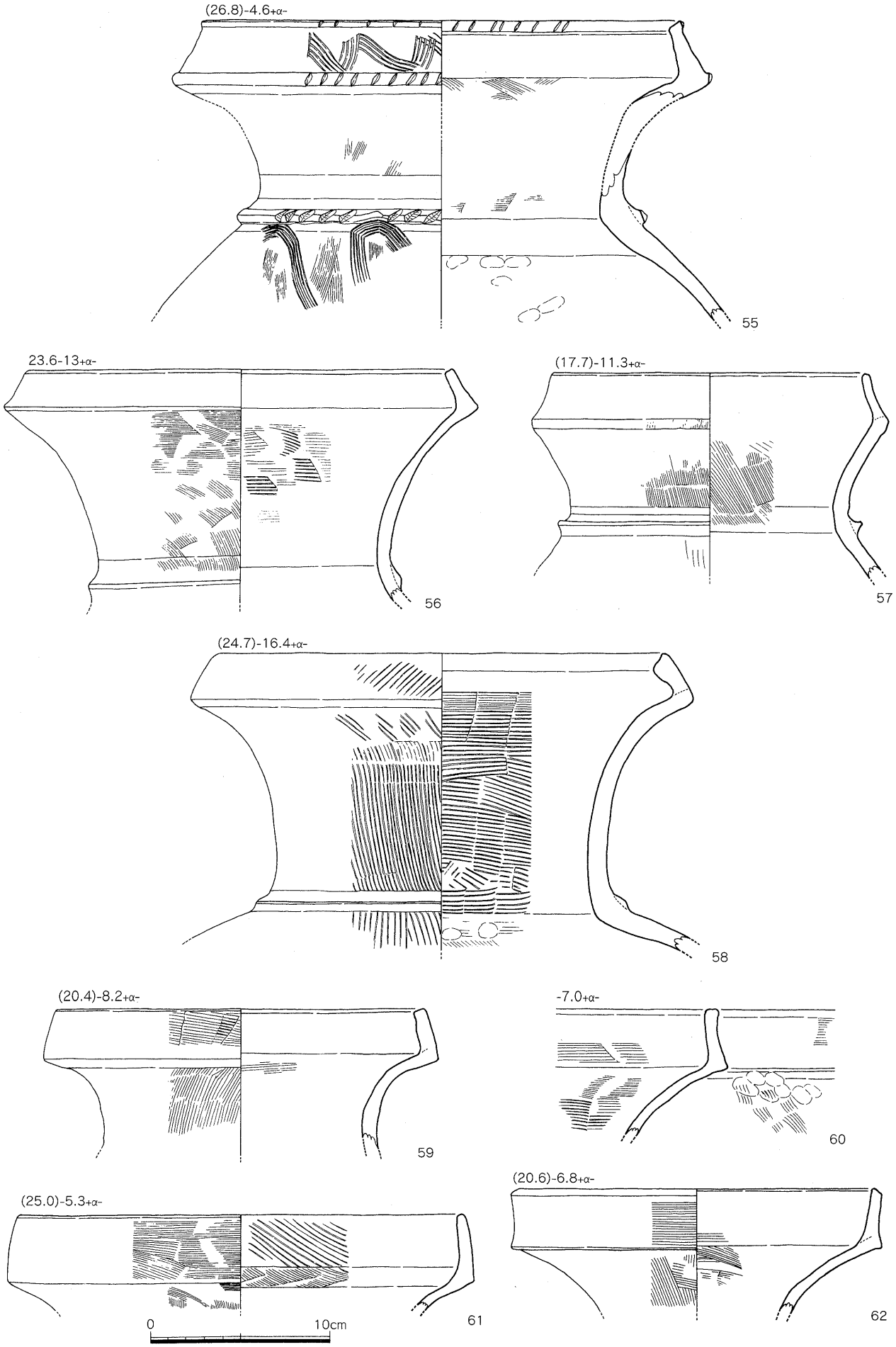


図38.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（５）

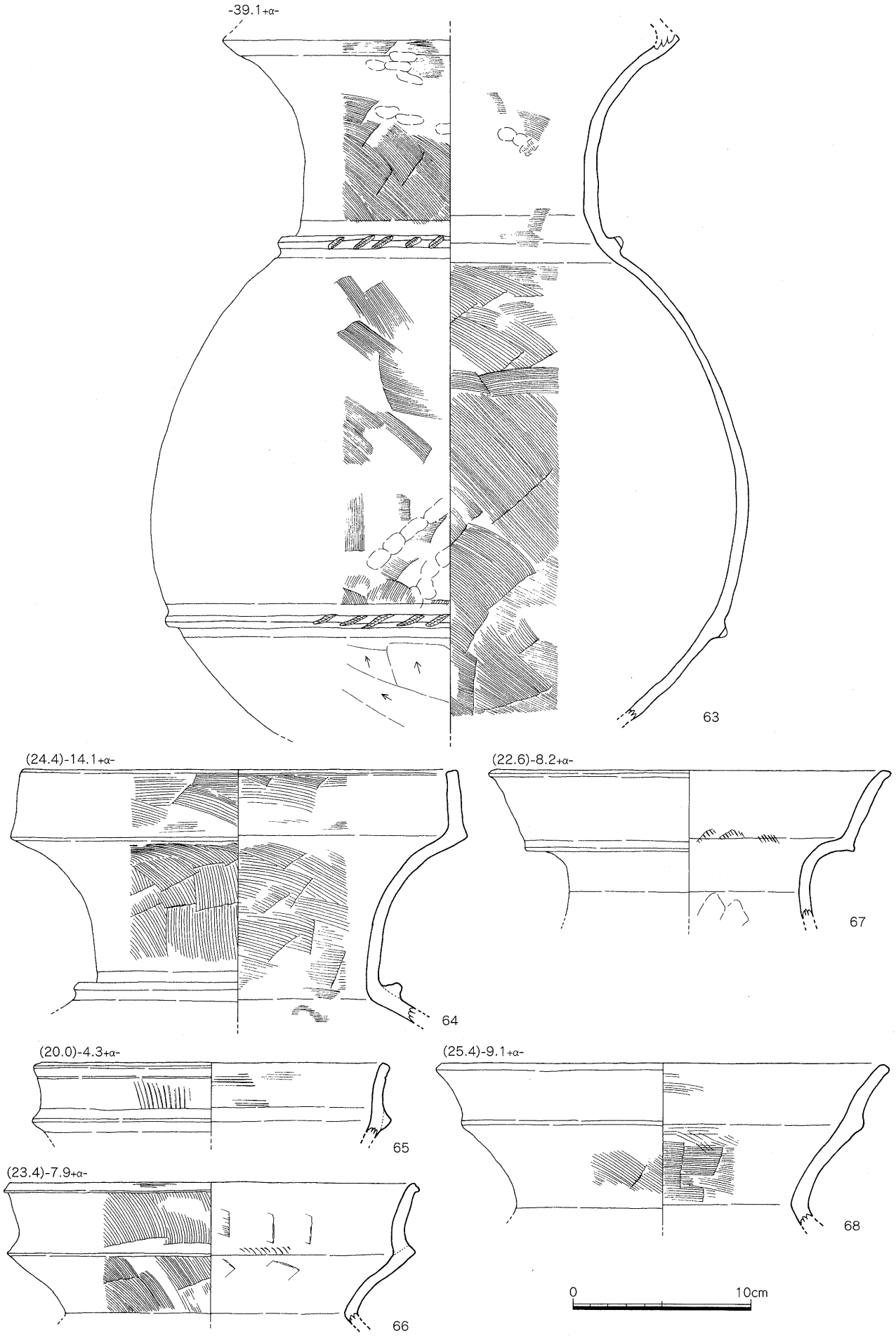


図39.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（６）

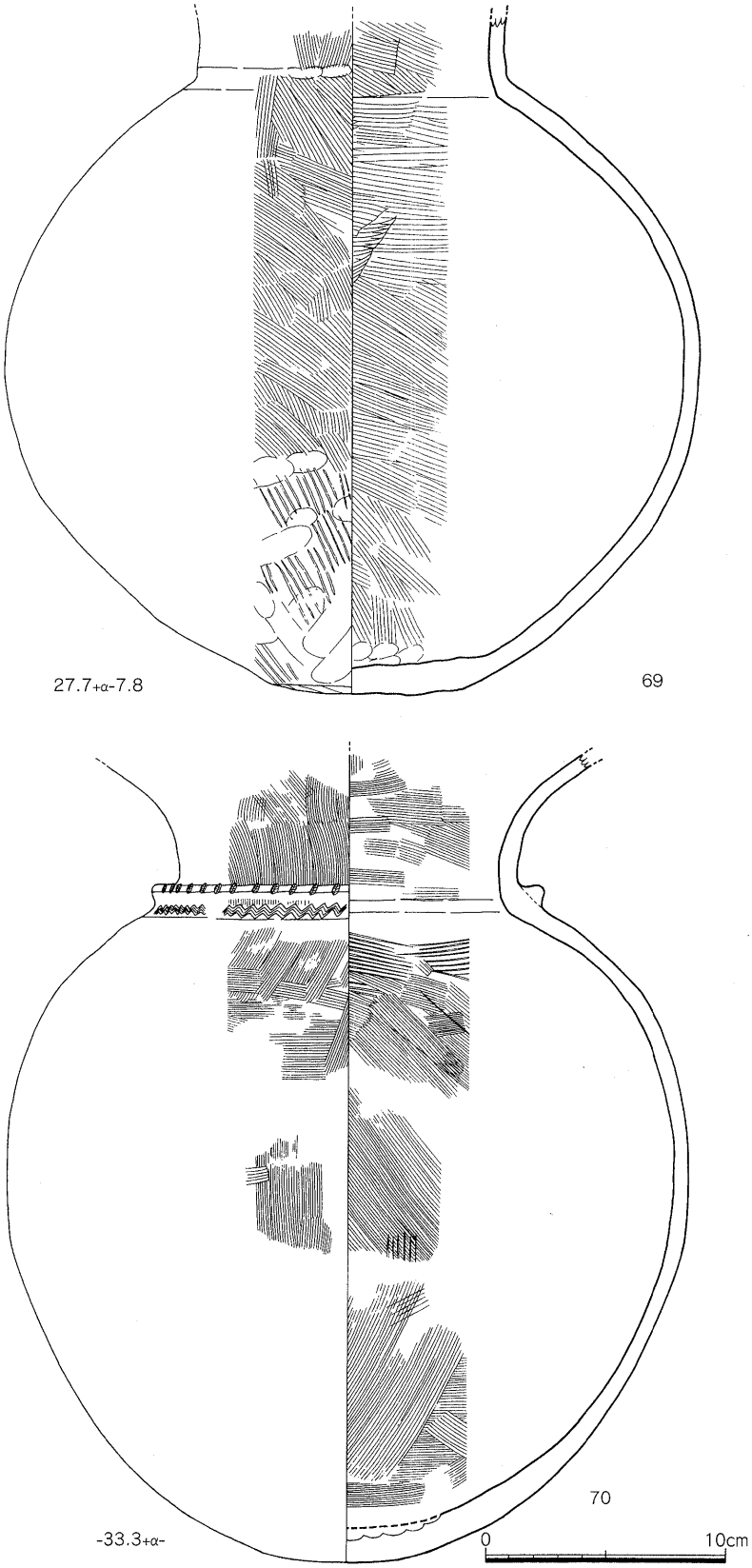


図40.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（７）

同様な形態をとるものと考えられる。内外面ともにハケによる器面調整後、丁寧なナデによって仕上げられており、ハケ状原体の当たり痕跡が確認できる。c）は今次調査では異質なもので、坏底部から体部への移行箇所を突帯状に肥厚させており、丸みを有しつつ口縁部へ至る。外面はヘラミガキによって仕上げ、内面はハケによって仕上げている。

壺（33～71・137）　小形のもの（33～37）は数種確認できるが、中形から大形品に関しては、a）直口のもの（38～46）、b）外方に開く口縁のもの（45）、c）二重口縁のもの（49～68）の三種がある。a）は、内外面ともにハケによって調整されており、大形の44は頸部外面に断面三角形の突帯を貼付し、左から右方向に押圧によって刻み目を施している。またこの個体は、口縁部外面に縦方向のヘラミガキを施しており、外見状精製品の装いを有しているが、口縁部内面は、粗目のハケによって調整するなど、内外の調整精度に差が生じている。46は、小形丸底壺の粗製品と考えられ、内外面をハケによって調整している。47は、頸部から上位を欠損するもので、球形の体部形態を有する丸底壺である。b）は、頸部外面に断面三角形の突帯を貼付し、外方に大きく開く口縁部形態を有している。c）は二重口縁壺で、ア）口縁部が内傾するもの（49～61・64）。

イ）口縁部形態が直立するもの（62・65・66）。ウ）外方に開く口縁部形態のもの（67・68）。の三者がある。量としては、ア）に属しているものが大半を占める。精製のものは、67で内外面ともに横ナデによって仕上げられている。他の個体の多くは、内外面ともにハケによって調整されており、粗製の印象を受ける。なお、55は頸部に断面三角形の突帯を貼付し、その上面および口縁端部上面に右方向からの押圧による刻み目が施されている。さらにこの個体は、体部上位および口縁部外面に櫛状原体による波状文を施文する。施文方向は製品を固定した場合、右から左へ施文している。69～71は口縁部を欠損するもので、どのような形態のものであるのか、器種特定も含めて判然としない。70は頸部に断面三角形の突帯を貼付し、その上面に右方向からの押圧による刻み目、および突帯の下位に波状文を施文している。なお施文方向は、製品を固定した場合左から右へ施文されている。71は大形のもので、頸部および体部下位に突帯を貼付している。なお体部下位の突帯には、ハケ状原体様の工具を使って刻み目を施文している。

甕（72～115・118～136）形態属性

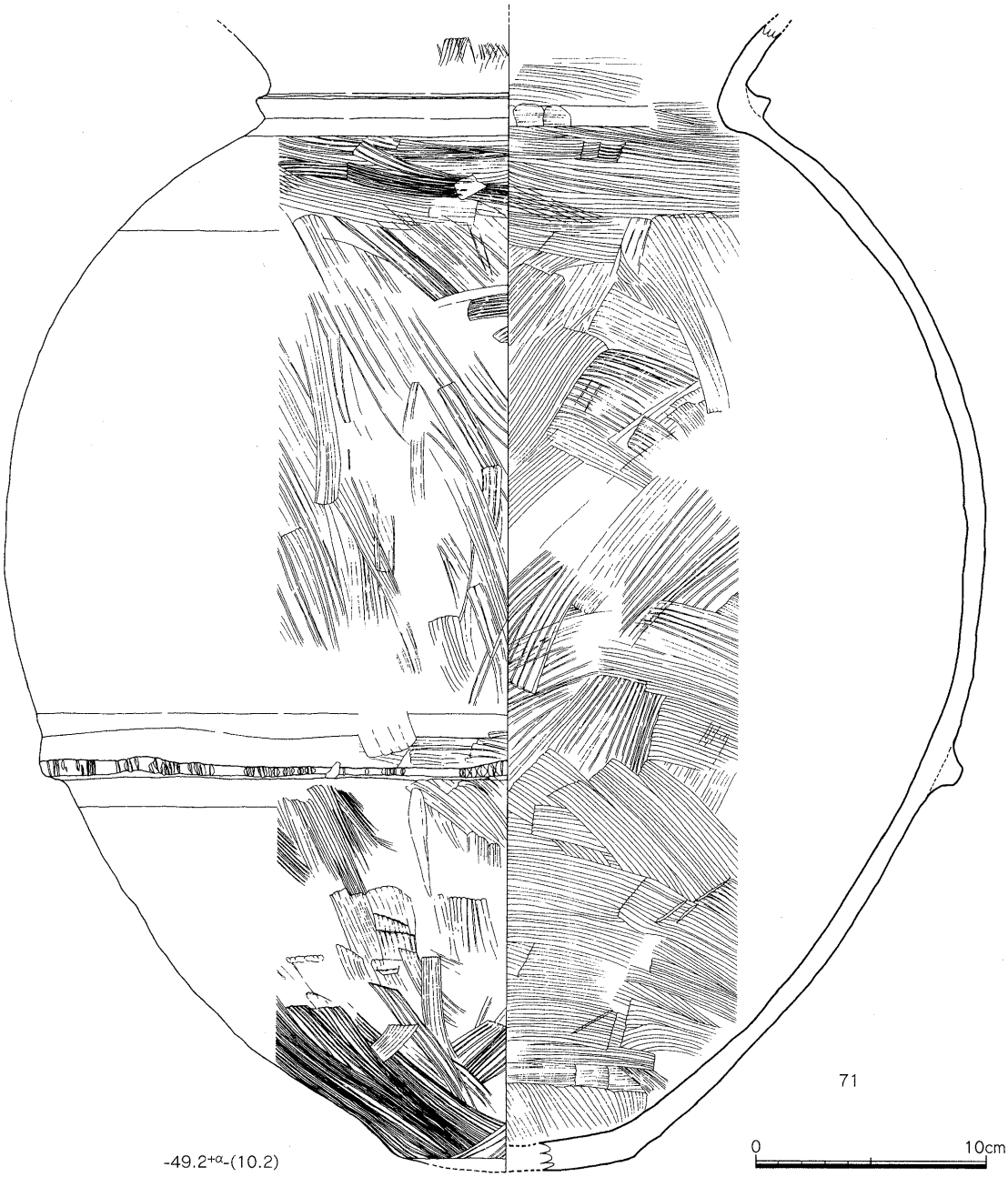


図41.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（８）

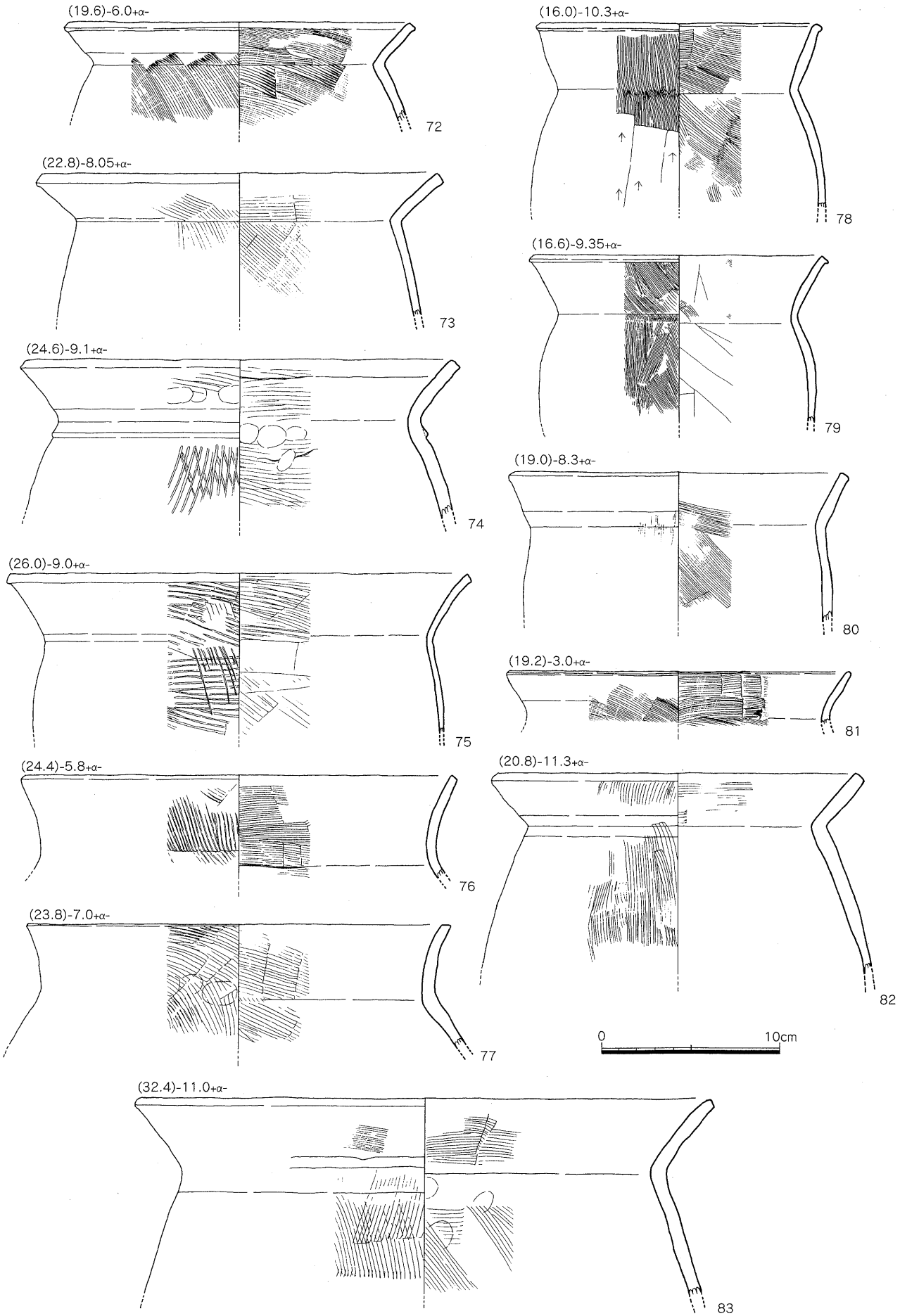


図42.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（９）

において大きく二者に大別できる。口縁部形態が長めのもの（72～93）で、細分属性として口縁部形態が外方へ開かず、直立気味に立ち上がるもの（76～81、84～87）、口縁部が外方へ開くもの（72～75、82・83・88～93）がある。なお多くの個体は内外面ハケによる調整が行われているが、ハケの精粗によっても差が生じている。なお78・91は頸部外面下位をヘラ削りによって仕上げている。また79は体部内面をナデによって仕上げるなど調整属性によって異なるものが少量存在している。今一つのものは口縁部形態が短く外反するもの（94～104）で、ハケ調整が粗いものが目立つ。105～118は、群を形成せず少数のもので、105は直口形態の壺様のもの、内外面ハケ調整のため甕とした。106および107は口縁部が大きく開くもので粗製の鉢様の形態を有している。107は体部下半が欠損するため明らかにし難いが、106は体部外面下半をヘラ削りしている。108～110は、前述した107および106と異なり、頸部が締まるものである。111および112は、頸部直下に穿孔するものでやや小形の甕である。いずれも破片資料のため、穿孔箇所数に関しては明らかにし難い。113は頸部の締まりを有しないもので、端部を平坦に横ナデによって仕上げている。内外面ともにやや粗いハケによって仕上げている。114

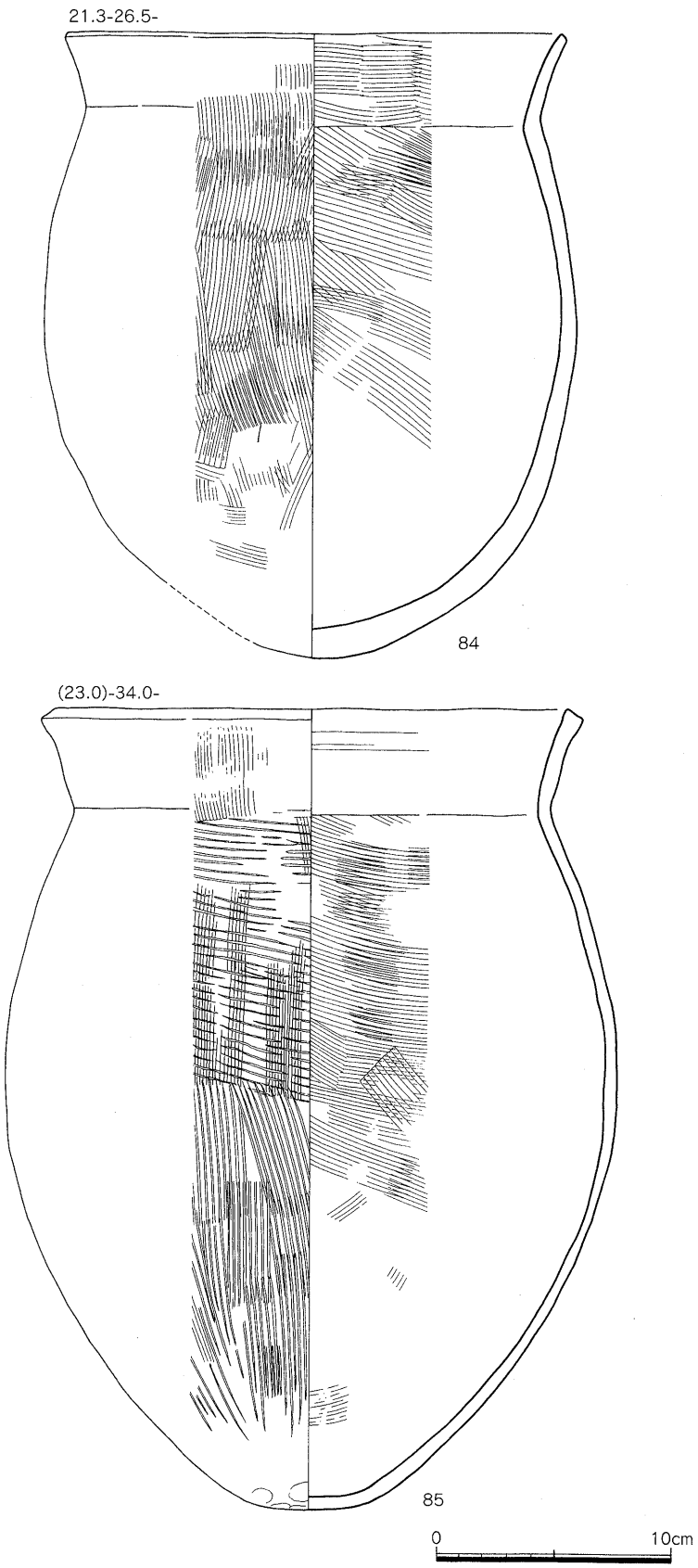


図43.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（10）

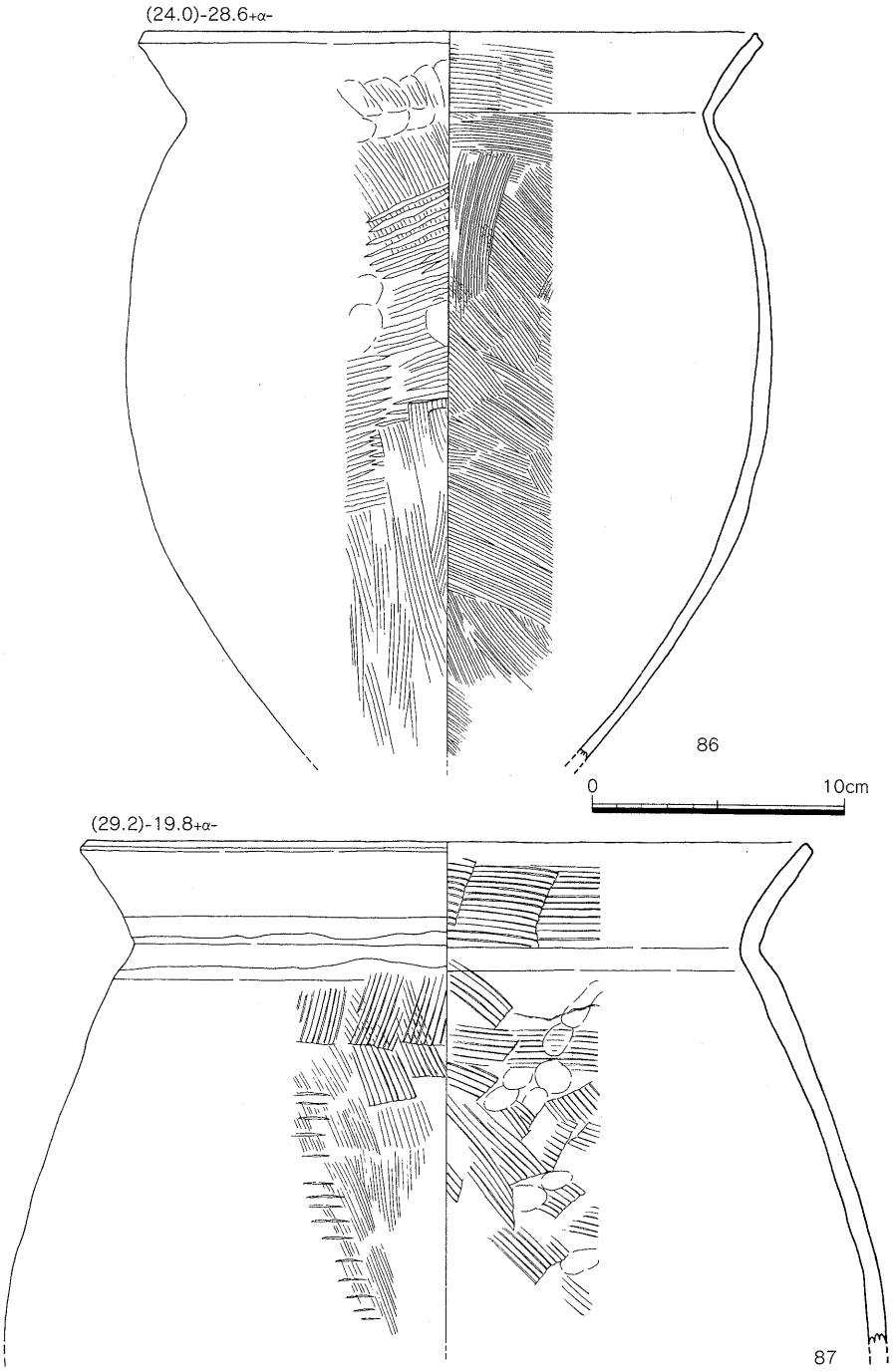


図44.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（11）

も同様に頸部の独立化が不明確なもので、口縁端部形態が113とは異なり丸く仕上げられている。115は外面を細かいハケならびに内面をヘラ削りによって仕上げている。118は底部のみの破片資料で、やや尖底気味のものであるという以外に全形は明らかにし難い。119～137は大形の甕で頸部外面に断面三角形ないしは断面台形の突帯を貼付している。119～125・135は、突帯を貼付するのみであるが、126～134は突帯貼付後にハケ状原体を用いて刻み目を施している。刻み目は、斜め方向に行うもの（126～129）、突帯長軸方向に直交するもの（130）、「V」字状のもの（131・132）、さらに刻み目が雑なもの（133）がある。134・135は口縁端部に刻み目を施している。137は特に大形の底部で、体部の開き具合が他の個体とは異なっていることから、明確にし難い。

甑（116・117）　底部に穿孔があることから、甑と判断した。底部内外面ともに指頭圧痕跡を明瞭にとどめ、粗雑な印象を受ける。底部穿孔は一箇所を行っている。

支脚・器台（138～154）　上部構造が袋状のもの（138～145）、外方に直線的に開くもの（146～152）の二者がある。これらは器台と考えられ、内外面にハケ痕跡をとどめるものや、粗いナデによって仕上げるもの、さらに叩き痕跡を外面に留めているものなど様々である。154は上部構造に突起を有するもので、閉塞構造はとっていない。内外面は縦方向の粗いナデによって仕上げられており、粗製の印象は受ける。ただし二次焼成による赤橙色に変色箇所は

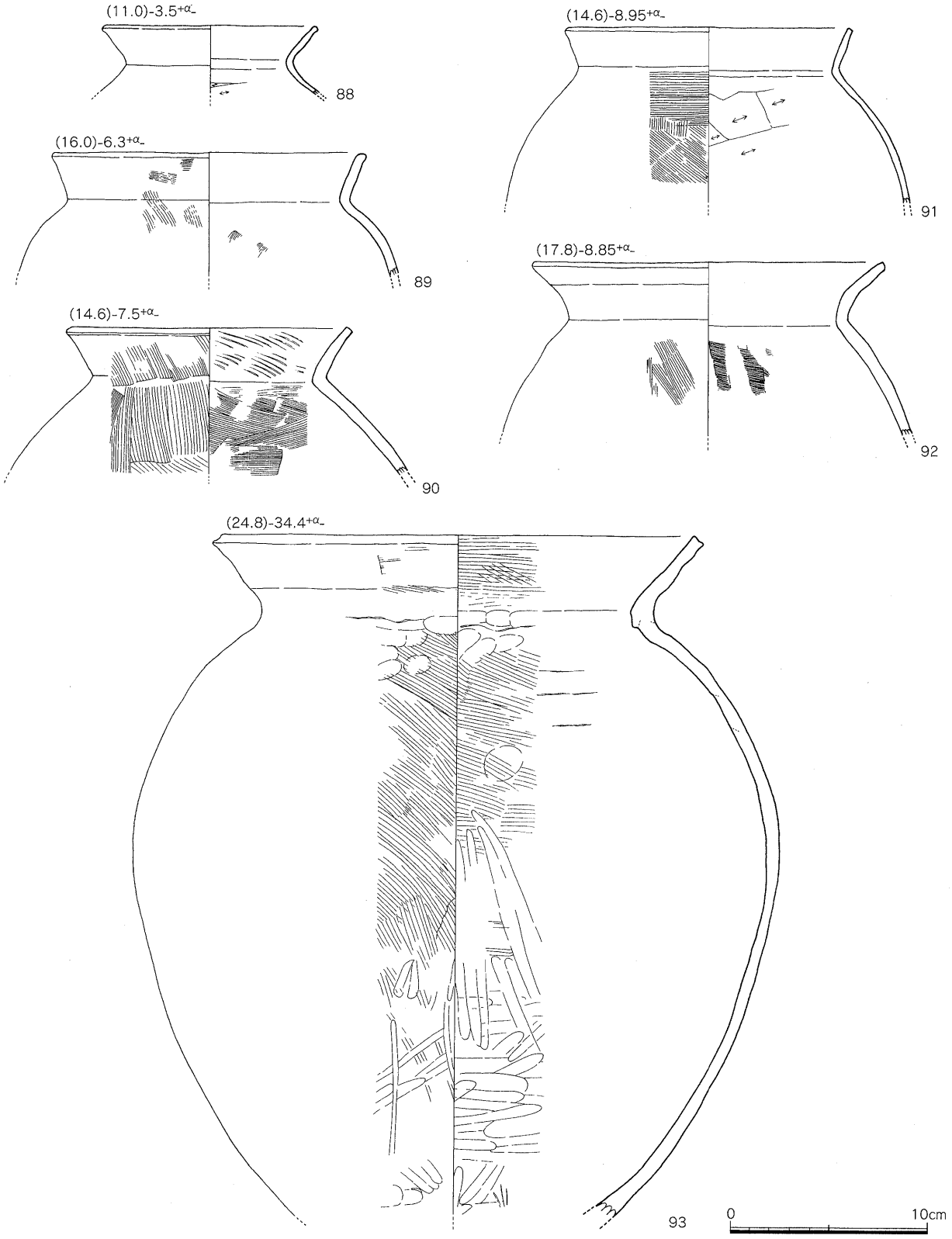


図45.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（12）

観察できない。

2SD002黒灰色砂（図53－1）

古式土師器

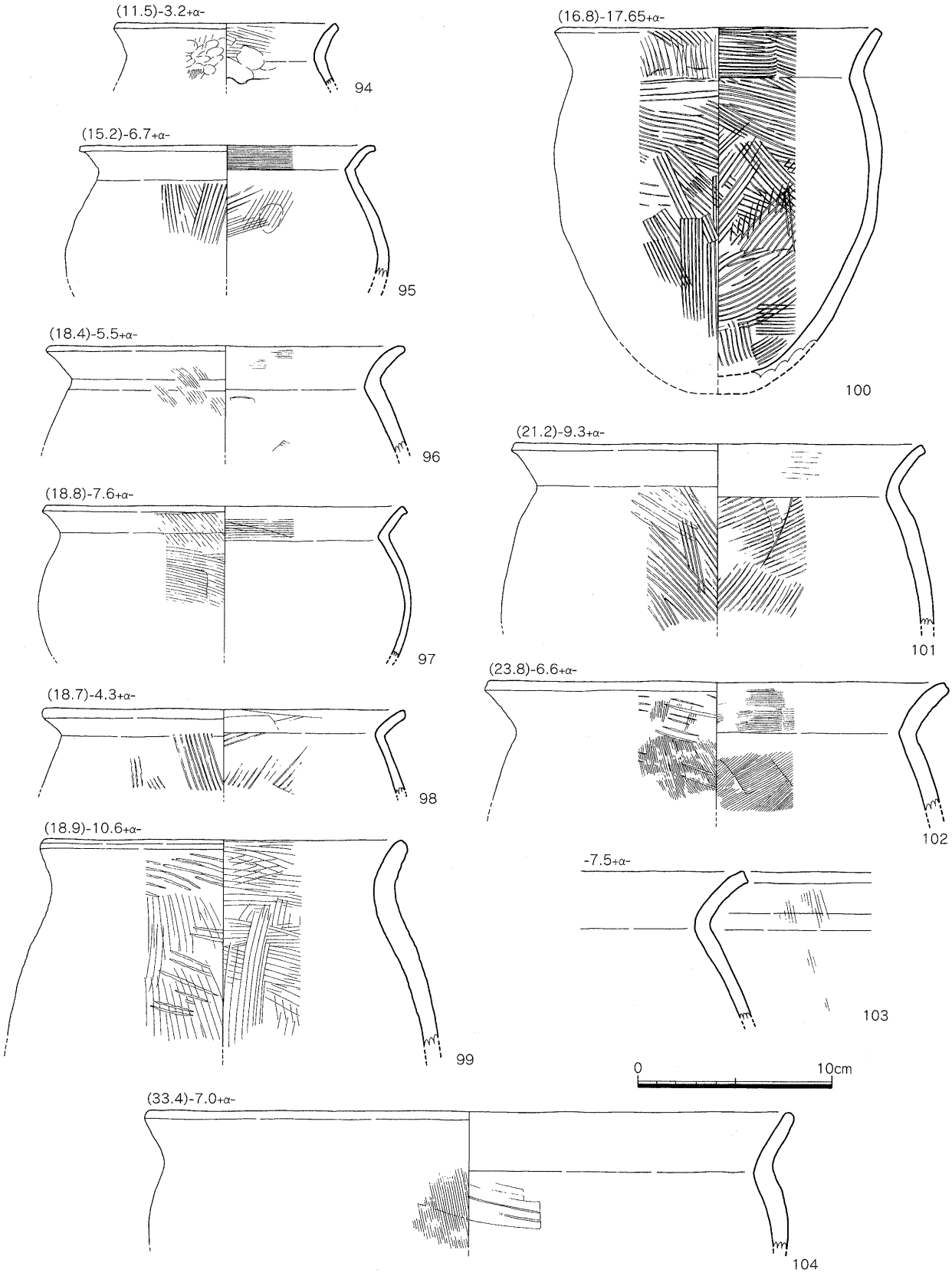


図46.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（13）

高坏（1）　坏底部から外方へ開く口縁部形態を呈するもので、器面摩耗のため調整痕跡は不明確ながら、外面にミガキ痕跡がわずかに確認できる。

2SD002黒色土（図53－2～7）

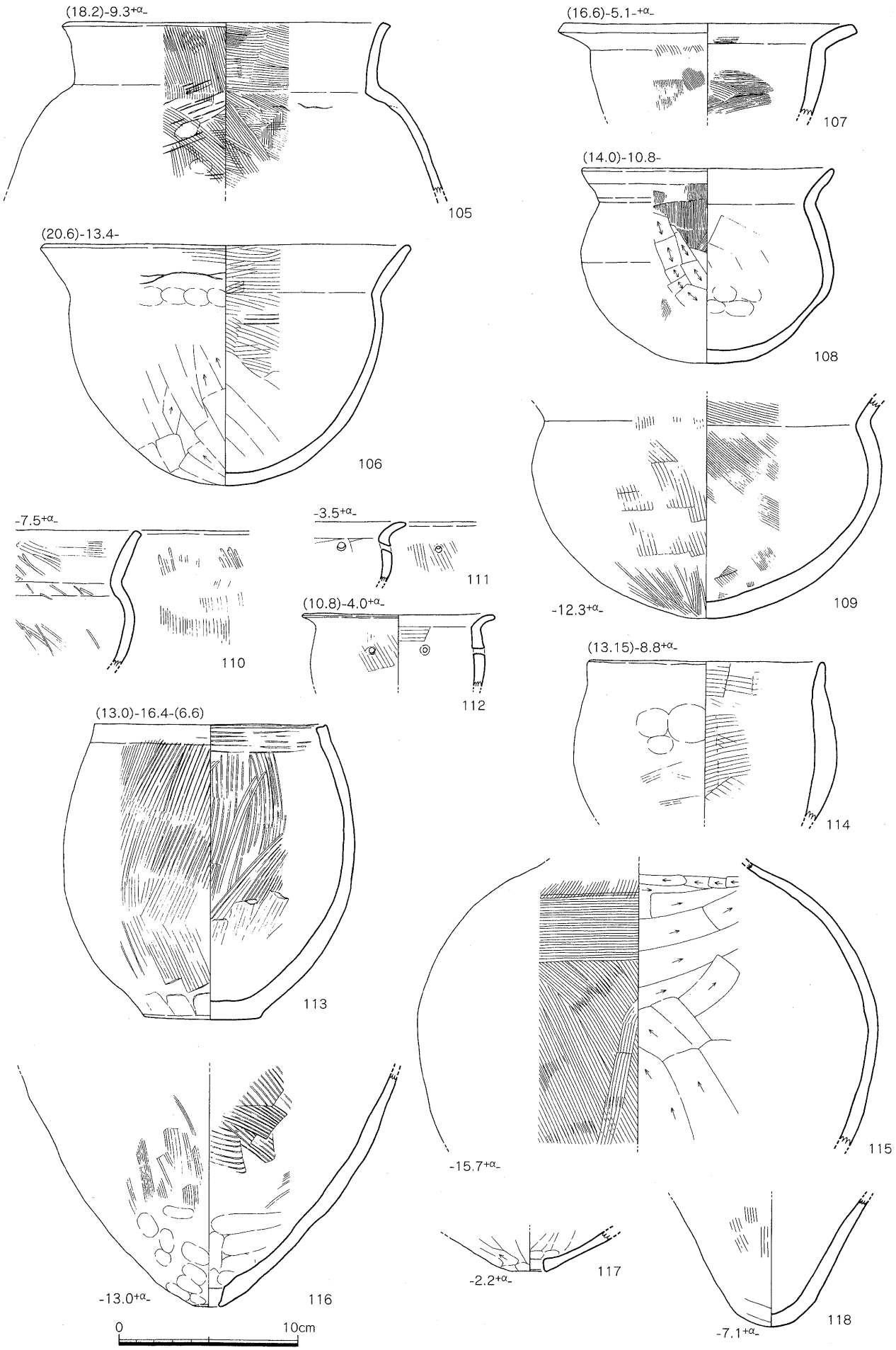


図47.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（14）

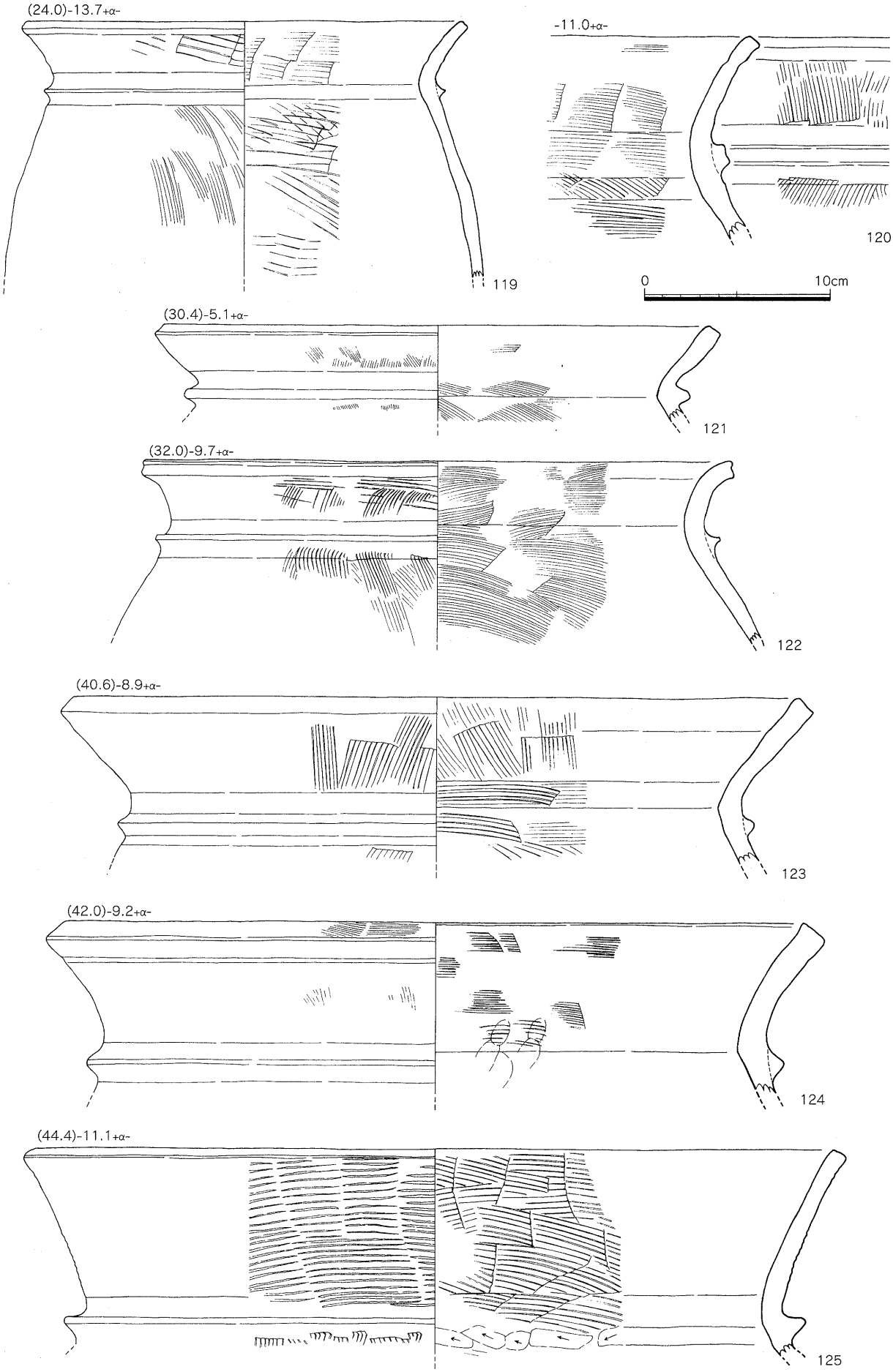


図48.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（15）

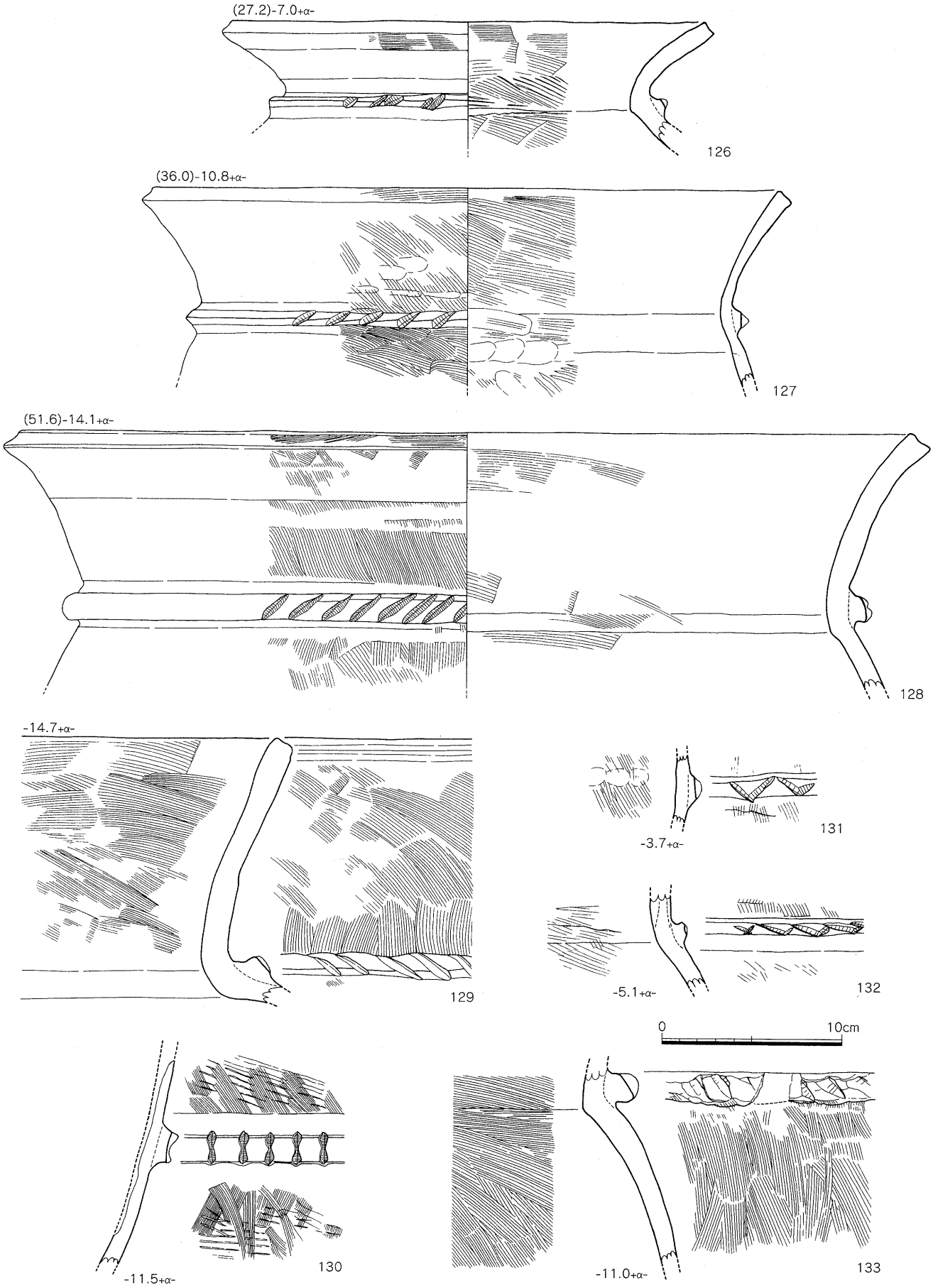


図49.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（16）

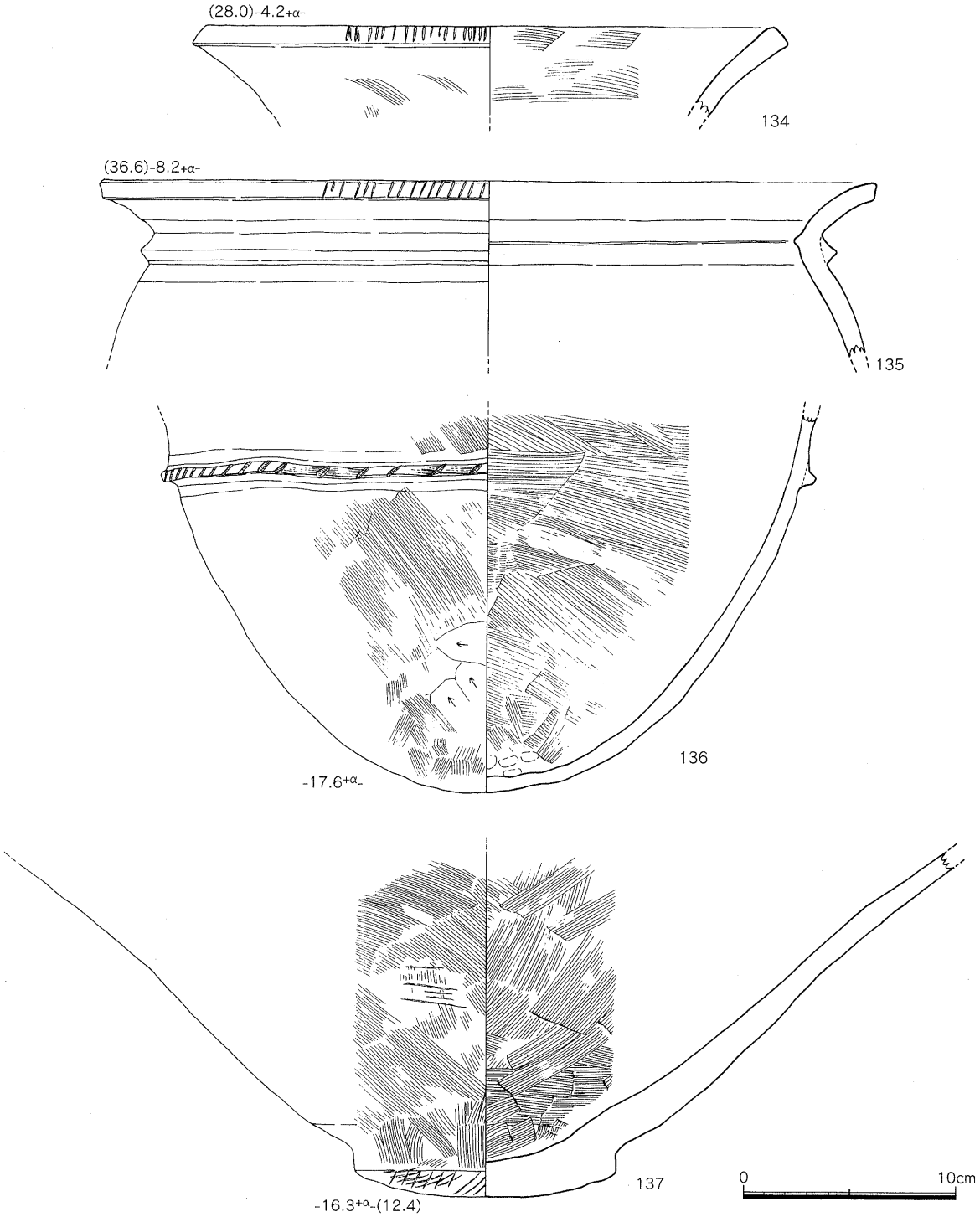


図50.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（17）

古式土師器

甕（2・3・5・7）　2・3・5は、口縁部の小破片で、内外面ともにハケによって調整されている。7は、口縁部形態が外方へ短く開く形態を有しており、内外面をハケによって調整している。

器台（4）　小破片のため全形が判然としないが、器壁の厚さ、調整の粗雑さから器台と推定した。

壺（6）　底部の破片であるが、底部から体部への移行形状が著しく開くことから、壺底部と

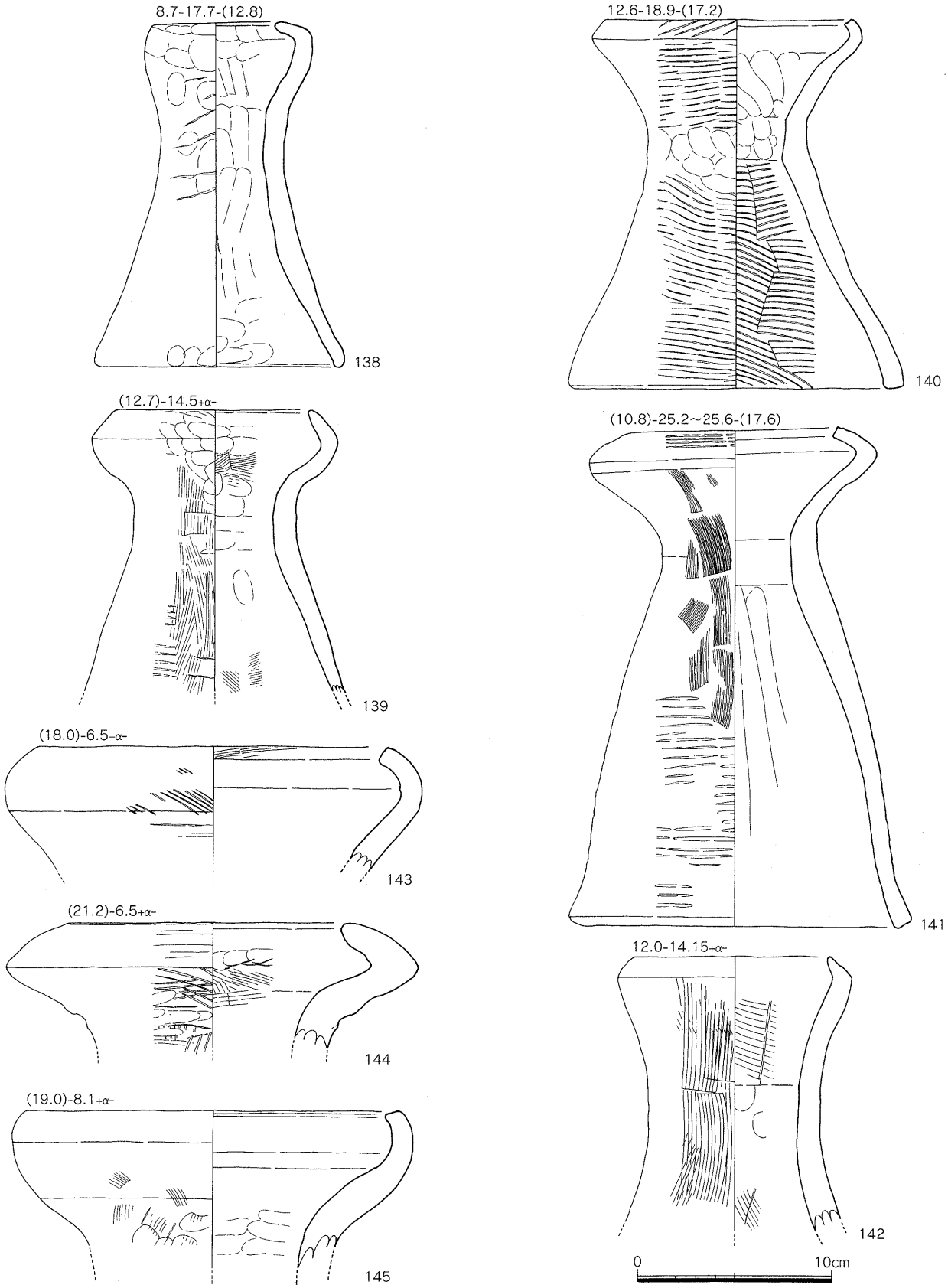


図51.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（18）

推定した。内面は放射状のハケ調整、外面には指頭圧痕跡をとどめている。

2SD002黒色砂質土（図53－8）

石製品

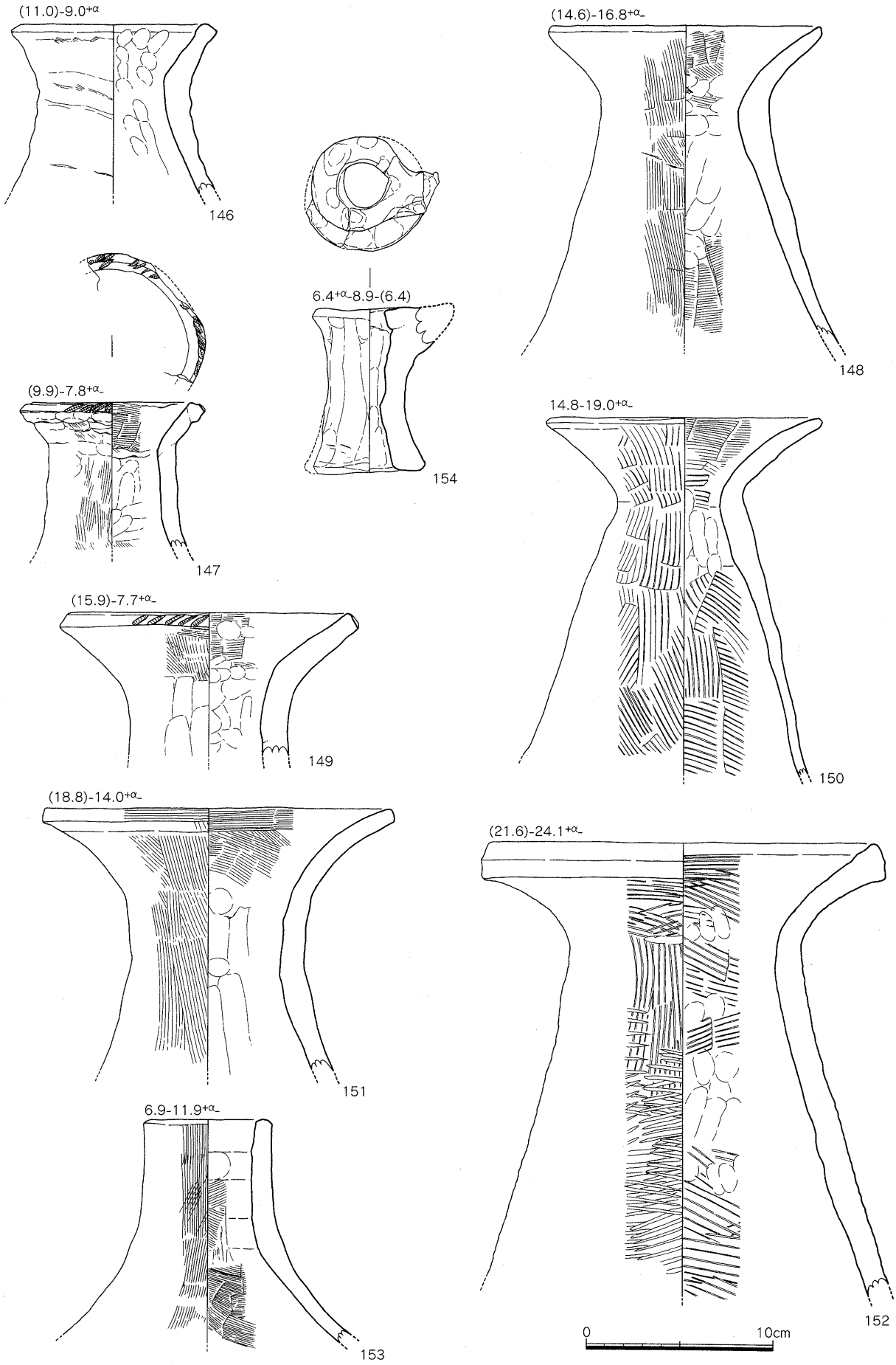


図52.雛2SD002茶色土出土遺物実測図（19）

剥片（8）　剥片資料で、材質は安山岩系の岩石であると考えられる。

2SD003

遺構報告の際、記載してきたように、2SD002との土層関係を調査途上において把握できなかった。したがって、取り上げ土層の層位に基づいて上位より報告する。

2SD003茶黒色砂質土

（図54・55－1～23）

古式土師器

鉢（1・2・6）　小形のもの（1）と大形のもの（2）が出土している。小形のものは、内面ハケ調整、外面ナデによって仕上げられており、大形のものは内外面ともにハケ調整を行い、口縁端部を平坦に仕上げ、その際、ハケを用いて調整を行っている。さらにミニチュア土器の範疇に入ると考えられるものとして手づくね土器（6）がある。内外面に指頭圧痕跡を明瞭にとどめ、極めて粗雑な印象を受ける。

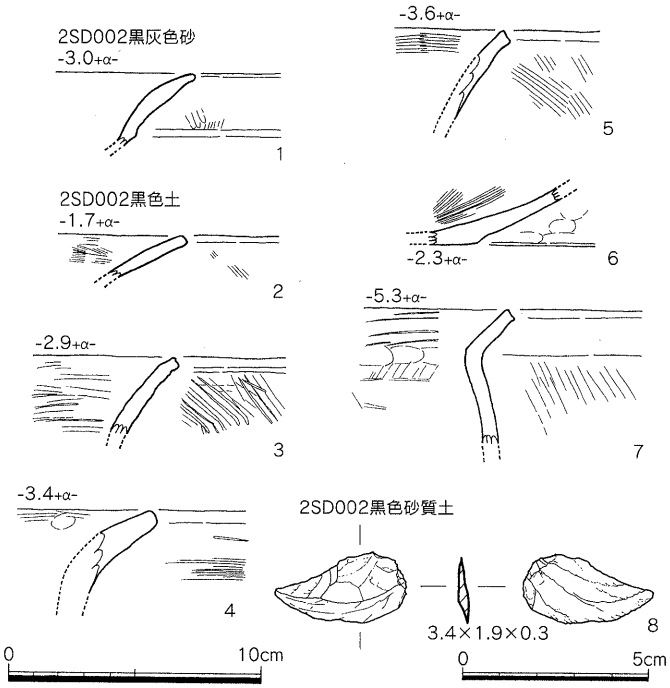


図53.雛2SD002各層出土遺物実測図

高坏（3）　坏部口縁部のみの破片で、内外面を一次調整としてハケによって調整を行い、内外面をその後ミガキによって仕上げている。なお外面はミガキ間の間隙が大きいため暗文を意識している可能性もある。

壺（4・5・7・8）　いずれの個体も口縁部の破片資料であり、全体形状に関しては明らかにし難い。二重口縁壺の範疇に入るもの（4・5）、直口口縁壺と考えられるもの（7・8）の二者がある。4はやや袋状に内傾する口縁部形状を呈し、5は直線的に内傾し口縁端部が外傾する明確な面を形成させる点で異なっている。7については、外面を磨いていることから壺と判断した。8に関しては器面調整の残存度合いが悪く、甕である可能性を残っている。

甕（9～15・20～24）　9は胴張りしたもので頸部の締まりが強い。内外面ともにハケによって調整されている。10は底部より外方に大きく開くもので、鉢形態に近い。底部外面は工具によるナデと判断するしかない痕跡を留めている。11～15は、「く」の字状に屈曲する頸部形態を有するもので、内外面ともにハケによって調整している。20～24は、頸部外面に断面三角形ないしは断面台形の突帯を貼付する大形の甕で、いずれも「く」の字状に屈曲する頸部形態を呈している。23は「V」字状の刻み目、24は突帯長軸に直交する刻み目を頸部外面の突帯上に施文している。

器台（16～18）　上部構造が袋状のものと、外方へ直線的に開くものの二者がある。

石製品

石剣（19）　粘板岩製のもので切っ先のみの破片資料である。両刃に研ぎ分けられており、両

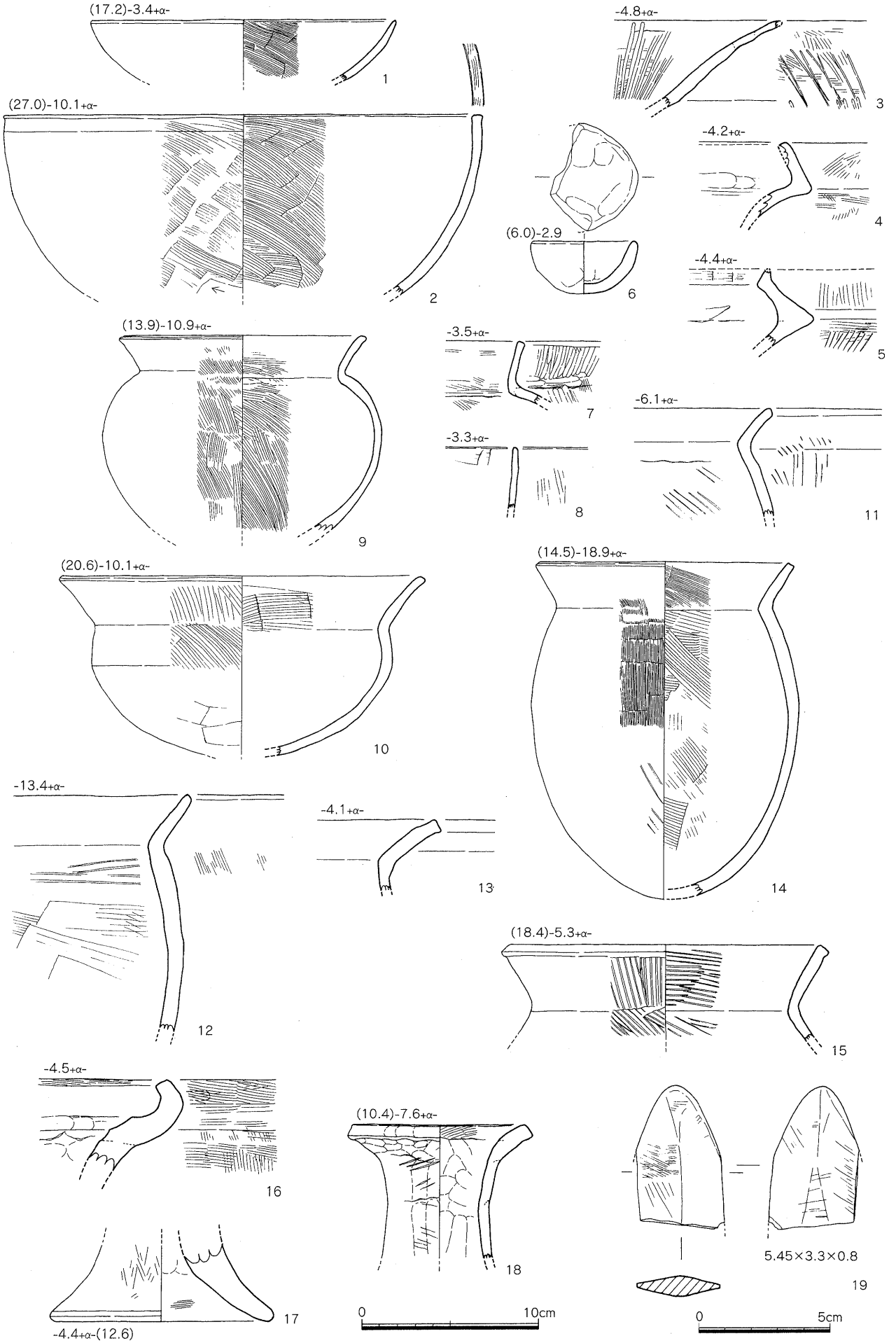


図54.雛2SD003茶黒色砂質土出土遺物実測図（１）

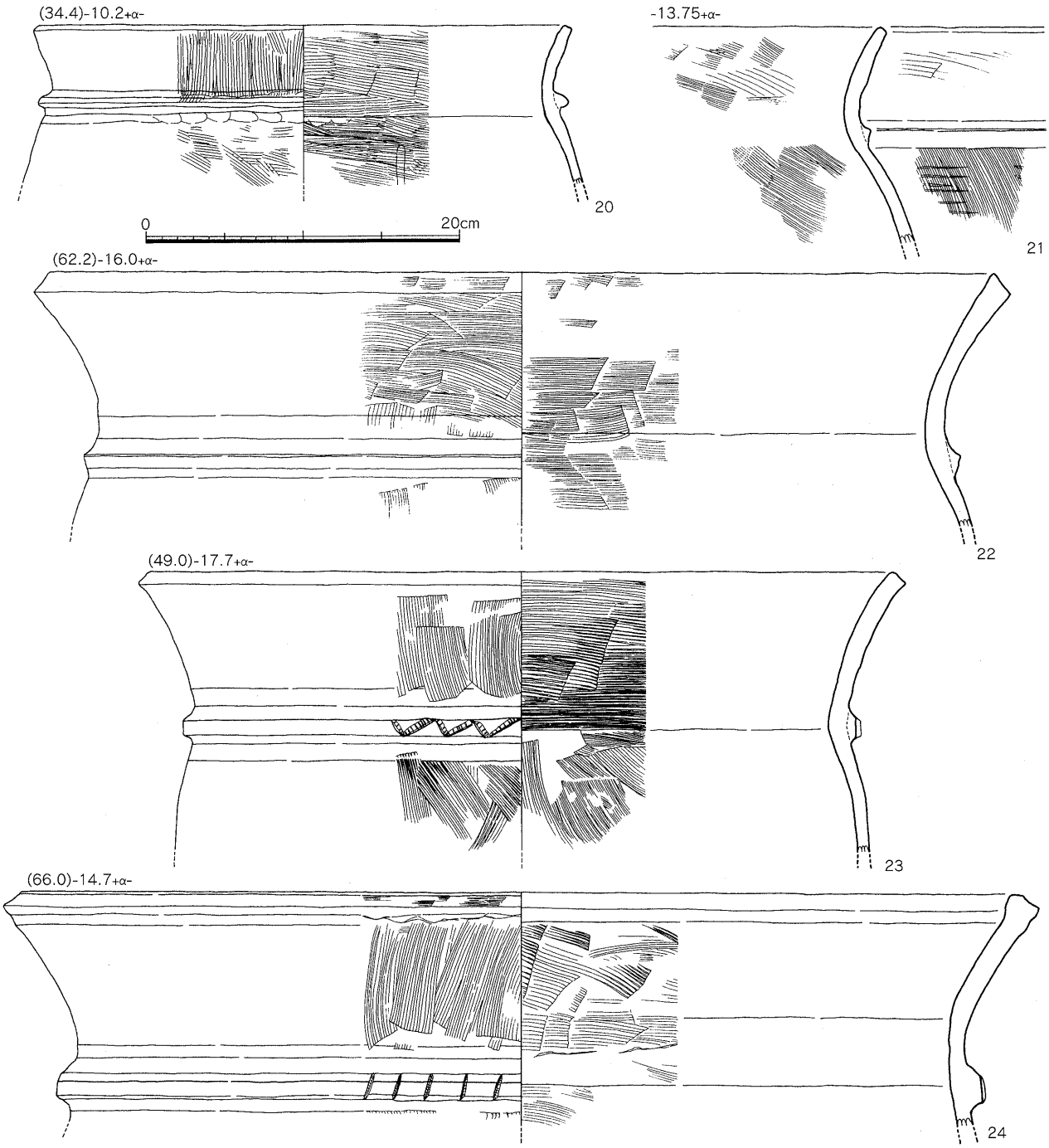


図55.雛2SD003茶黒色砂質土出土遺物実測図（２）

面に削痕が観察できる。

2SD003黒色土（図56～60－1～43）

古式土師器

鉢（1・2）　小形の手づくね土器で平面形が図上右側に縮小する形態を呈している。底部内面は使用時と考えられる黒灰色に変色した箇所が観察できる。2も同様に手づくね土器で、高台様の脚部が貼付されている。全面に指頭圧痕跡を明瞭にとどめ、粗雑な印象を受ける。

高坏（3・4）　3は、外方へ大きく開く口縁部形態を有し、内外面ともにハケによって一次調整を行い、内面に一部ミガキ痕跡が確認できる。4は、坏底部から直立気味に屈曲し立ち上がる口縁部形態を有するもので、器面の残存状況が悪く底部内面に粗めのミガキ痕跡がわずかに

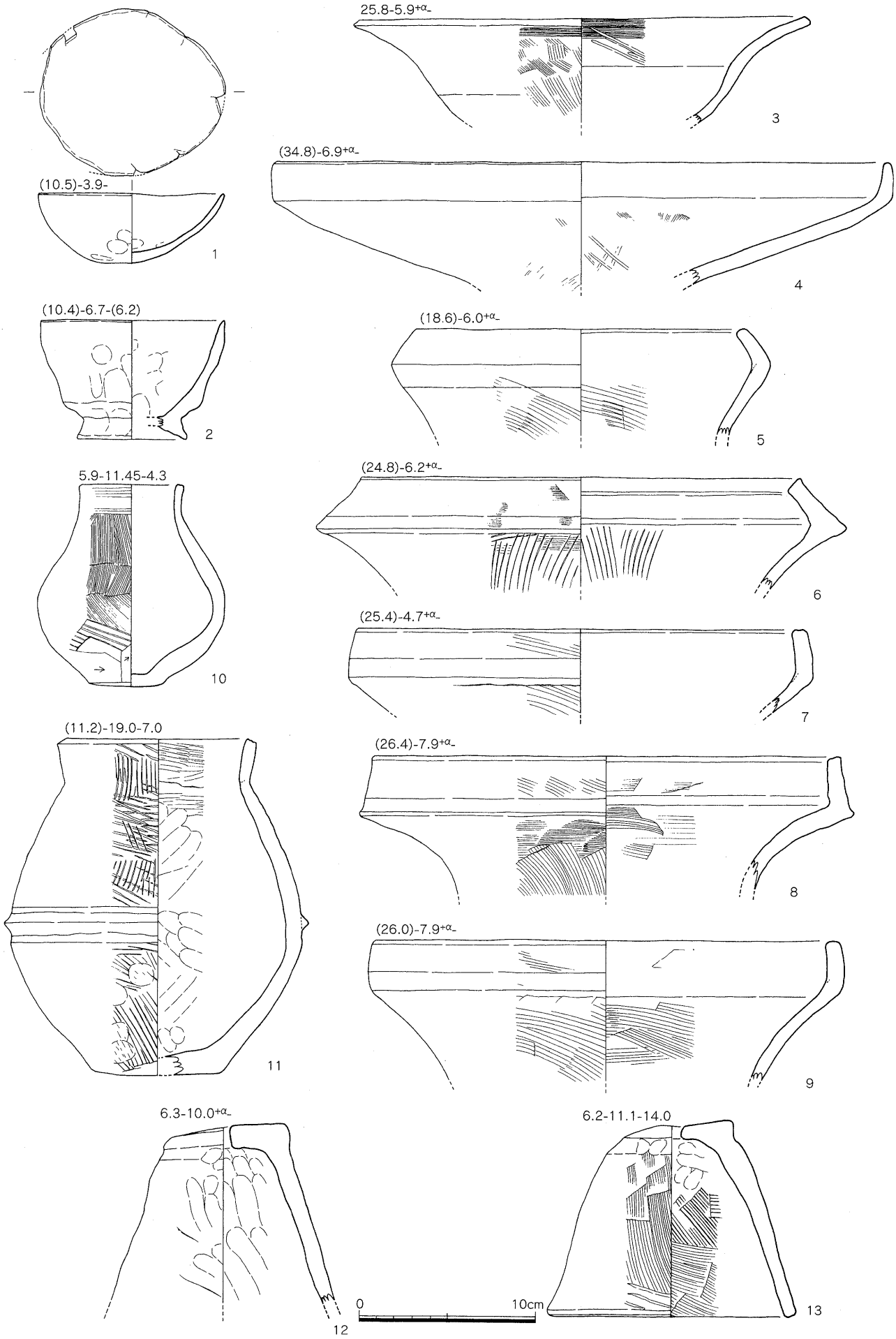


図56.雛2SD003黒色土出土遺物実測図（１）

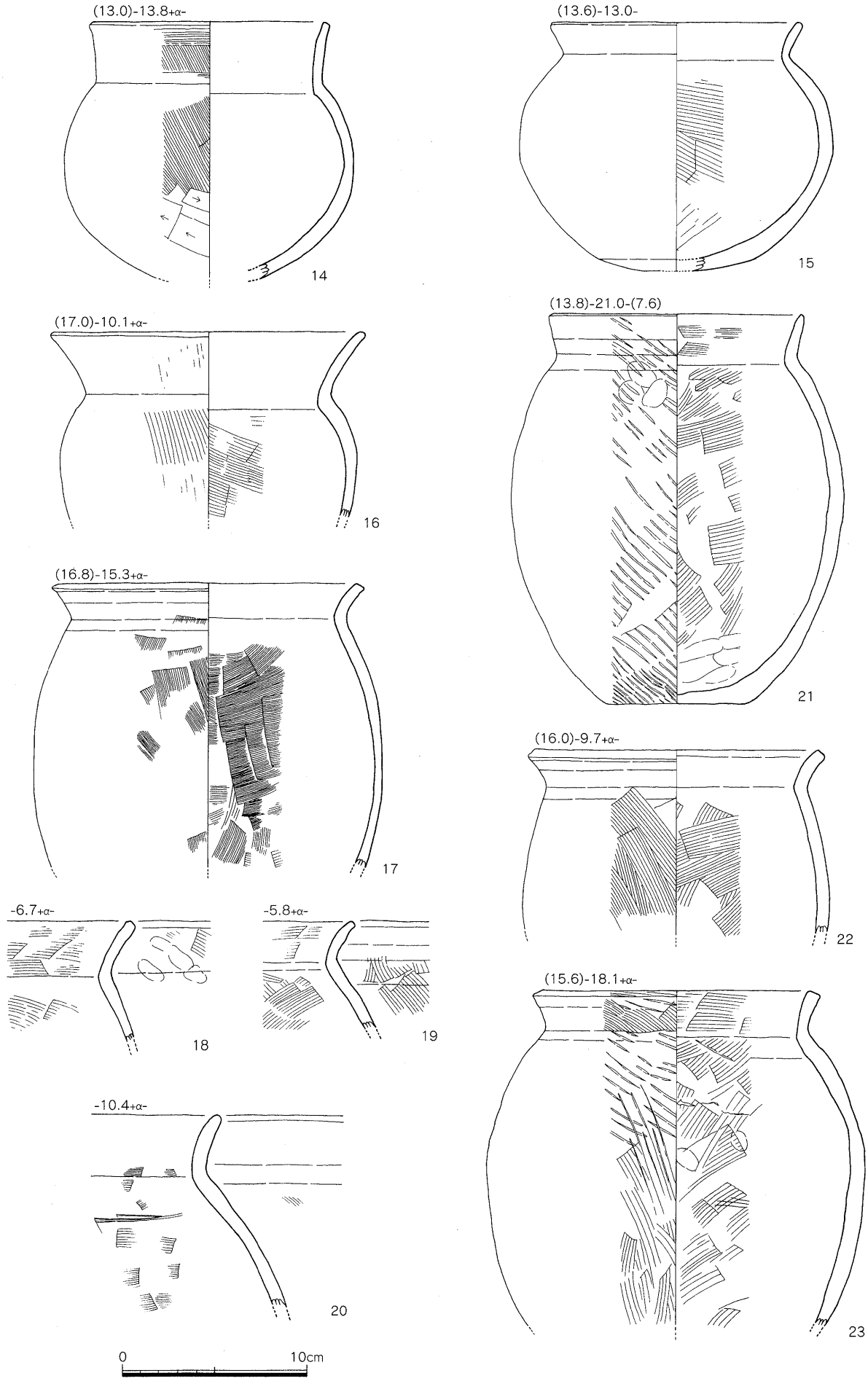


図57.雛2SD003黒色土出土遺物実測図（２）

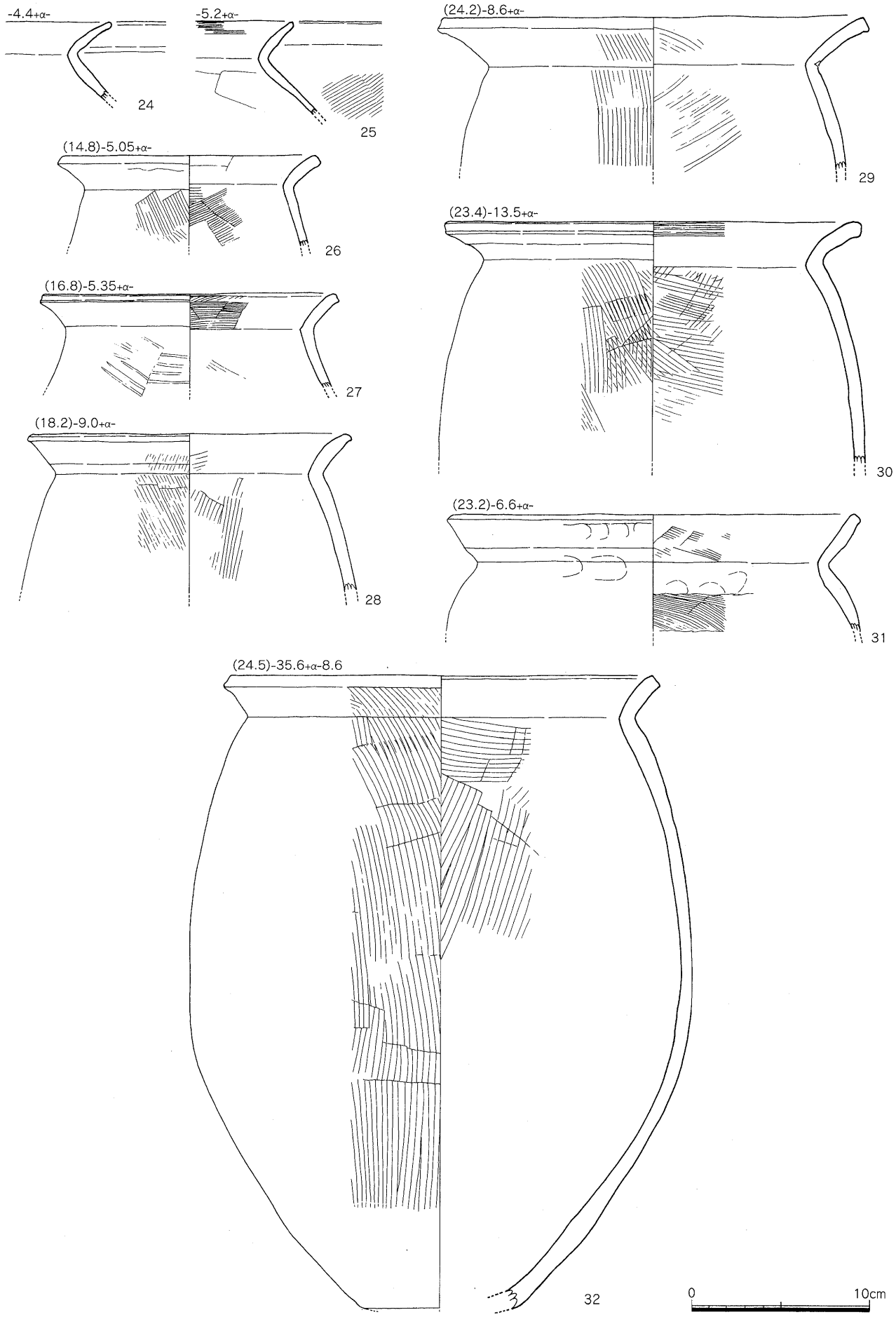


図58.雛2SD003黒色土出土遺物実測図（３）

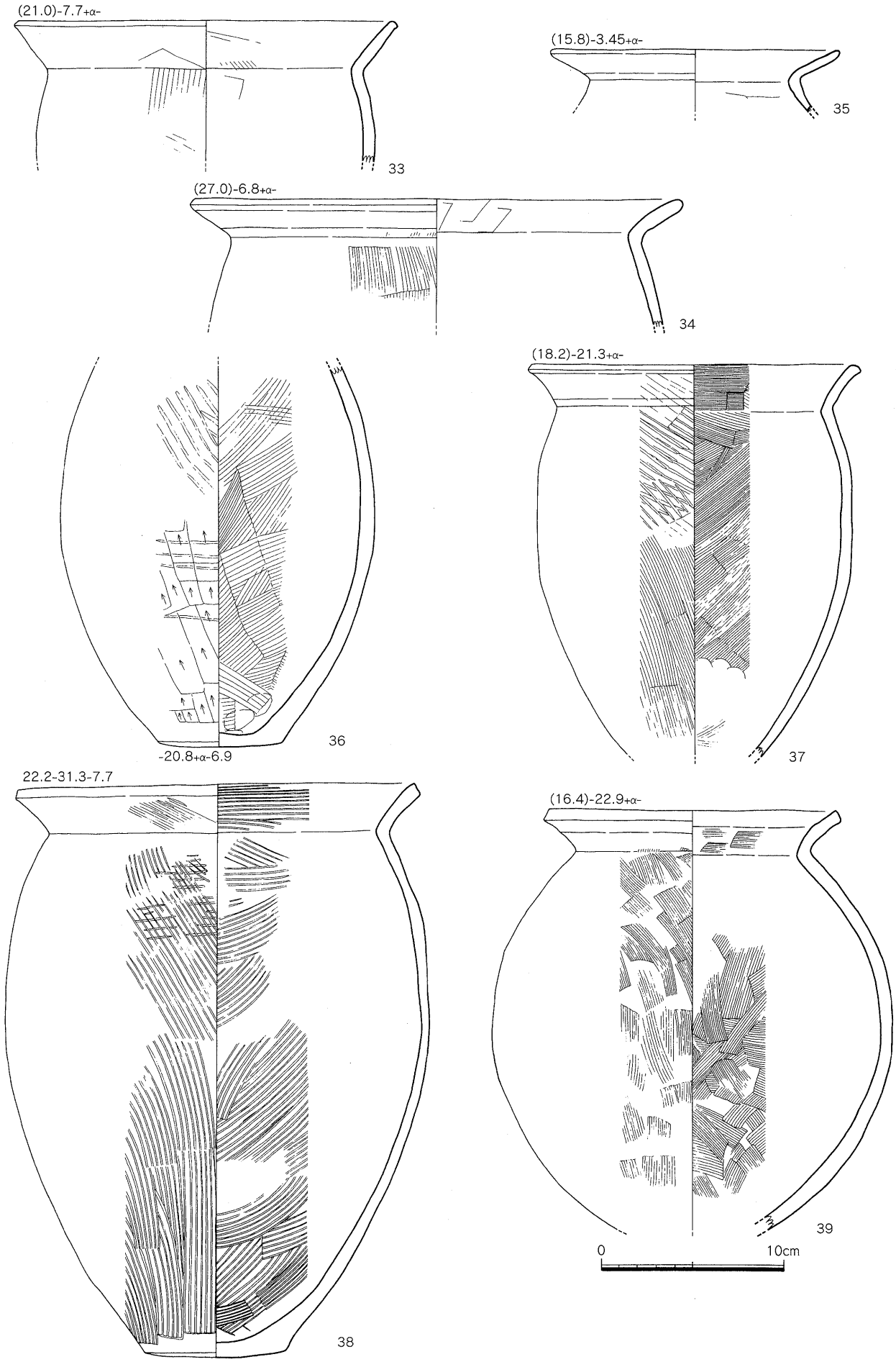


図59.雛2SD003黒色土出土遺物実測図（４）

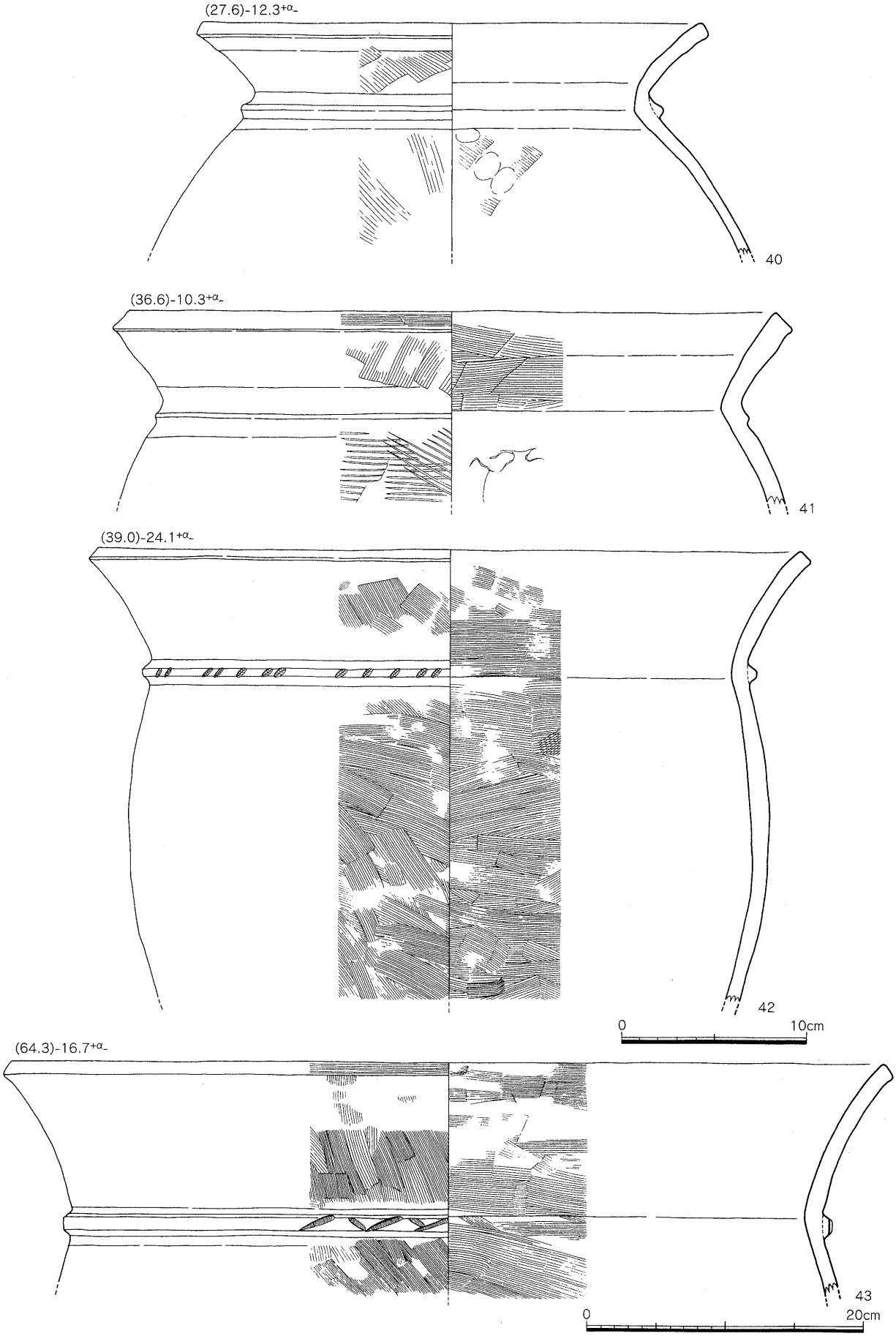


図60.雛2SD003黒色土出土遺物実測図（５）

確認できるのみである。

壺（5～11・14・15）　口縁部のみの破片で、形態から二重口縁を呈するもの（5～9）があり、内傾する口縁部形態のもの（5・6）と、直立気味の口縁部形態を呈するもの（7～9）の二者がある。10および11は、外面に叩き痕跡が観察できるなど粗製の印象を受けるもので、壺の範疇に入れてよいものかどうか躊躇する。両者とも算盤玉状の体部形態を呈し、直立気味の口縁部形態を有する。11は体部中位に断面三角形の突帯を貼付している。14・15は体部形態に胴張りのあるもので、14は直立気味の口縁部形態、15は「く」の字状に屈曲する頸部形態を呈するものである。14は底部外面をヘラ削りではなく工具によるナデ調整を行っているものと考えられる。

支脚（12・13）　12は脚端部が欠損しているが、他の部位は残存しており、推定ではあるが全形が明らかな13と同じ形態を呈するものと考えられる。ただし12は内外面縦方向のナデによって仕上げられているのに対し、13は内外面ともにハケによって器面調整されている。

甕（16～43）　いずれの個体も「く」の字状の頸部形態を有するもので、その屈曲の度合いによって幾つかに分けることができそうである。屈曲が弱く、直立気味に立ち上がるもの（17～23）、屈曲が強く文字通り「く」の字形を呈するもの（16・24～39）である。なお35は摩耗しているため明確に判断できないが、口縁端部を上方へつまみ上げる形状を呈するものと判断され、わずかに観察できる体部と頸部の境界よりやや下位の内面はヘラ削りを行っている。観察できる底部形態はやや凸状に膨らむ平底を呈している。40～43は頸部外面に断面三角形ないしは断面台形の突帯を貼付する大形の甕で、42は突帯上に突帯長軸に対し右上がりの刻み目を、43は「V」字状の刻み目を施文する。

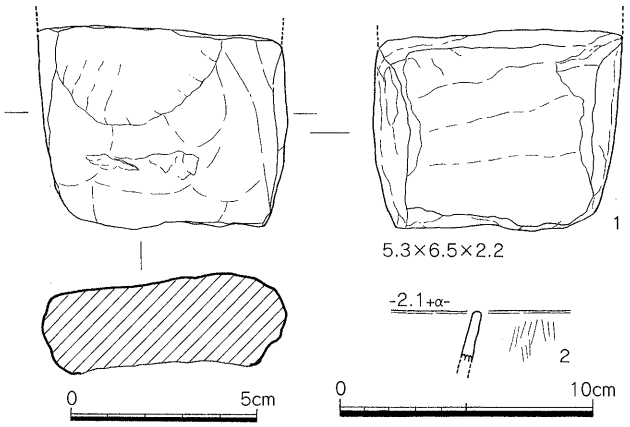


図61.雛2SD003白色砂出土遺物実測図

2SD003白色砂（図61－1・2）

石製品

石斧（1）　刃部および基部の大半が欠損した破片資料で、磨製石斧と考えられる。材質は、玄武岩。

古式土師器

甕×鉢（2）　小破片のため、器種特定は困難である。内面は横ナデ、外面はハケの後横ナデによって仕上げている。

4）その他の遺構出土遺物（図62－１～６）

2SX004

古式土師器

甕（１）　口縁部の破片資料で、全体形状については判然としない。やや直立する口縁部形状

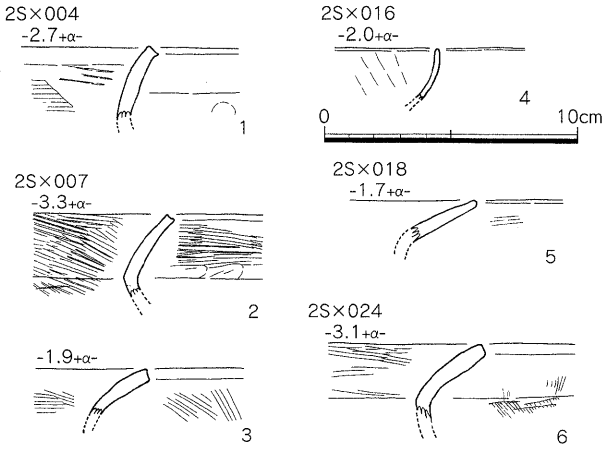


図62.その他の遺構出土遺物実測図

を呈し、内面はハケ、外面は確認できる箇所で横ナデによって仕上げられている。

2SX007

古式土師器

甕（２・３）　いずれも口縁部のみの破片資料で、全体形状に関しては不明確。両者とも内外面はハケによって仕上げている。

2SX016

古式土師器

坏（４）　小形の坏で、口縁部から体部下位までの破片資料である。焼成不良のため、調整痕跡は判然としない。

2SX018

古式土師器

甕（５）　小破片のため器種特定には苦慮する。ここでは、傾き、端部の形状などから甕として判断した。内面は横ナデ、外面はハケによって調整されている。

2SX024

古式土師器

甕（６）　口縁部から頸部上位にかけての破片資料。口縁端部は横ナデ、他の部位の内外面はハケによって仕上げられている。

５）土層出土遺物

茶褐色土（図63～66－１～32）

須恵器

蓋（１）　口径11.2cmを測るもので、天井部中央部分をわずかに残し、天井部外面を回転ヘラ削りしている。なお天井部内面において体部立ち上げのための回転ナデ痕跡が確認できなかったことから蓋と判断した。

高坏（２）　脚端部と判断できるが、壺口縁部の可能性も残っている。脚部外面において稜を形成しており、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

土師器

椀c（３）　高台のみの破片資料で、椀部の形態が判然としないため、小分類としての１ないし２の判断はつかない。

坏a（４）　茶褐色土の堆積年代を推定する資料で、口径14.4cm、器高3.5cm、底径10.3cmを測り、底部外面は回転糸切りによって処理されている。大宰府XVI期に分布中心を置く型式のものと考えられる。

古式土師器

鉢（５・６）　５は内外面に指頭圧痕跡を顕著にとどめているもので、丸底の小形器種である。６は、口縁部のみの破片資料で全形については明確にし難いが、内外面にハケによる器面調整

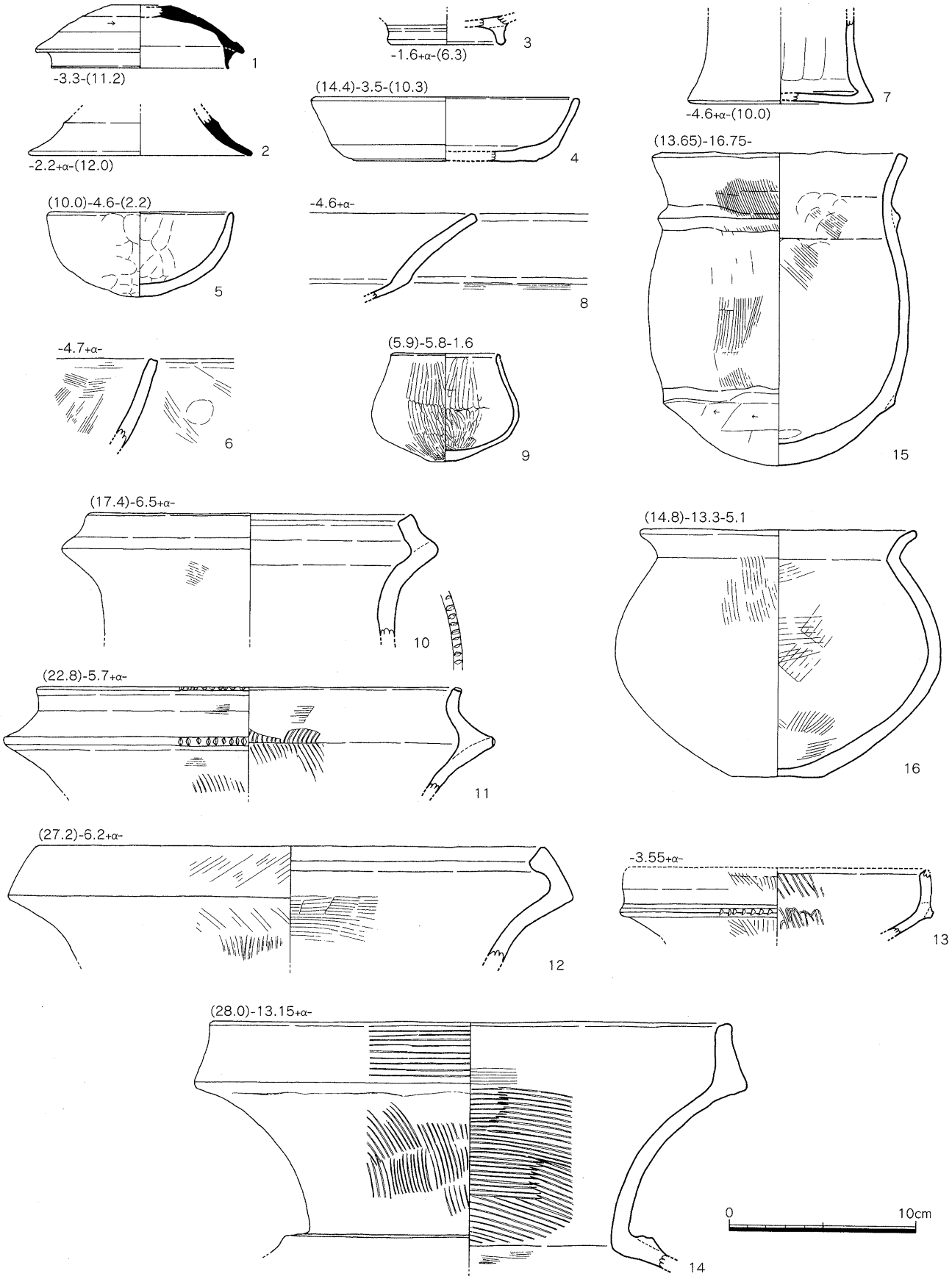


図63.茶褐色土出土遺物実測図（１）

痕跡をとどめている。口縁端部は平坦に仕上げられている。

器種不明（７）　平底のもので、外面は器面摩耗によって調整痕跡は明らかにし難い。壺様の形態も想像できるものの、判然としない。

高坏（８）　坏部口縁の破片で、外方へ開く体部形態を有している。内外面の調整は器面摩耗のため観察できない。

壺（９～14・16～22）　９は小形の壺で、無頸壺の範疇に入るものと考えられる。内外面を

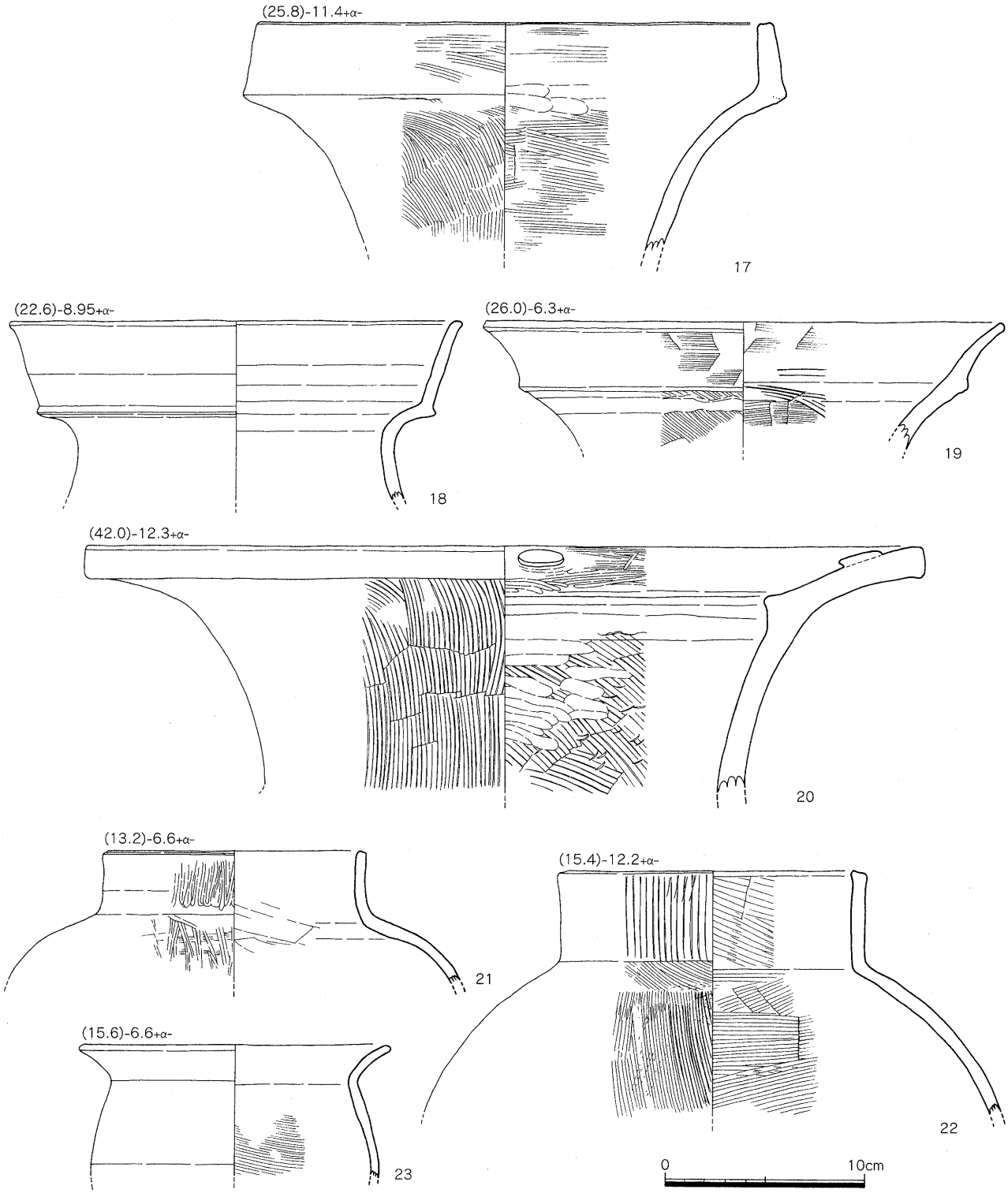


図64.茶褐色土出土遺物実測図（２）

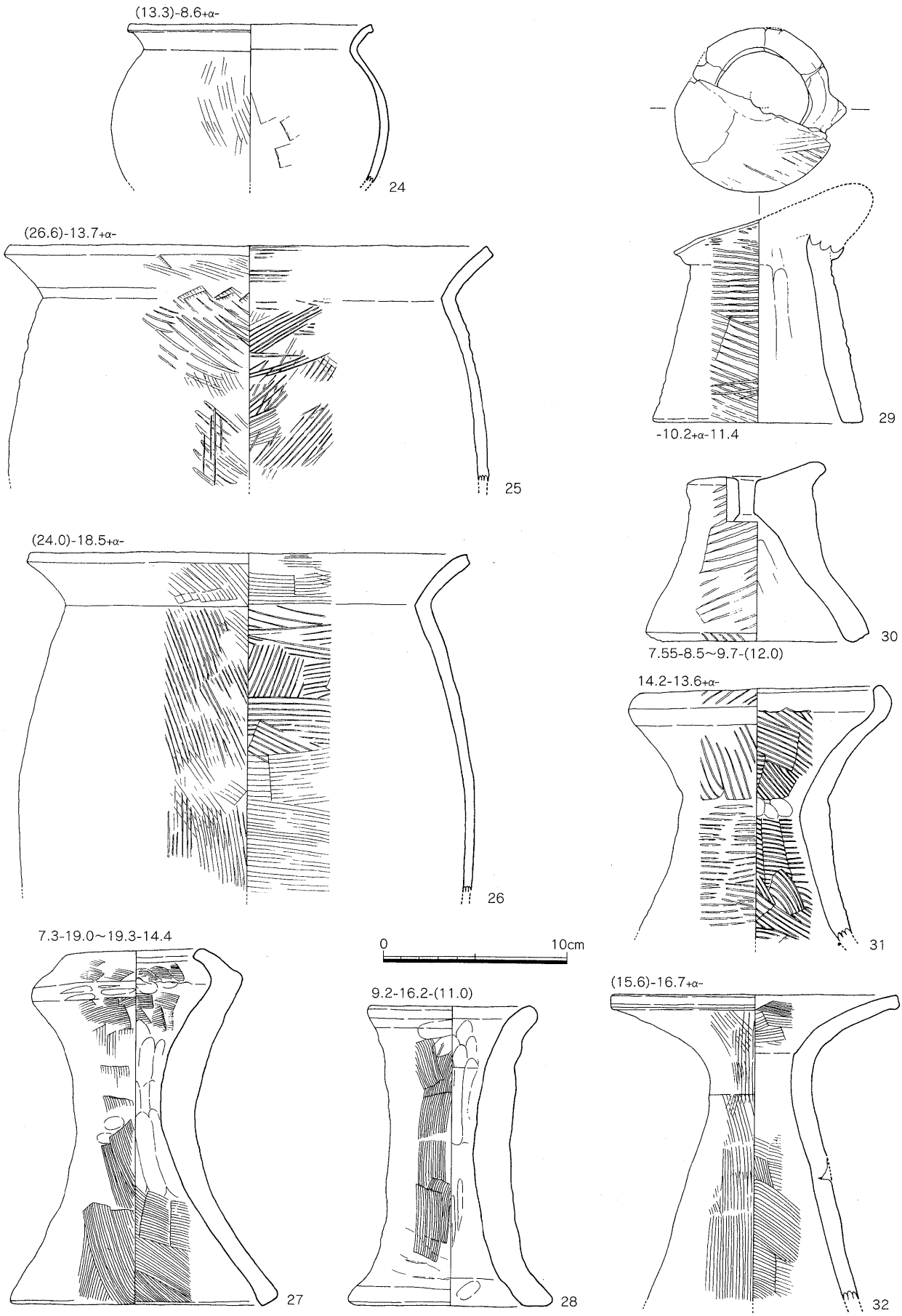


図65.茶褐色土出土遺物実測図（３）

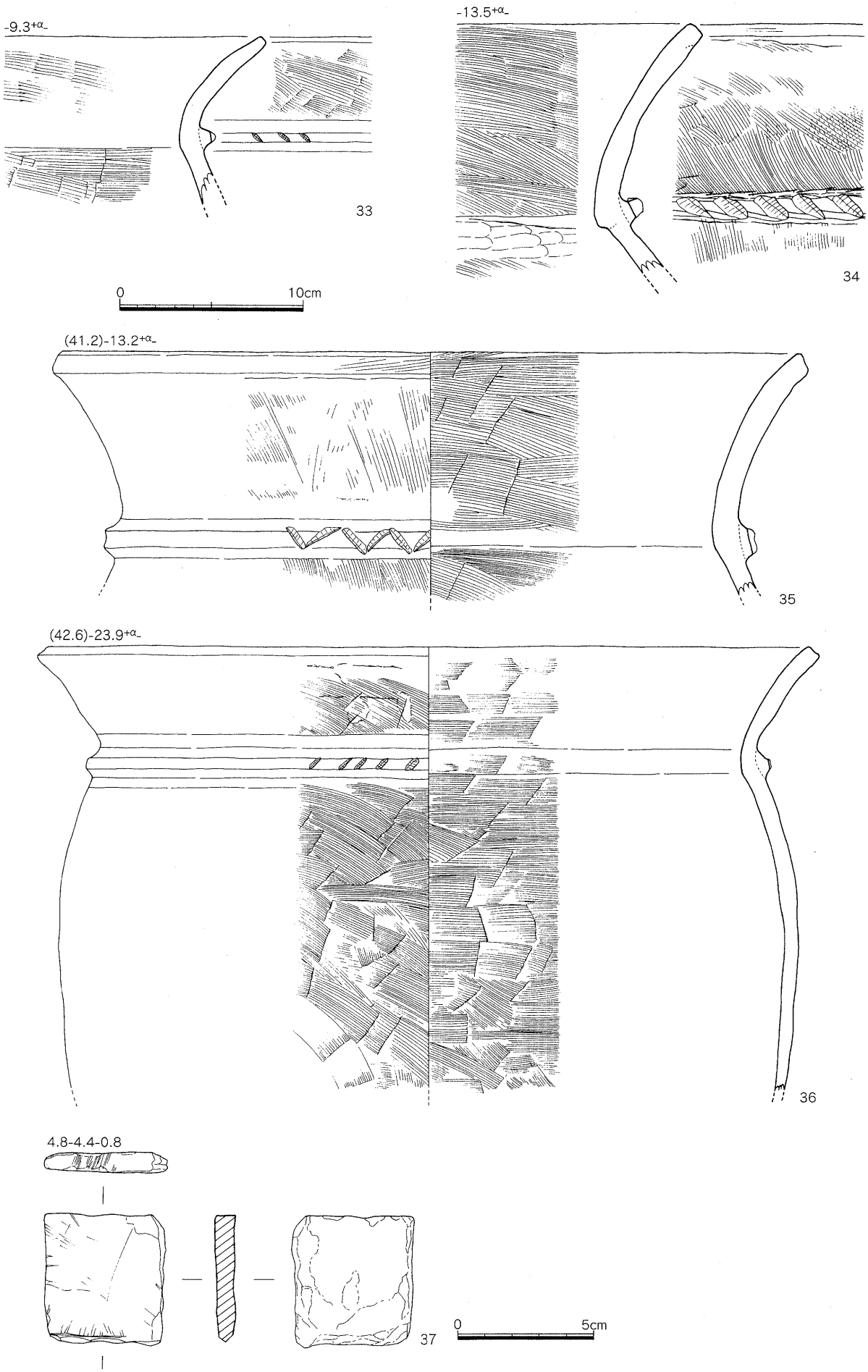


図66.茶褐色土出土遺物実測図（４）

丁寧に縦方向のミガキによって仕上げている。10～14・17～19は二重口縁壺で、内傾する口縁部形状を呈するもの（10～14・17）、外傾する口縁部形状を呈するもの（18・19）の二者がある。11は口縁端部および擬口縁外面に右からの刻み目を施している。また13も同様に擬口縁外面に刻み目を施し、口縁部内面に暗文風の縦方向のミガキが観察できる。18は、内外面ともに横ナデによって丁寧に仕上げられているのに対し、他の個体は全て内外面ともにハケによって器面調整されており、粗製な印象を受ける。16は、胴部の張る「算盤玉」状の体部形状を有し、内外面ともに丁寧なハケ調整によって仕上げている。頸部は「く」の字状に屈曲している。20は頸部より外方に開く口縁部形状を有し、口縁部内面に円形の貼付文、さらに突帯を1条巡らせている。外面は縦方向の粗めのハケによって仕上げている。21・22は、短頸壺の範疇に入るもので、21は外面を丁寧に縦方向に磨くのに対し、22は内外面をハケによって仕上げている。

甕（15・23～26・33～36）　15は、小形の甕で頸部外面および体部外面下位に断面三角形の凸帯を貼付している。内外面ともにハケによって調整しているが底部外面は横方向のヘラ削りによって仕上げられている。23～26は頸部を「く」字に屈曲させる甕で、内外面ともにハケによって調整されている。なお25については平行タタキののちハケによる器面調整を行っている。33～36は、大形の甕で頸部外面に断面三角形ないしは断面台形の凸帯を貼付し、いずれもハケ状原体を用い、刺突による刻み目を施文している。施文内容によって二者が存在しており、一方向のみいわば右下がりないし左下がり方向のみの刻み目を施すものと、「V」字状に施文するものがある。いずれも内外面ともにハケによる調整によって仕上げられている。

器台・支脚（27～32）　支脚と考えられる29・30は小形のもので、一方向に突起状のものがつくものである。外面は、粗い平行タタキによって仕上げられている。なお外面における二次焼成痕跡としての赤変箇所は観察できない。31～32は、筒状の形態を有するもので器台と判断した。ただし受部と考えられる箇所が袋状のもの（27・31）、外方へ大きく開くもの（32）、開き方が小さいもの（28）に分けることができる。31は外面を平行タタキによって仕上げているが、他の個体はハケによって仕上げている。

砥石（37）　小形の砥石で、二面を磨ぎ面として使用している。石材は、頁岩と考えられる。

4.小結

今次調査にて検出した遺構は、下記内容のものである。

【古墳時代前期初頭】

2SD002・2SD00	自然河川（埋没時期）
2SB005・2SB010・2SB015	掘立柱建物（建造時期？）
2SE011	井戸（形成→埋没時期）

【鎌倉期】

2SD001	溝（人工？埋没時期）

これらの遺構の諸関係は、鎌倉期に埋没したと考えられる2SD001に関しては、同時期と考えられる遺構が、今次調査区内で検出されていないことから、調査区外での関係を求めざるを

得ない。調査区内で多く検出された古墳時代前期初頭と位置付けられる遺構群については、その切り合い関係、堆積関係から想定される時間軸上での諸関係を要約すると下記のような状況が想定できる。

最も古期の遺構は、自然河川とした2SD002・2SD003であると考えられる。この河川埋没後、想定としては河川中心が別の場所に移動したことによって、埋没したものと考えられるが、その埋没原因は河川中心の「洪水」などによる移動が直接的な原因であろうが、遺構そのものの埋没原因は、調査所見から堆積物の細粒化現象を勘案すると、集落内における廃棄場所として旧河川窪地が利用された結果ではないかと考えられる。したがって、その後廃棄場所の埋没後（旧河川埋没後）に井戸2SE011が形成され、旧河川内に地下水として流れる水の利用が意図されたものと考えられる。今次調査において検出された掘立柱建物群の建造時期は、河川埋没後、井戸形成時である可能性が高い。

これら想定については、調査所見の不備から論証することが極めて限定される。溝および河川形成時期を考える上での最下層堆積時期の特定、遺物「廃棄」状況の説明情報の欠如、建物建造時期特定のための情報の欠如などから、想定の域を出ない。

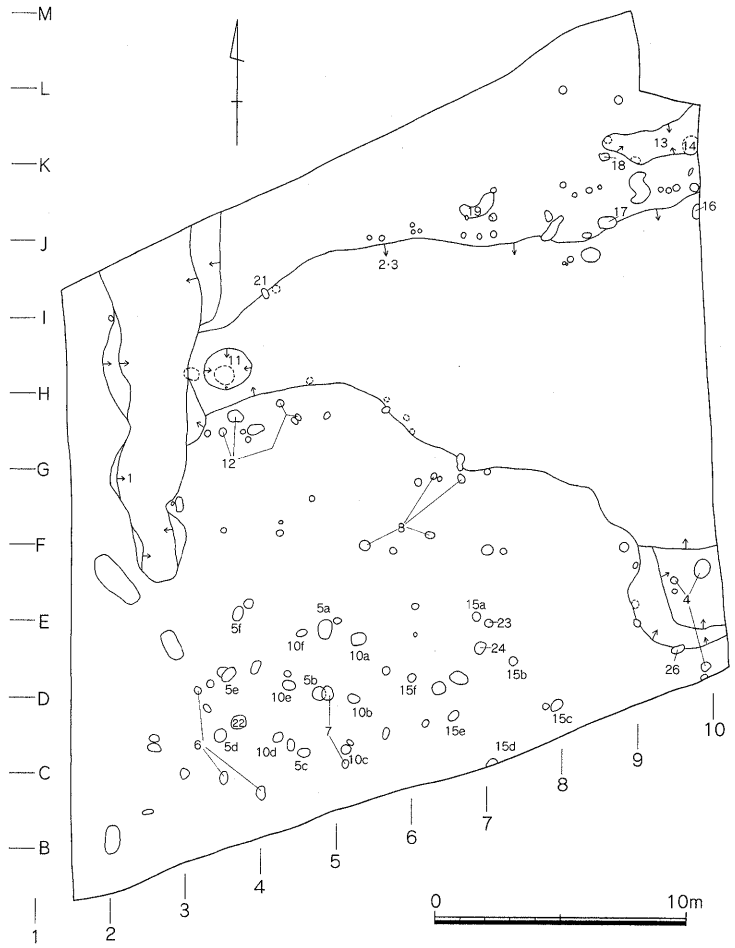


図67.雛川遺跡第２次調査遺構略測図

Ⅳ.調査のまとめ

成果は、本文にて報告してきたように、考古事象の羅列でしか上げることができない。今一度整理すると下記の内容になる。

【古墳時代前期初頭】

雛2SD002・SD003	自然河川（埋没時期）
雛2SB005・SB010・SB015・上1SB010・SB020	掘立柱建物（建造時期？）
雛2SE011	井戸（埋没時期）
上1SK005・SK015	土坑（廃棄時期）

【鎌倉期】

雛2SD001	流路（人工流路？埋没時期）

【鎌倉期から室町期】

上1SD003	溝（埋没時期）

今回報告した遺構群のみで遺跡総体を理解することは困難である。さらに周辺で実施されている調査所見を加味した解釈を行うことも、下記理由によって現状で困難といわざるを得ない。佐野地区遺跡群総体を理解するための作業過程の整理ないしは、作業課題としておく。

1.共時性

2.通時性

両者とも、遺物から遺構、さらには遺跡のレベルまで、微視的な観点から巨視的な観点まで様々な事象上において検討する必要がある。これらの諸関係が遺跡調査所見として整理されなければ、単に遺構間の切り合い関係に基づく前後関係整理のみでは、切り合い関係の無い遺構間の関係が把握できない。同時使用遺構、同時存在の遺構はどれなのかが命題として残る。この命題解決がなされて初めて、関氏が提示した課題に、考古事象上から回答することができる。簡単なようで難しい課題である。

遺構から出土する遺物の堆積過程の復原、いつの段階での遺物なのかを明示すべく、上記調査成果のまとめで、形成・埋没の別を明示した。しかし、遺構から出土する遺物が「形成」年代として報告される例が少なくなってきたとはいえ、報告される例があることは、この課題解決への道のりが遠いことに気付く。特に溝出土遺物の取り扱いによって生じる誤認は、遺跡総体において任意調査区である行政調査でよく生じる問題点の一つである。今回の報告においても、自然河川（雛2SD002・SD003）、人工流路？として報告した溝（雛2SD001）については、調査情報の不足によって形成時期の推定ができなかった。埋没時期については調査によって収集した遺物の帰属時期から、古墳時代前期初頭および鎌倉期に位置付けることは可能である。しかし、この遺構延長部において同様の所見が収集できるかどうかは不明である。また埋没時期は、単に埋没したという所見のみならず、同時期形成の遺構を想定した場合、これらの遺構群とは等しく同時存在の関係ではないことに気付く。したがって、雛川遺跡に存在している古

墳時代前期初頭に埋没した自然河川と、同時期の遺物を出土する掘立柱建物群、竪穴「住居」群との関係が、現状での調査所見からは不明瞭となっている。

なお今回報告を行った調査地および周辺調査所見から看取できることは、上川久保遺跡へ向けて遺構検出数、遺物量が激減する傾向がある。後世の削平など様々なバイアスを考慮すると、これらの数値が等しく集落景観を復原する手がかりとはなり得ないことは明らかであるが、一定の空間利用状況の傾向把握には役立つものと考えられる。これとて、先に提示した諸遺構の関係把握から検証され、微視から巨視への視点移行と成果の積み上げによって解決される課題である。

今回の報告のみにおいて提示できる成果は、報告において記述してきた内容を上回るものではない。しかし、様々な「もの」における諸関係を考えるための情報収集方法を考え、その方法を実践することに努めなければ、遺跡破壊に近い「記録保存」であることを知ることになった課題は大きい。

（中島恒次郎）

表１　上川久保遺跡１次調査遺構番号一覧

S-番号	遺構番号	遺構性格	堆積土層	遺構前後関係	形成時期	埋没時期	地区番号
1	1SK001	土坑	炭化物単独層←黒茶色土				C16
2	1SD002	溝			現代		C14
3	1SD003	溝				中世後期	D15
4	1SX004	小穴					E11
5	1SK005	土坑	黒茶色土	1SK005 ← 1SB010		古墳前期	I18
6	1SX006	小穴				古墳前期	E12
7	1SX007	小穴群				古墳前期	F12
8	1SX008	小穴群				古墳前期	F13
9	1SX009	小穴群		1SD003 黒茶色土← 1SX009		古代	F15 他
10	1SB010	掘立柱建物		1SK005 ← 1SB010		古墳前期	I17 他
11	1SX011	小穴			奈良後半		G12
12	1SX012	小穴群	茶黒色土			古墳前期	H12
13	1SX013	小穴群	茶黒色土			古墳前期	I15
14	1SX014	小穴群	茶黒色土			古墳前期	H14
15	1SK015	土坑			古墳前期		J10
16	1SX016	小穴群				古代以降	H15
17	1SX017	凹み					I12
18	1SX018	凹み				奈良	J12
19	1SX019	小穴				古墳前期	I13
20	1SB020	掘立柱建物				古墳前期	N12 他
21	1SX021	小穴群	黒茶色土			古墳前期	J14
22	1SX022	小穴			現代か？		J18
23	1SX023	小穴群				古墳前期	J15
24	1SX024	小穴群				弥生中期以降	K14
25	欠番						
26	1SX026	小穴					K12
27	1SX027	小穴群				古墳前期	R4
28	1SX028	小穴	黒茶色土			古墳前期	R4
29	1SK029	土坑	茶色土				Q4
30	欠番						
31	1SX031	小穴					Q4
32	1SX032	凹み	黒茶色土			奈良以降	Q5
33	1SX033	土坑	茶黒色土			平安以降	Q5
34	1SX034	小穴群				古墳前期	Q4
35	欠番						
36	1SX036	小穴群					P4
37	1SX037	凹み	茶黒色土			平安後期	P4
38	1SX038	小穴群	茶黒色土			平安中期	P5
39	1SX039	小穴群	茶黒色土				P5
40	欠番						
41	1SX041	小穴群	茶色土			古墳前期	S2
42	1SD042	溝		1SD042 ← 1SD043		平安後期	Q5
43	1SD043	溝	茶色砂混じり土	1SD042 ← 1SD043		平安後期	O4
44	1SX044	小穴群	茶黒色土			古墳前期	H15
45	欠番						
46	1SX046	小穴群				古墳前期	K14
47	1SD047	溝				平安中期	H11
48	1SX048	小穴群				古墳前期	M7
49	1SX049	小穴			古墳前期		M8
50	欠番						
51	1SX051	小穴群			古墳前期		K・L8
52	1SX052	小穴群				古墳前期	O6
53	1SX053	小穴群				古墳前期	O7
54	1SD054	溝		1SD042 ← 1SD054		古墳前期	R6
55	欠番						
56	1SX056	小穴群					R7
57	1SX057	小穴群				古墳前期	R5
58	1SX058	小穴群				奈良か？	R3
59	1SD059	溝		1SD059 ← 1SD042 ← 1SD043		近代以降	Q2 他
60	欠番						
61	1SX061	小穴				弥生後期	L14
62	1SX062	小穴				古墳前期	M9
63	1SX063	小穴			古墳前期		N8
64	1SX064	小穴群				平安中期以降	P8
65	欠番						
66	1SX066	小穴		1SD043 ← 1SX066		古墳前期	O5
67	1SX067	小穴群				古墳前期	N5
68	1SX068	小穴				古墳前期	M12
69	1SX069	小穴				近代～	G16
70	欠番						
71	1SX071	小穴					D13

表２　上川久保遺跡２次調査遺構番号一覧

S- 番号	遺構番号	遺構性格	堆積土層	遺構前後関係	形成時期	埋没時期	地区番号
1	2SD001	溝	淡茶灰色砂土			平安後期	H16 他
2	2SD002	溝	茶黒色土			古墳前期	F14
3	2SX003	小穴群	淡茶灰色砂土	2SB010 の柱穴を含む。		古墳前期	G14
4	2SX004	小穴群	黒色粘土（黄色土ブロック混入）			古墳前期	D12
5	2SB005	掘立柱建物					F15 他
6	2SX006	小穴群	茶黒色土			古墳前期	G12
7	2SD007	自然河川	中粒砂（黄茶色・黒色土ブロック混入）			平安後期	J4 他
8	2SX008	凹み					K4 他
9	2SX009	凹み		2SX009 → 2SD001			I13
10	2SB010	掘立柱建物					G14
11	2SX011	凹み	茶色土	2SX011 → 2SD001			I15
12	2SD012	溝	暗茶灰色中粒砂～粗粒砂				J17 他
13	2SD013	溝	暗黒灰色砂	2SD013 → 2SD001・2SD012		平安	J16 他

表３　雛川遺跡２次調査遺構番号一覧

S- 番号	遺構番号	遺構性格	遺構前後関係	形成時期	埋没時期	地区番号
1	2SD001	溝	2SD001 ← 2SD002・3		大 XVII 期	E3
2	2SD002	溝	2SD001 ← 2SD002・3		古墳前期	GH ライン
3	2SD003	溝	2SD001 ← 2SD002・3		古墳前期	GH ライン
4	2SX004	小穴群	2SX004 ← 2SD002・3	古墳前期		E10
5	2SB005	掘立柱建物		古墳前期		D5 他
6	2SX006	小穴群		古墳前期		C4
7	2SX007	小穴		古墳前期		D5
8	2SX008	小穴群		古墳前期		F6
9	欠番					-
10	2SB010	掘立柱建物		古墳前期		D6 他
11	2SE011	井戸	2SE011 ← 2SD0023	古墳前期		H14
12	2SX012	小穴群		古墳前期		G4・5
13	2SX013	凹み		古墳前期		K10
14	2SX014	小穴群		古墳前期		K10
15	2SB015	掘立柱建物		古墳前期		E7 他
16	2SX016	小穴	2SX016・17 ← 2SD002・3	古墳前期		J10
17	2SX017	小穴	2SX016・17 ← 2SD002・3	古墳前期		J9
18	2SX018	小穴		古墳前期		K9
19	2SX019	小穴群		古墳前期		J7
20	欠番					-
21	2SX021	小穴		古墳前期		I5
22	2SX022	小穴		古墳前期		C4
23	2SX023	小穴		古墳前期		E7
24	2SX024	小穴		古墳前期		D7
25						-
26	2SX026	小穴	2SX026 ← 2SD002・3	古墳前期		D10

表４　上川久保遺跡第１次調査　遺物一覧表（１）

試掘　自然流路

古式土師器	大甕

表土

土製品	破片

撹乱

須恵器	坏c、蓋3、甕、壺
土師器	小皿a（イト）、坏a（イト）、甕
古式土師器	破片
龍泉窯系青磁	椀；IV（1）
瓦質土器	火鉢
瀬戸	皿
国産磁器	破片
白磁	椀；V-4-b（1）、V-4 × VIII（1）
	壺他；破片（1）
石製品	スクレイパー（サヌカイト）
瓦類	破片（いぶし瓦）

茶褐色土

須恵器	皿a、坏c、坏身（6c末）、蓋1、蓋3、蓋c
土師器	小皿a（イト）、坏a（イト）、坏c、椀c、甕a、甑
古式土師器	甕、二重口縁壺、高坏、支脚
黒色土器B	椀c2
越州窯系青磁	椀；I（1）
緑釉陶器	破片
国産陶器	破片（近代～）
中国陶器	壺；IV（1）
	他器種；瓶
肥前系陶磁器	小椀
国産磁器	紅皿
石製品	石鏃（サヌカイト）、剥片（サヌカイト、黒曜石）
瓦類	丸瓦、破片（格子叩）

S-1

土師器	坏a（イト）

S-2　現代

須恵器	坏身、甕
土師器	坏、甕
古式土師器	甕
国産陶器	摺鉢
国産磁器	染付（現代）
石製品	剥片（黒曜石）
瓦類	平瓦（格子叩）

S-2　白色砂　撹乱溝としてS-2と統合

古式土師器	甕

S-3

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a（イト）
古式土師器	甕
瓦類	丸瓦、破片（格子叩）

S-3　茶色土　中世後期～

須恵器	坏c、蓋1、高坏、甕、壺
土師器	小皿c、坏a（イト）
龍泉窯系青磁	椀；II-b（1）
同安窯系青磁	椀；I-b（1）
瓦質土器	こね鉢×摺鉢
白磁	皿；II（1）
	壺他；破片
中国陶器	壺；B3群（1）
国産磁器	染付（近代～、混入か）
土製品	焼土
瓦類	平瓦（縄目叩）

S-3　黒茶色土　中世前期

須恵器	坏a、坏c、蓋1、蓋3、蓋c、高坏、甕、壺、把手
土師器	坏a（イト）、甕a
古式土師器	甕、二重口縁壺
瓦器	椀c2
土製品	支脚
石製品	剥片（黒曜石）
瓦類	破片

S-3　茶灰色砂　奈良後期～

須恵器	小坏c、坏c、蓋3、蓋c、甕
土師器	甕（角閃石）
古式土師器	甕、壺
石製品	石鏃（黒曜石）、剥片（黒曜石）
瓦類	丸瓦、破片（格子叩）

S-3　灰色砂　奈良

須恵器	坏
土師器	甕

S-4

弥生土器	甕

S-4　茶黒色土

石製品	剥片（黒曜石）

S-5　古墳前期

古式土師器	甕、二重口縁壺、器台（粗製）
石製品	剥片（黒曜石）

S-6　古墳前期

古式土師器	甕

S-7　古墳前期

古式土師器	甕

S-8　古墳前期

古式土師器	壺×甕

S-9　古代～

土師器	破片

S-10a

石製品	剥片（黒曜石）

S-10b　掘り方　古墳前期

古式土師器	破片
石製品	剥片（黒曜石）

S-10b　柱痕　古墳前期

古式土師器	破片

S-10c　古墳前期

古式土師器	破片
石製品	剥片（黒曜石）

S-10d　古墳前期

古式土師器	破片
越州窯系青磁	椀；I（1）（混入か）

S-11　奈良後半

古式土師器	破片

S-12　古墳前期

古式土師器	破片

S-13　古墳前期

古式土師器	破片

表５　上川久保遺跡第１次調査　遺物一覧表（２）

S-14　古墳前期

古式土師器	破片

S-15

古式土師器	甕、壺、二重口縁壺、小型丸底壺、高坏
	鉢（精製）（粗製）、器台（精製）
石製品	石鎌？

S-15　黒茶色土　古墳前期

古式土師器	甕、壺

S-16　古代～

土師器	破片
古式土師器	甕

S-17

須恵器	坏c
土師器	甕
古式土師器	破片

S-18　奈良

須恵器	坏c
土師器	高坏
白磁	壺他；破片（現代か←混入）

S-19　古墳前期

古式土師器	甕

S-20b　古墳前期

古式土師器	破片

S-20e　古墳前期

古式土師器	破片
石製品	石鏃（サヌカイト）

S-20f

古式土師器	甕

S-21　古墳前期

古式土師器	甕
石製品	剥片（黒曜石）

S-22　近世～

須恵器	坏
土師器	破片
肥前系磁器	破片

S-23　古墳前期

古式土師器	破片

S-24　弥生中期～

弥生土器	甕

S-26　不明

古式土師器	破片

S-27　古墳前期

古式土師器	破片

S-28　古墳前期

古式土師器	壺
金属製品	破片
石製品	剥片（黒曜石）

S-29　不明

土製品	破片
石製品	剥片（黒曜石、サヌカイト）

S-31

古式土師器	破片
石製品	剥片（黒曜石）

S-32　奈良～

須恵器	坏身、破片
古式土師器	破片
瓦類	破片

S-33　平安～

須恵器	破片
土師器	坏a（VIAtype）
古式土師器	甕、支脚
瓦類	平瓦（縄目叩）

S-34　古墳前期

古式土師器	甕
石製品	剥片（黒曜石）

S-36　不明

土製品	破片

S-37　平安後期

須恵器	坏a、蓋c3、甕
土師器	丸底坏a
古式土師器	甕
黒色土器B	椀c
石製品	剥片（黒曜石）

S-38　平安中期～

須恵器	破片
土師器	甕、破片
黒色土器B	椀c2

S-39

須恵器	甕×壺
土師器	破片
古式土師器	破片

S-41　古墳前期

古式土師器	破片
石製品	剥片（黒曜石）

S-42　灰茶色土

須恵器	坏c、蓋3、壺
土師器	丸底坏a、小壺
古式土師器	甕、二重口縁壺、鉢
石製品	石鏃（サヌカイト）、剥片（黒曜石）
弥生土器	甕（前期）
瓦類	平瓦（縄目叩）

S-42　灰色砂

須恵器	蓋c、高坏
土師器	破片

S-42　茶黒色土　XI期

須恵器	坏c、蓋c、蓋3、甕、壺f×d、高坏
土師器	小皿a1、丸底坏a、椀c2、高坏
古式土師器	甕、高坏
黒色土器B	椀c2
越州窯系青磁	椀；I（9）
龍泉窯系青磁	椀；II-b（1）
白磁	壺他；破片（1）
石製品	剥片（サヌカイト、黒曜石）
瓦類	平瓦（縄目叩）

表６　上川久保遺跡第１次調査　遺物一覧表（３）

S-43　平安後期

須恵器	坏c、蓋、甕、壺、鉢a
土師器	丸底坏a
古式土師器	破片
国産磁器	染付（現代）
石製品	剥片（黒曜石）

S-43　白茶色土　奈良後半～平安前期

須恵器	坏c、壺f×d
古式土師器	甕、二重口縁壺
黒色土器B	破片
白磁	皿；破片
石製品	剥片（サヌカイト）
瓦類	破片

S-43　茶色砂土　平安中期～

須恵器	蓋3、甕
土師器	丸底坏a、坏×皿
古式土師器	甕、鉢
黒色土器B	椀2
白磁	椀；XI？（1）

S-44　古墳前期

古式土師器	甕

S-46　古墳前期

古式土師器	甕

S-47　平安中期～

須恵器	坏c
土師器	小皿a1、高坏
古式土師器	破片
石製品	剥片（黒曜石）

S-48　古墳前期

古式土師器	破片

S-49　古墳前期

古式土師器	甕、鉢

S-51　古墳前期

古式土師器	二重口縁壺

S-52　古墳前期

古式土師器	甕、壺
石製品	石鏃（黒曜石）

S-53　古墳前期

古式土師器	甕

S-54　古墳前期

古式土師器	壺、鉢
石製品	剥片（サヌカイト）

S-56

古式土師器	甕
石製品	剥片（黒曜石）

S-57　古墳前期

古式土師器	破片
石製品	剥片（黒曜石）

S-58　奈良？

土師器	高坏
古式土師器	破片
石製品	剥片（黒曜石）

S-59　近代～

須恵器	坏c、坏身、蓋3、壺蓋、高坏
土師器	把手
古式土師器	甕
瓦器	破片
瓦質土器	破片
国産磁器	染付（近代～）
石製品	剥片（黒曜石）
瓦類	平瓦（格子叩）、破片

S-61　弥生後期

弥生土器	甕（後期）

S-62　古墳前期

古式土師器	破片

S-63　古墳前期

古式土師器	鉢

S-64　平安中期～

土師器	破片
古式土師器	甕、壺
黒色土器B	椀c2（XItype）
石製品	剥片（黒曜石）

S-66　古墳前期

古式土師器	破片

S-67　古墳前期

古式土師器	壺

S-68　古墳前期

古式土師器	甕

S-68　近代～

古式土師器	破片
国産陶器	破片（近代～）

S-71　不明

土製品	破片

表７　上川久保遺跡第２次調査　遺物一覧表

表土

須恵器	坏c、蓋1、蓋c、甕
土師器	把手破片
古式土師器	破片
龍泉窯系青磁	椀；I（1）
同安窯系青磁	椀；I-a（1）
白磁	皿；II-1-a（1）
中国陶器	鉢；IV ？（1）
	他器種；破片
瓦類	破片

茶灰色土

弥生土器	甕（後期）

茶灰色粘質土　現代

須恵器	坏c
土師器	小皿、坏a（イト）、高坏、破片
古式土師器	甕、二重口縁壺、鉢、高坏、破片
瓦器	椀
越州窯系青磁	壺；破片（1）
龍泉窯系青磁	椀；II-b（1）
白磁	椀；IV（1）、IV-1-a（1）、V-3（1）、破片（1）
	壺他；破片（1）
中国陶器	他器種；破片
石製品	剥片（黒曜石）
瓦類	丸瓦

S-1　平安後期

須恵器	坏身（古墳）、壺、鉢a
土師器	坏a、丸底坏、椀c2、破片
古式土師器	破片
黒色土器B	椀
白磁	椀；IV（1）
石製品	剥片
瓦類	破片

S-1　茶灰色土　中世

須恵器	坏c、坏身（古墳）、坏×皿、甕
土師器	坏a（イト）、椀c2
古式土師器	二重口縁壺、破片
石製品	剥片（サヌカイト）

S-1　黒灰色砂土

須恵器	坏c、蓋3、甕
土師器	丸底坏
古式土師器	破片
黒色土器B	椀
石製品	破片（黒曜石）

S-2　古墳前期

古式土師器	甕、高坏

S-3　古墳前期

古式土師器	甕（布留型）

S-4　古墳前期？

古式土師器	甕、破片

S-6　古墳前期？

古式土師器	破片

S-7　平安後期

須恵器	坏c、甕
土師器	椀c
瓦器	椀
中国陶器	破片

S-8

土師器	破片
瓦質土器	破片

S-9　中世

土師器	坏×皿
古式土師器	甕×壺

S-11　古代以降

須恵器	甕
土師器	破片
石製品	剥片

S-12　奈良

須恵器	坏c、蓋c
土師器	坏c
古式土師器	破片

S-13　平安後期

須恵器	甕
土師器	小皿a（ヘラ）、椀c、甕
黒色土器A	椀c
古式土師器	破片

表８　雛川遺跡第２次調査出土遺物一覧（１）

S-1　茶色土

古式土師器	甕、壺、二重口縁壺、高坏
瓦器	椀
石製品	剥片（黒曜石）

S-1　茶黒色土

古式土師器	大甕、二重口縁壺、小鉢、高坏、器台

S-1　茶褐色土

古式土師器	甕、大甕、高坏、器台

S-1　黒色土　　大宰府 XV 期

須恵器	坏蓋（ヘラ記号あり）
土師器	坏 a（イト）
古式土師器	甕、大甕、二重口縁壺、鉢、高坏、器台
石製品	軽石

S-1　灰色砂

須恵器	甕
古式土師器	甕、大甕、二重口縁壺、高坏、器台
石製品	剥片（サヌカイト）

S-2　茶色土

古式土師器	甕、大甕、壺、二重口縁壺、鉢、高坏、器台、大形器台
石製品	剥片（黒曜石）

S-2　黒色土

古式土師器	破片
石製品	剥片（サヌカイト）

S-2　白色砂

古式土師器	二重口縁壺、高坏、器台、破片
石製品	剥片

S-2　黒灰色砂

古式土師器	甕、壺

S-2　茶黒色土

古式土師器	甕、大甕、高坏、器台

S-2　黒色砂土

古式土師器	破片
石製品	ナイフ形石器

S-3　黒色土

古式土師器	甕、大甕、台付甕、二重口縁壺、鉢、高坏、器台
石製品	軽石

S-3　茶黒色土砂土

古式土師器	甕、大甕、壺、鉢、高坏、器台
石製品	石剣（粘板岩）

S-3　白色砂

古式土師器	甕
石製品	石斧

S-3　黒灰色粘土

古式土師器	甕

S-4

古式土師器	甕

S-5a

古式土師器	甕、鉢

S-5b

古式土師器	甕
その他	焼土塊

S-5d

古式土師器	甕

S-5d　柱痕

古式土師器	高坏

S-5e

古式土師器	甕×鉢

S-6

古式土師器	甕

S-7

古式土師器	甕

S-8

古式土師器	甕、壺

S-10a

古式土師器	甕

S-10d

古式土師器	甕

S-10d

古式土師器	甕×支脚

S-10f

古式土師器	甕

S-11

古式土師器	甕、大甕、高坏、器台
石製品	剥片（黒曜石）

S-11　埋土

古式土師器	甕、大甕、壺

S-11　枠内

古式土師器	甕

S-11　黒灰色粘土

古式土師器	甕、高坏
石製品	剥片（黒曜石）

S-11　黒色砂

古式土師器	甕、二重口縁壺

S-11　掘り方

古式土師器	甕、大甕、二重口縁壺、高坏

S-11　裏込め

古式土師器	甕、二重口縁壺、鉢

S-12

古式土師器	甕

S-13　　奈良

須恵器	甕
古式土師器	破片

S-14

古式土師器	甕、壺、鉢（精製）

表９　雛川遺跡第２次調査出土遺物一覧（２）

S-16

古式土師器	坏、甕、器台

S-17

古式土師器	甕、蓋

S-18

古式土師器	甕、大甕

S-19

古式土師器	甕、器台×支脚

S-21

古式土師器	甕

S-22

古式土師器	甕、鉢

S-23

古式土師器	甕

S-24

古式土師器	甕

茶褐色土

須恵器	坏蓋、甕
古式土師器	甕、大甕、壷、二重口縁壷、鉢、高坏、器台
龍泉窯系青磁	椀：Ⅲ
白磁	Ⅲ：Ⅸ
弥生土器	鉢
石製品	砥石、軽石、剥片（黒曜石）
瓦類	破片（格子叩き）

Z

古式土師器	甕、壷、高坏、器台

写真図版

調査報告に関わる写真情報は、カラー情報として巻末に添付しているCD-ROMに収納している。使用方法など詳細については、CD-ROM内のテキストデータにて記載している「はじめにお読みください」を御参照いただきたい。なお、報告遺跡全景についてモノクロ情報として次頁以降に掲載する。

上川久保遺跡　第１次・雛川遺跡　第２次調査地全景（北から）

上川久保遺跡　第１次調査地全景（南から）

上川久保遺跡　第２次調査地全景（右が北）

雛川遺跡　第２次調査地全景（東から）

報告書抄録

ふりがな	だざいふ・さのちくいせきぐん　16
書名	太宰府・佐野地区遺跡群　16
副書名	佐野土地区画整理事業に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	66集
編著者	中島恒次郎・渡邊仁
編集機関	太宰府市教育委員会
所在地	福岡県太宰府市観世音寺１丁目１番１号
発行年月日	2003（平成15）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	条坊 【鏡山推定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
かみかわくぼいせき 上川久保遺跡　第１次	条坊外	おおあざむかいざのあざかみかわくぼ 大字向佐野字上川久保	402214	210309-1	55.800	-46.330	19900705	19900914	1462.45	区画整理事業
かみかわくぼいせき 上川久保遺跡　第２次	条坊外	おおあざむかいざのあざかみかわくぼ 大字向佐野字上川久保	402214	210309-2	55.849	-46.252	19941102	19941212	1500	区画整理事業
ひながわいせき 雛川遺跡　第２次	条坊外	おおあざむかいざのあざひながわ 大字向佐野字雛川	402214	210341-2	55.820	-46.250	19900917	19901024	700	区画整理事業

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
上川久保遺跡　第１次	集落	弥生　古墳　平安　鎌倉　室町	掘立柱建物　土坑　溝	弥生土器　古式土師器　土師器 須恵器　青磁　白磁　黒色土器	
上川久保遺跡　第２次	集落	古墳　鎌倉	掘立柱建物　溝	古式土師器　土師器　須恵器	
雛川遺跡　第２次	集落	古墳　平安　鎌倉	掘立柱建物　井戸　溝	弥生土器　古式土師器　土師器 須恵器　石製品	

太宰府・佐野地区遺跡群　16

－佐野土地区画整理事業に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書－

太宰府市の文化財　第66集

平成15（2003）年３月

編集　太宰府市教育委員会
発行　教育部　文化財課

〒818-0198
福岡県太宰府市観世音寺１丁目１番１号

印刷　株式会社　三光

〒812-0015
福岡県福岡市博多区山王１丁目14-4